

【第5章】 高齢者からの学びで浮き彫りになった「ご近所福祉」

1 「劇団ほのお」大石さきさんとの出会い

昭和50年(1975年)ごろから、静岡県藤枝市を中心に、高齢者による「劇団ともしび」が結成され、高齢者自らが市民に演劇を通じてわかりやすく高齢者を取り巻く様々な問題を提起をし、理解を深める活動を精力的に取り組んでいる話題が県内に広がっていた。

その後、10年を経過して、「劇団ともしび」は、燃え尽きるまで活動に取り込もうと「劇団ほのお」に改称し、県内外に年間30~40回の公演を重ね、なんと平成20年(2008年)には、通算800回の公演をこなしていることが、更に大きくマスコミに取り上げられていた。

静岡県は、昭和59年以降「地域福祉推進事業」に取り組み、県内各市町において地域福祉実践事業を積極的に推進する中で、地域の福祉課題を見える化・わかる化した、高齢者問題のこうした具体的な活動を高く評価し、地域住民への福祉教育の視点から、高齢者による「劇団ほのお」の精力的な取り組みは、先進的な取り組みとして、更に県内外に広く紹介されていた。

本会は、平成8年結成と共に、「劇団ほのお」の活動こそ「福祉文化」そのものと認識し、日頃から連絡を取り合い、何度も事務所を訪ねて、主宰の大石さきさんから、演劇活動を始めたきっかけや、演劇活動へ思い、高齢者の立場から家族や身近な地域(ご近所)の現状や課題等を学ぶ機会を持った。

日本福祉文化学会が「実践・福祉文化シリーズ 地域社会と福祉文化」(明石書店出版)を2002年(平成14年)11月発行(今から23年前)するに当たり、静岡県の実践活動事例の寄稿依頼を受けて大石さきさん宅を訪ね、「劇団ほのお」に寄せる熱い思いを次のように書き綴った。



日本福祉文化学会監修「実践・福祉文化シリーズ 地域社会と福祉文化」(明石書店出版)
●第Ⅱ部 地域で織りなす福祉文化 第3章 地域の教育活動と福祉文化
「おばあちゃん劇団ほのおの演劇活動」

(1)「劇団ほのお」と福祉啓発

“おばあちゃん役者”が、笑いと哀愁で高齢者問題を演じてみせる「劇団ほのお」。

静岡県藤枝市で、元保健婦の大石さきさん中心に結成してから25年になる。結成当時団員は30名とにぎわっていたが現在7名、その全員が大正生まれの80歳パワーである。

これまで、毎月平均2回の公演をこなし、これまでの公演回数は700回近くなる。

公演は、地元藤枝市だけではなく、精力的に県内外に出かけて公演活動を続けるかくしゃくぶりである。

「劇団ほのお」の主宰である大石さきさんは、1975年に定年退職するまで、保健婦として約30年間活躍した。定年退職後も、福祉事務所の高齢者担当の保健婦として勤務をする。

1975年10月、仕事で高齢者の家庭を訪問したことがきっかけとなって、「劇団ともしび」を結成した。その時の思いは、高齢者に健康づくりの重要性を訴えるとともに、多くの人びとの心に、高齢者の病気や老いに対する不安、さみしさを訴える、というものであった。

その後、「劇団ともしび」を「劇団ほのお」に改名した。そこには、炎のように、燃え尽きるまでという、「シルバーパワー」の意気込みが秘められている。

大石さきさんという、「脚本の素材は幾つもあるんです。大筋は私が考えますが、全てオリジナル、セリフはアドリブです。」大石さきさん自身も、役者として、おばあちゃん役、町医者役と何でもこなす大活躍をする。簡単な舞台装置の中で繰り広げる演技は、痴呆のおばあちゃん、血圧の高い息子夫婦、それに単身赴任している孫の、どこにでもありそうな都市志向家族の出来事のドラマに、公演会場は、涙と歓声が沸き起こるといふ。

痴呆のおばあちゃんとお茶のみ友だちは「生きていく希望が無くなりましたね。」「私らに、早く死んでほしいってことだかね。」などこぼすセリフは、現実の切実さを通り越して、観客は、つい涙を流しながらも笑ってしまうという。

老いること、その本音が虚と実の境目でユーモアに演じられ、その姿に惹きつけられ、共感し、拍手がなり止まないようだ。

実に、複雑かつ多様な高齢者問題をテーマに、豊かな内容で、数えきれないほど脚本にし、これまで数々の公演活動を繰り広げている。いくつか紹介すると、

- * 「福寿草」…同居する嫁と姑の関係
- * 「山のかなたに」…中年夫婦の生き方を見つめる
- * 「すこやか」…健康は、自分自身がつくるもの
- * 「悪の華」…訪問販売にだまされる高齢者の心理を考える
- * 「土に生きる」…農家の嫁の問題を訴える
- * 「淡い虹」…高齢者も、人を好きになろう
- * 「ふれあい」…嫁と姑の心の葛藤を描く
- * 「絆」…高齢者夫婦の愛の姿
- * 「家族Ⅰ」…家族とは、世代の断絶とは
- * 「家族Ⅱ(遺言)」…遺言による遺産相続をめぐる様々な醜い問題を描く
- * 「家族Ⅲ(オレオレ詐欺)」…孫可愛さにだまされてしまう、お年寄りの気持ちを描く
- * 「家族Ⅳ(虐待)」…お嫁さんにいじめられて痴呆になったおばあさん死後の家族を描く
- * 「シグナル」…交通ルールの認識を高め、高齢者の交通安全を呼び掛ける
- * 「ひとりぼっち」…連れ合いに先立たれたお年寄りの心境を描く
- * 「燃えるシルバー」…老夫婦が若い世代との交流を図るために立ち上がる

これまで、「劇団ほのお」を取材されてきたマスコミ関係者は、「日常の生活の中にある、細やかな動きや、やり取りを見事に捉え、普通の商業演劇にはない、素晴らしいものが滲み出て多くの人たちの共感を呼んでいる。また、お年寄りが、自分たちも、世の中に向かって働きかけていかなければならないという、力強さを証明し続けている」と評価をされている。

大石さきさんという。「全ての高齢者が、家族や地域に向けて訴えることは出来ない。私たちは、全ての高齢者の代弁者として、高齢者の生きがいと幸せを願い、高齢者自身が考え、共

に支え合おうと訴えている。」と強調する。

(2) 高齢者による住みよいまちづくりをめざして

大石さきさんは、演劇活動を通じて、つねに観客に呼びかけている。それは、高齢者の問題は、決して高齢者だけの問題だけではない。若い人たちの問題でもあり、男女共有した問題でもある。「老年期は人生の総決算。美しく健やかに老いることは、若い頃からの積み重ねなんですよ。若い時から種をまいておかなければね。」と力強い口調で語る。

「劇団ほのお」の活動は、忘れかけた親子の情愛や地域の連帯感などについて、みんなで考え、老いも若きも、男も女も、ともにふれあい、支えあう住みよいまちづくりをめざしている。



日本福祉文化学会は、その後、2010年11月には、「新福祉文化シリーズ3 新しい地域づくりと福祉文化」(明石書店出版)を発行するに当たり、「第Ⅱ部 福祉文化活動最前線 第1章 地域をつくる新しい力」に、ご近所福祉の視点から、「劇団ほのお」のその後の実践活動事例をレポートしてほしい旨の要請を受けて、次のようにまとめた。

●第Ⅱ部 福祉文化活動最前線 第1章 地域をつくる新しい力 「市民参加の劇団」誕生で、「ご近所福祉」が変わる

(1) 「おばあちゃん劇団」が長寿者(高齢者)の自立を訴える

藤枝市は、人口14万5千人、世帯数5万2千世帯で年々増加の傾向を有し、市民が暮らしあう、歴史と文化を引き継ぐ、自然豊かな環境を有しているこのまちの「大洲地区」に、94歳を生き生きと暮らしている「大石さきさん」がいる。住み慣れた地域で、居場所を持ち、仲間とともに、語り合いながら日々を送っている大石さきさんの居場所として開設した「劇団ほのお事務所」には、地域の仲間たちとの語り合いや相談の場所として、いつも人の出入りでにぎやかである。

演劇を思いついたのは、保健婦時代に、うつ病症状が多く、当時行政の取り組みとして、具体的に家族にわかりやすい学習方法のひとつとして取り組んだのが最初。また、当時の民生委員活動が、問題を抱えている家庭や家族と接することの難しさがあり、ともに活動をした時代もあつ

た。その後、長寿者(高齢者)の健康づくりや病気や老いへの不安、そして、さまざまな日々の暮らしあいの中での寂しさを何とか、明るい兆しに見える長寿者(高齢者)の生活にしていく取り組みが必要であると痛感したことからだという。長寿者(高齢者)の寂しさは昔も今も変わらない。地域の仲間が先立たれる寂しさ、そして、よきパートナーのどちらかが先立たれる寂しさ、そして、今日では耐えがたい寂しさは、家族や地域社会から見放される寂しさである。時代とともに、長寿者(高齢者)を取り巻くさまざまな生活問題を自ら演じることで、共感しあいながらも、現実を見つめあう中で、問題提起と解決につながることを期待した。

周囲の保護的環境をよしとして、受身的な生活に終始しているがために、従わざるを得ない今の時代に、もっと現実の社会と向きあい、長寿者(高齢者)は「自立」しないといけない、と言葉に力がこもる。「劇団ほのお」は、94歳の大石さきさんを代表に平均77歳の劇団パワー。



(2) 「老いの準備学」講座の夢を託しながら、900回の公演に挑む

1975年に結成した「劇団ほのお」は、時代とともに、長寿者(高齢者)自身の問題を演劇に託し今も創作活動が続く。「おれおれ詐欺」から「嫁姑」そして「孤立」「自殺」と脚本を創作するには困ることはひとつもないほど、今の社会は多くの問題が溢れていると言う。

北は埼玉県から、南は九州まで、これまでに830回ほどの公演回数を数える。

公民館領域から、女性団体、老人クラブ、社会福祉協議会、男女共同参画団体、NPO団体、行政と幅広い公演依頼先であるが、中には「幼稚園」や「大学祭」「子ども会」と言った領域からの依頼に、社会そのものの縮図を感じると語る大石さきさんの言葉にどっしりとした重みを感じる。演じる大石さきさんたちは、観客の「拍手」と「笑い」「涙」が唯一のバロメーターであり、そこには、劇団員と観客との一体感が漂う手ごたえを感じる。

演劇活動を振り返りながら、思うこといろいろある中で、長寿者(高齢者)には、「もっと元気」そして「自立」「生きること」、若者には、「家族の絆」と「自立」、大人たちに向けては、「互助」「地域の連帯」、さらに、ご近所については「支えあうこと」「声かけ」「さりげない見守り」と淡々と語る。いずれにしても、大石さきさんからのメッセージは、現実の社会で、実践することだと訴えている。

劇団結成から、間もなく900回の公演回数にむけて、更に脚本を書き続ける大石さきさんの筆にますます力が入る。仲間たちとの語り合いの中に、最近「老いの準備学」の講座実現にむけた提案も出て、さらに夢は膨らむ。

「おばあちゃん劇団・ほのお」は、これまで35年余に渡り、何度も解散の危機に直面しながらも、長寿者(高齢者)自らが、現役時代に培った保健と医療、そして福祉を融合した尊い英知と仲間同士の絆により、長寿者(高齢者)の自立を自らの演劇により、地域社会や長寿者(高齢者)の仲間に訴え続け、迫り来るさまざまな社会問題に如何に対処すべきか、そのあり方を「長寿パワー」で演じ続け訴えている。「自立への挑戦」とも受け止められる。

「おばあちゃん劇団・ほのお」への期待は、支えあうご近所福祉の絆から、さらには、地域社会へと大きく広がっていく。



本会は、高齢者を取り巻く地域課題をテーマにした研修会には、大石さきさんが日頃から訴えつづけていた、若い世代に直接訴えていきたいという思いを実現できるように努力をしてきた。

こうした、本会と大石さきさんとの日常的なつながりは、大石さきさんに歩み寄りながら積極的に地域活動に取り組まれている、藤枝市内の地域実践者・宮澤正子様は、本会の活動の趣旨をご理解いただき、多大なご支援をいただきながら、「静岡発 福祉文化の創造」を発信し続けた。

県内各地のNPO法人や、教育機関等との共催事業には、大石さきさん自ら、地域社会に「共創社会実現」を訴えていただき、各種研修会実現に努力を続けられた。

●本会主催「公開型研修会」で、福祉文化を語る

本会が、平成20年5月31日に開催した公開型研修会のテーマ「地域で豊かに暮らし合うための条件—長寿者と福祉文化—」に、大石さきさん(当時93歳)をお招きし、いかに、長寿者と共に暮らし合うかを、大石さきさんのこれまでの人生を振り返りながら、熱く語っていただいた。

会場は、高校生から90歳まで、非常に幅の広い年齢層約30名が参加者した会場は、なにか地域社会を凝縮した雰囲気であった。

近年、高齢者が狙われる振り込め詐欺や、認知症、家庭内での孤独など、高齢者を取り巻く社会問題に心を痛めている大石さきさんは、現役時代保健師として活躍した経験をもとに、家族間や社会の人間関係など、数々の経験をきめ細かく、演劇を通じて若い世代に伝えている。

これまで、北は埼玉県から南は北九州市まで、全国で890回を超える演劇の公演を重ねている。公演の対象は、同世代の時もあれば、若者・学生や幼児までと、実に幅が広く境は全くない。この研修会で、大石さきさんは、これまでの県内外各地の公演活動を振り返りながら、高齢者の代弁者として、交流された尊い体験を語った。



埼玉の大学の公演の後に、若者たちとの意見交換で、地域との繋がりは若者にとって、とても重要であると語ったことに感銘を受けたと語られた。

東京都内の幼稚園から公演依頼があり、一日園児とふれあい交流して過ごした最後に、大石さきさんと園児たちが握手を交わした時、園児たちが「おばあちゃんたちの手は温かい」と言葉を発したときには驚いたと語った。

核家族化の今日、都会の子どもたちは、日頃、日常的に高齢者とふれあう機会がない寂しさを実感したという。

最後に、強い口調で、「この世に生を受けてから死ぬまでが福祉」「今日、子どもが事件に巻き込まれる社会になっている」「親孝行が見られない世の中になっている」「今、高齢者は、孤独と隣り合わせに生きている」「人は、一人では生きられない。支え合って生きている」「孤独が一番悲しい。」「高齢者には優しい言葉をかけてほしい。」と参加者に訴えて締めくくった。



●念願かなった、若者との共演で、高齢者理解の訴えを実現した「はっぴい祭」

精力的に地域に根ざした活動を展開している「NPO法人メイト・草笛」から、高齢者理解のための啓発事業に取り組みたいと本会に相談があった。加えて、若い世代の参画を切望していた。

平成17年度が始まった直後のことであった。本会の役割は、会場手配・交渉と若者世代をどのように参加を呼び掛けることが出来るかの2点であった。焼津市内の「静岡福祉大学」に出向き、事業企画書「笑顔が一番・あなたが主役！はっぴい祭2005」（高齢者の作品展示・演技と作品販売）に基づき共催（会場提供と学生の事業参画）のお願いをした。大学側から、会場提供は、夏期休暇中の使用を条件に、全面的な協力をいただける旨の回答をいただき、直ちに主催者と連絡を取り約4か月の準備期間をもって実現した。

単年度の事業として取り組んだが、その後、関係方面から継続的な開催の要望と共に、大学側からは、拓かれた大学と福祉領域における高等教育をめざしている観点から、継続的事业の取り組みに期待する意見をもとに、平成18年度と平成19年度の3年間の継続事業となった。

予てから、大石さきさんとお会いするたびに、何時かは、若者との共演を実現したいと語っていることを思い出して、大石さきさんに相談すると仲間の皆さんと協議をされ、早々に2年目の「笑顔が一番・あなたが主役！はっぴい祭2006」に、「おばあちゃん劇団ほのお」による、学生との共演「ぬくもり」の上演が決まった。その後、大石さきさんが綴った脚本が早々と届き、本会は、主催者と共に、共演する学生を選考した。

認知症のおばあちゃん役の大石さきさんと、まだ認知症を理解していない若者役を学生が演じ、大石さんの、ストレートなアドリブをかわしながら、認知症のおばあちゃんをしっかりと受け止められるま

でのいきさつをうまくまとめあげ、参加者から拍手喝采を浴びながら幕を閉じた。

大石さきさんにとっては、思いがけない若者との共演を果たした思い出の一コマでもあった。

脚本家でもあり、名女優ともマスコミは称賛し、高齢者自らが、演技をとおして、地域が抱えている問題を高齢者だけの問題にしないで、地域社会全体の問題としていることの意義をここでも大きく評価した。

「福祉文化」を理論立てて理解することの他に、福祉課題を見える化し、わかる化することにより、世代を超えて学び合い、それぞれの立場で、いかに課題解決に関われるかを共有することこそ、そこに「福祉文化」が存在しているようにも感じた。

その後、大石さきさんは、このような経験を、静岡新聞の「読者の広場」に投書されていた。

平成18年(2006年)8月9日(水曜日) 静岡 県民

「劇団ほのお」と福祉の大切さ訴え

焼津 静岡福祉大ではっぴい祭



「劇団ほのお」と学生 NPO が共演した舞台
＝焼津市の静岡福祉大

地域福祉の在り方をイベントを通じて考える「笑顔が一番・あなたが主役! はっぴい祭 2006」が8日、焼津市本中根の静岡福祉大で開かれた。あいにくの雨に

もかわならず、市民や志大地区の高齢者福祉施設利用者が多く詰め掛け

NPO 法人「めいと草笛」(堀佐智子代

表)と同大が昨年到现在共同開催した。庶股利用者が制作した陶器、はり検、パッチワークなどの作品展をはじめ、学生ボランティアが運営する軽スポーツ体験コーナー、歌や踊りのステージを多彩に盛り広げた。

メインは「おばあちゃん劇団」として知られる焼津市の「劇団ほのお」と学生、NPO が共演した舞台。認知症の高齢者と出会った大学生が福祉の大切さに目覚めていく姿を通じ、世代を超えた交流と地域全体で高齢者を支えることの大切さを訴えた。

静岡 県民 平成18年(2006年)9月7日(金曜日)

福祉文化への実行力に感銘

焼津市・大石 さき (劇団代表 別紙)

八月五日、静岡福祉大とNPO法人めいと・草笛との共催で「あなたが主役・はっぴい祭」が大学体育館で行われました。私たち「おばあちゃん劇団ほのお」もスケジュールの中に入れていただきました。

大学生と一緒になって上演したオレオレ詐欺で、老人がだまされる劇で、なげたまされるが、私なりの考えで老人の心の中を知っていたため、劇でしたが、それはさぞおき、会場は中学生、高校生、一般の方、老人の方が三百人も集まりました。

特に特別養護老人ホームの方が早いですで来られ、その方の介護のボランティアを学生が親切にやっておられたこと、また施設での老人の手藝・書画作品など素晴らしい出来栄に驚きました。あの暑い日に盛り、それからそれへと市民の方々が会場へ来るその熱心さ、幼稚園から高齢者の方々の歌や演奏会熱心に見入っているその姿、人と人とのコミュニケーション、これが福祉文化であり、福祉文化であることと心をとらせたと思いました。

とかく理論のみで実行が伴わない現在、ただただ深く感銘を受けました。住民参加の、開かれた大学として地域の人を抱き込んだこのイベントに、福祉と何たるやを感じ、主催者に対して深く敬意と感謝を申し上げたいと思えました。

2007年度(平成19年度)3年目の「笑顔が一番・あなたが主役! はっぴい祭 2007」は、大学がこの期間に開催した「オープンキャンパス」に併せて開催し、来場した高校生や保護者にも、「おばあちゃん劇団ほのお」の演技から、真の福祉を理解する学びの場となった。大石さきさん(当時92歳)の日々の活動と、本会が当時、高齢者の孤立。孤独問題に取り組んでいた、静岡県委託事業「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」と関連づけた紙上対談方式の取材要請を受けた。

静岡新聞連載特集「ひと日和 孤立⑤完」、見出しは、なんと「誰でも年を取るんですよ」。

ひと日和

孤立 ⑤完

誰でも年を取るんですよ

「家族は？」
 「両親とおじいちゃん、おばあちゃん」
 「皆さん元気？」
 「おじいちゃんはずっといない」
 「どこにいるの？」
 「知らない」
 「探さないの？」
 「探さない」



「もっと年寄りを見たわってほじ」と話す大石さん(藤枝市大洲)

35年もの間、県内外で家族愛や絆をテーマに850回近く公演を続け

ているおばあちゃん劇団「ほのお」の代表大石さき子さん(94)は今夏、静岡市の繁華街で交わした10代の少女との会話が今も耳に残る。

「ちょうど新聞やテレビが高齢者の所在不明を流していたころです。何だか空恐ろしくなりましたね」

藤枝市の保健師を38歳で定年退職したころ、世の中では「高齢化社会の到来」が叫ばれていた。老後をどう生きるか悩んでいた大石さんに福祉事務所から「老人問題を担当してほしい」と依頼があり、嘱託として8年間、啓発や相談事業などに取り組んだ。

「若いときに考えていた高齢者問題への見方がいかに薄っぺらだったか、自分が年を取って実感しました。年寄りの気持ちには年寄りにはかかわらない。そこで劇を思いついたんです」

福祉問題に精力的に取り組み平田さん(静岡市葵区の東総合社会福祉会)



1975年、民生委員や保健師の仲間34人で劇団を旗揚げ。「どうせ続いても数年、地道に続けよう」と「ともしび」と名付けたが、予想外の反響を呼び、77年に「なら懸え屋(るまで)」と「ほのお」に改名、今

も平均80歳を超す5人のメンバーで月2回、県内外で公演をこなす。

長年、高齢者問題に携わってきた大石さんですら、高齢者の所在不明は謎だらけ。「不明なのになぜ家族が平気でいられるのか。年寄りが家を出て行くのはよほどのことなのに」

大石さんから見ればまだまだ若い60代、70代の高齢者にも手厳しい。

「探せば仕事はいくらでもある。ただ、働くためには健康第一。50代から体も心もしっかり老後の準備をしないとな」

家族にも一言「年寄りを尊敬にしないで。ちょっとした仕事でもうれいもの。誰でも年を取りますよ」

「福祉」をライフワークにしている元静岡福祉大教授で、静岡福祉文化を考える会代表の平田厚さん(67)

「浜津市石津」も地域で絆が薄まっている現状を憂える一人。

県が進める「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」にかかわって3年目。地域診断(調査)やモデル地区設定、啓発・学習活動などに取り組んでいるが、「年々『福祉離れ』が進み、ボランティアを募集しても集まらない」と危機感を募らせてる。

「先日、学生と話していたら自治会や町内会がイメージできない学生がほとんど。要するに親が接点を持っていないので子にも伝わっていない」と平田さん。互助の関係が崩れていると指摘しながらも、学校教育の中で「ミニミニティー」の問題をしっかりと教えるべき」と提言「高齢になつてから地域にすかっても遅い。現役のころから地域の中で居場所をきちんと見つけることも大切ですよ」(次回のテーマは「転身」です)

●長寿者の心境を「社会教育カフェ：焼津の居場所を拓く」で熱く語る

大石さきさんが、日頃から訴えてこられたもう一つは、「社会人の教育」があった。

児童生徒は、少なからず、学校教育で福祉に関する学びをしている。成長と共に、大人になり、家庭・家族をもった時に、地域のこと、取り分けご近所の付き合いや、地域行事への関心を誰が働きかけていくのか、高齢者の立場から、心配することが多くなってきたと話されていた。

家族・家庭から見放されている高齢者の仲間は多いと訴えていた。高齢者自身は、決して甘えてはいけない。自助努力こそ大切ではあるが、高齢者を取り巻く地域環境は、支え合うことが希薄化し、高齢者の居場所が失われ孤立・孤独化すると、強い口調で地域社会に訴えているようにも見えた。

「福祉と教育の融合」については、本会の様々な研修の場で再三論議をしてきた経緯がある。

また、各地では、さまざまな形で、成人対象の講座を通じて、こうした地域課題をいかにして、住民主体で取り組むかを学ぶ取り組みをしている。

焼津市社会教育委員会では、社会教育委員の自主的活動として、世代を超えて、市民と共に語り合う「社会教育カフェ」に取り組んでいた。平成27年度は、社会教育領域から「地域ぐるみの居場所づくりを考える」をテーマに開催するにあたり、大石さきさん(当時99歳)をゲストにプログラムを組みこなった。若者と共に、対談方式の学びには、市内外から約60名が参加して、高齢者を取り巻く地域環境の今とこれからを学び合うことが出来た。

大石さきさんは、「高齢者は、決して甘えてはいけない。家庭で地域で、自分で出来ることは進んで取り組むこと。その上で、身近な地域社会での温かい見守り・支えがあって初めて、高齢者は生きがいを感じる。全ての高齢者が主張できることではない、今私は、代弁者として地域に呼びかけたい。」

いつもながらの熱い思いを、精一杯語っていた姿はいまでも忘れられない。



2015年(平成27年)10月19日 月曜日
享月 日

劇団主宰の99歳
大学生らと語る
焼津で「社会教育カフェ」
焼津市石津橋町の港公民館で17日、藤枝市内でおばあちゃん劇団「ほのお」を主宰する大石さきさん(99)を招き、市社会教育委員会(平田厚委員長)主催の「社会教育カフェ」が開か

れた。社会教育委員や地域住民、約20人の大学生などが、地域の輪もが気軽に訪れることができる「居場所」づくりを語り合った。藤枝市校所の保健師だった大石さんは、定年退職後の1975年以来、地域の高齢者が直面する家族や健康、介護、認知症などの問題をテーマに県内外で約900回の劇を公演。来年3月に100歳の誕生日を迎える。この日、「高齢者は声をかけられればうれしい。どうかもっと高齢者と話し合ってほしい」と訴えた。

地域住民と社会教育委員が話し合う焼津市の社会教育カフェは、2011年度に始まり通算7回目。話し合いをもとに港公民館に高齢者や若者が幅広くつどう「居場所」が生まれた経緯や、昨年度、のべ188人の学生が大石さんと交流した研修成果も発表された。



*多くの若者たちも参加して、数々の学びの集いが終わった後に、大石さきさん(中央)を囲んで記念撮影

2 若者が「ご近所福祉」を学ぶ「高齢者宅訪問型研修プログラム」の意義

「劇団ほのお」代表 大石さきさんとの出会いから、交流を深め語り合うたびに、大石さきさんが切実に語られていたことは、「高齢者自身が甘えていてはだめ。高齢者なりに、積極的に家族や地域社会に向って存在感を示していかなければならない。」と、まず、高齢者の自助努力が必要であると強調する。そして、「もっと、世代を超えた地域交流により、お互いに歩み寄ることは出来ないのか」「特に、若い世代の人に聞いてもらいたいことがたくさんある」「ご近所に住んでいて感じることは、ご近所のことをだれが若い世代に教えていくのか」「子どもを持つ若い親に、地域社会のことを誰が教えていくのか」等、人生の大先輩である大石さきさんが、地域社会に託したい思いが、ひしひしと伝わってきた。

大石さきさんの地域社会に向けた熱い思いは、これまで、いろいろと語られてきた「私たちを取り巻く4つの環境」を改めて考えなければならない。



まず第1に「人的環境」（話れる環境）があげられる。話れる環境をつくることこそ、問題解決の第一歩とを感じる。しかし、今日では、容易に、物事を解決できる様々な手法が出来るようになり、人々の関係づくりは複雑化の様相である。

第2は、「物的環境」（地域の資源の有効活用）。過去には、それぞれの家庭に居場所を持ち、話し合いの場もあった。しかし、今日では、個々の家庭に居場所機能が薄れ、小地域の中で、語り合う場所づくりが求められている。

第3は「空間的環境（ホッとする居場所）、第4は「自然的環境」（地域の良さの発見）。

ここでは、特に、長寿者と向き合う、話れる地域環境をいかにして作り出せるかである。

本会では、平成20年度から平成26年度までの7年間、「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」（静岡県委託事業）に取り組んだ。この事業は、高齢者が地域社会から孤立・孤独にならないための県民に向けた啓発事業の取り組みである。

本会は、この大きな社会問題に取り組む課題として「1年次：長寿者（高齢者）の自立」「2年次：長寿社会への課題」「3年次：生活圏域における支えあいの仕組み（ご近所福祉）」「4年次：生活圏域における一人一人の居場所を考える」「5年次：家族ってなに？私の居場所はあるか」「6年次：ここが一番、ホッとする私たちのご近所の居場所づくり」「7年次：人々が豊かに暮らし合い、安心して暮らせる地域づくりー長寿者をつなぐホッとするご近所づくりー」を事業のプロセスとして、

- (1) 「地域総合型学習」 延べ41回の「公開型研修会」の開催（延べ2,000名の県民参加）
- (2) 「地域実践活動の検証」 33市町（政令市除く）のうち、60%の地区での実践展開
- (3) 「調査研究活動」 7年間、毎年度テーマを設定し調査に取り組む

の3つの柱をもとに、課題解決に取り組んだ。

この7年間の事業展開の中で、日頃から、大石さきさんが訴え続けてきた、若者層の地域理解の課題解決の一つの試みとして、静岡県委託事業の(1)「地域総合型学習」の一環として、平成25年度・26年度の2年間「若者が長寿者から学ぶご近所福祉」を設定し、「長寿者を囲み本音で語る“ご近所福祉”のこれから」を研修テーマに、24回、延べ243名の若者（大学生）が当時98歳を生き生きと暮らす大石さきさん宅を訪問し、若者たちが、真剣に実社会で生活している高齢者から、「高齢者が安心して暮らせる“ご近所”ってどんなところ？」「若者は、ご近所で心掛けていかなければならないことはなに？」と、高齢者を取り巻く地域社会のあり方を真剣に学んだ。



*98年間を振り返り、若者からの質問に答える大石さんの姿 *自分の祖父母と向き合うコツを引き出そうとする若者



*誰だって、いずれは、みんな年を取ることを忘れないこと、年寄りを大事にしなきゃいけない



*大石さきさんに、若者への期待はなにかの問いかけに、決して年寄りを粗末にしないことを強調



*大石さんのご近所の話、必死にメモを取る若者



*毎回15~20名が大石さん宅を訪問しご近所を学びあった

3 高齢者に学んだ若者が捉えた「ご近所福祉」

●高齢者から学んだ「真のご近所のあり方」とは

- (1) 高齢者と日頃話をする機会がほとんどない若者は、時代をしっかりと回想する中で、地域をここまで築いてくれたことを感謝しなければならない。戦争も経験した尊い出来事を風化させず、継承して地域づくりに心掛ける。
- (2) 私たちは、今日、物の豊かさの中で便利な生活をしているが、「心の豊かさ」を持ち続け、身近な生活圏域における、人とのつながりを大切にしていかなければならない。高齢者が、今の社会を大変危惧している気持ちが伝わってきた。将来に向け、誰もが安心できる地域への貢献こそ大切だと感じた。
- (3) 何か、ボランティアと構えている若者は、改めて感じたことは、高齢者からボランティアをいただいていることに気づいた。ともに支え合う地域づくりは、決して上下をつくらない。
- (4) 祖父母とこれまで生活していた私(若者)にとって、高齢者から学び、我が家と重ねて考えることが出来た。疑似体験ではなく、実体験こそ学びが大きい。
- (5) 他者とのつながりや関連性について考えることができた。改めて、若者が積極的に身近な地域に出て若者に何が出来るかを考える場となった。
ご近所福祉とは、共に支え合うことだと感じた。
- (6) もっと、身近なご近所で、長い人生を生き抜いた高齢者の話しを、自ら学び取り、強く生きることこそ、地域参加の一步だと学びとることができた。 高齢者の話で元気がもらえる。また、若者が高齢者に少なからず元気を与えられる存在であることも学んだ。
これまでは、高齢者と若者の話し合いは不思議な感覚を覚えていたが、また話し合いたいという心地よい環境であることがわかった。



●若者から高齢者への質問に、若者への「アドバイス」は

- (1) 私たちと同じ年代におけるご苦労はなにか。
⇒医療が進歩していない時代、子どもを亡くし悲しんでいる家族を見た保健婦時代の苦労。
- (2) 現代社会における、パソコン・スマートホンの存在どう感じるか。
⇒私たちが使ってみたいという気持ちはあるが流行にはついていけない。
若者は社会の流れについていかなければいけないが、実際に人と会って、しっかりと向き合ったコミュニケーションをとることを忘れてはいけない。
- (3) 人と向き合う仕事で気をつけることはなにか。
⇒相手を誤解しないように、相手をよく理解し信頼すること。



(4) 価値観、感じ方の違いをどう受け止めたらいいか。

⇒ 同じ気持ちで考えること。互いに良い面もあるので否定することなく対等な価値観を共有することは大切なこと。

(5) 生きがいについてはどうか。

⇒ 「最後の最後まで希望を持つ」「人と関わる」「健康で気力を持つ」「生きがいは、自分のものと、支えてくれる周りの人にある」

これが生きがいというものではなく、生きがいをつくるための周りの環境こそ大切。

(6) 若者の自殺が多いことについてどう感じるか。

⇒ 今の母親に、昔と違う大きな変化（精神的）がある 命の大切さをわかっていない。

子どもの育て方の違い、面倒なことに耐えられないなどが感じられる。

(7) 大人社会に望むことはなにか。

⇒ 会話をすることの大切さや礼儀をもっと重んじてほしい。子どもは、親の背中を見て育つといわれてきた。親が自ら、しっかりとした礼儀作法を学ぶ必要がある。

(8) 近所の人との会話は、身内の人とは違うのか。

⇒ 違う。近所の人とは、昔話もでき、身内にも言えないことが言える。日頃から、身内の人も、高齢者に歩み寄ってほしい。

(9) これまでの人生で、経験が役に立ったことは？

⇒ 言葉かけをすること。大勢の人と接すること。人脈やつながりをもち会話をすること。

(10) 現在の若者をどう思うか。

⇒ 長い人生で、これまで、じっくりと本音で若者と話す接点が無かった。若者たちと話したことで、若者の気持を理解できるし、私も若返る。

(11) 死について考えたことはあるか。

⇒ 高齢者はとにかく淋しい。家族や周囲は、高齢者を大切にすること。感謝の念をもつこと。



●高齢者から学んだ「ご近所福祉」とは

(1) ご近所福祉の始まりは「挨拶」から。

すぐにも出来る行動。自分とは違う年代と積極的に交流すること。

(2) 家族の中でも会話が少ない。高齢者にも問題があり、高齢者の自立を考えなければいけない。

家族で、地域の問題・話題を話し合うことが大切。

(3) 遠くの親戚より近くの近所づきあい、いざという時に助け合える。

高齢者と若者とのふれあい交流行事参加の場づくりの努力が求められる。

(4) 昔は便利さより人の温かさがあった。今や、隣組を大切にしなければならない。若者、高齢者が互いに偏見を持たない。近所の人との関わりが重要。そこから生きがいが見つかる。

(5) 地域の福祉どころか、身内の福祉もできていないと感じる。私たち一人一人が何をすべきかを考えていくことで、よい地域づくりにつながる。誰かがではなく、地域全体で支え合うこと。相互に理解し、価値観を共有することが大事。

(6) 地域の人を集めるのではなく、集まる自然な地域環境づくりに努めることが大切。

(7) 損得を考えず、ご近所づきあいは、感覚で行われるものである。

(8) ちょっとした一言で、高齢者は地域に必要と感じる。さりげない見守りがいい。

(9) 「家族に見捨てられた」と感じる高齢者が多い。見捨てられる思いをなくし、若者が積極的に高齢者に歩みよる努力がほしい。

(10) 「福祉」とは、挨拶、助け合い、親切心など、当たり前のことを当たり前でできること。福祉制度やサービスをあてにすることなく、まずは、身近な人への“お互い様”で歩み寄ること。



●若者「地域出番」を質す

(1) 様々な地域行事があるが、若者の参加が少ないように思う。もっと若者が地域活動に参加する必要性を感じる。

(2) 若者自身が積極的に多世代と交流することが大切である。

(3) 中高年者には負けない体力を生かし、若者が地域の活動に積極的に参加する。

(4) 若者は流行にも敏感であり、そのことを利用して、地域活動の場に若者を集めること。

(5) 災害が発生した際には、子どもや高齢者を優先して助けられるよう防災訓練に積極的に参加する。

(6) 訪問型ボランティアの実践は意義がある。

(7) 自分の住む身近な地域について関心を持ち、現状を知ること。

(8) まずは、誰にでも挨拶すること。

(9) 高齢者だけに目を向けると傾いた考え方になってしまうので、若者の考えもしっかり取り入れて、地域づくりに参画する。

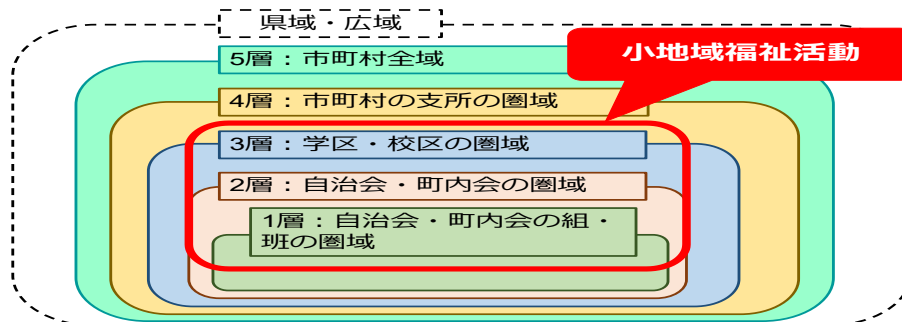
(10) 若者が地域活動に参加することで、次の世代へもつながり、地域全体の雰囲気が良くなる。

(11) 地域行事には、その地域特有の歴史文化があり、高齢者・年配者の参加は必要不可欠。そこに若者が参加すれば活気が増す。若者が地域の歴史文化伝統を学び、次の世代に伝えていける。

- (12) 若者が、地域の子どもから高齢者まで集まる機会をつくる努力が必要。
- (13) 若者が、地域社会に積極的に参加していくことが重要である。(実際はできていない)。
若者として、担える役割を大人社会に問い質すこと。
- (14) 高齢者の経験・知恵と若者の機動力の両者が協力し合うことでよい社会となる。
- (15) 高齢者に感謝の気持ちをもって、高齢者が安心して暮らせる良い地域をつくる努力をする。
- (16) 私たち若者が地域との関わりを持たないと、ますます希薄化、孤立化が進んでしまう。
- (17) 「地域のためになることをしたい」と考えている若者は、大人が考えている以上に多くいるはず。
その若者の力を活かすためにも、若者に向けた情報を積極的に発信すべきである。
若者の地域参加が増えれば、異なった世代同士の結びつきや地域活性化につながる。
- (18) 若者はアルバイト、サークルなど限られた社会で過ごすことが多い。そのため、考え方や視野が狭くなっている。大人社会が、積極的に若者向けに、地域参加を呼び掛けてほしい。
- (19) 若者は電子機器に精通しており、その能力を活かした地域活動への参加は可能である。
- (20) 自分の地域の居場所を確保する。
- (21) 自分の地域への愛着を持てるような生活を心掛ける。
- (22) 高齢者が地域で軽スポーツが出来るような環境整備をし、これをサポートする若者を地域全体で、積極的に呼び掛けていく。
- (23) 若者の意見等、新しい考え方を、地域が否定することなく受け入れる努力が必要と思う。
- (24) 地域で、必要とする若者の役割・出番をつくり、地域のリーダーシップが取れる環境をつくる。
- (25) 若者の得意な領域を高齢者に提供し、世代をつなげる工夫をしていく。

➤ 重層的な圏域設定のイメージ

(ある自治体を参考に作成したものであり、地域により多様な設定がありうる)



➤ ご近所福祉とは??

1. お互いを認め合う
2. 対等である 上下をつくらない
3. 見返りを求めない
4. 継続的である
5. 無理がない

ご近所福祉



おすそ分け

平成25年(2013年)6月12日(水曜日)

長寿者囲み研修会

藤枝学生有志が集会所訪問

静岡福祉文化を考えた大切なことや今の目ざし(平田厚代表)は、標などについて質問した。このほど、藤枝市高岡で訪問型研修会「長寿者から学ぶ「ご近所福祉」を聞き、学生有志がおばあちゃん劇団「ほのお」代表の大石さきさん(97)を囲んで意見を交わした。

若者の地域参加について長寿者の生活圏域で考える本年度の通年企画。初回は、大石さんが開設した地域の高齢者集会所「永光(えいこう)の家」を常業大の1年生9人が訪ねた。

学生は福祉に興味を持ったきっかけや、日頃感じている地域の課題などを発表。大石さんには、近所付き合い



近所付き合いについて大石さんの話を聴く学生
—藤枝市高岡の「永光の家」

平成26年(2014年)6月29日(日曜日)



大石さん(右から2人目)と意見交換する学生たち
—藤枝市高岡の「永光の家」

「ご近所福祉」語る

藤枝で 大学生が高齢者と交流 研修会

福祉課題の改善など開設した交流の場「永光の家」を訪ねた。目的に活動するグループ「静岡福祉文化を学ぶ会」(平田厚代表)が「暮らしているか」「携わっているか」などの質問を交わした。大石さんは28日、大学生を相手が高齢者と交流しながら地域の福祉を考えた研修会を藤枝市高岡で開いた。

大石さんは「家族や地域の人たちがら由を呼んでほしい」と

【第6章】 「ご近所福祉こそ福祉文化」を切り拓く

1 「若者発 ご近所福祉かるた」誕生の経緯と10年のプロセス

7年間の静岡県委託事業「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」は、本会にとっては、ある意味において、活動自体の真価を問われる大きな取り組みであったことは間違いない。

それ以上に、静岡県域に「静岡発（地域発）福祉文化の創造」を発信できる好機ともとらえたことも事実である。決して、行政言葉にしてはならない「福祉文化」、市民自らが取り組むべき理念と置き換えて、決して手を抜くことなく、全力投球で取り組んだ事業でもあった。

とりわけ、静岡県委託事業「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」は、「高齢者」を対象とした事業ではあったが、高齢者問題を高齢者だけで解決できるものではない。

「高齢者問題は、全ての住民に関わる課題である」ことを認識して、「全ての住民、誰もが安心して暮らせる地域づくり」を根底に、あらゆる関係機関・団体、地域実践活動者等との協働による、尊い福祉文化実践活動として各方面に呼びかけた。こうした取り組みから、一人一人の生き方、家族・家庭のあり方を問いつつ、身近な地域社会に求められる課題であることが浮かび上がってきた。

既に、これまで、県内各地域における地域福祉の推進は、地域ぐるみの支え合いの必要性を確認し、小地域福祉活動に積極的に取り組んでいる。

表現を置き換えると、こうした、これまでの各地域における動きを、せめて、住み慣れた生活圏域における支え合いの仕組み「地域を家庭化する」共助社会の再構築が叫ばれていることに気づいた。本会の活動は、広く県民に呼びかけて、静岡県委託事業は、全県域事業として、平成20年度以降今日まで「ご近所福祉」をキーワードにした「地域総合型学習」で取り組んできた。

7年間の県委託事業で取り組んできた、主な研修テーマをあげると「ホッとする居場所、ここが一番居心地がいい」（平成20年度）「私にとって、心安らぐ居場所って何処？」（平成21年度）「これからのご近所の支え合いはどうなるの？」（平成22年度）「世代を超えて“ご近所の支え合い”を語り合う」（平成23年度）「地域と家族のつながりー地域に私の居場所ありますか？ー」（平成24年度）「誰が、ご近所福祉を創るのか」（平成25年度）「安心して暮らせる地域を大いに語ろう」（平成26年度）。こうした、本会及び協働団体に取り組んだ活動を、マスコミは次のように取り上げた。

高齢者孤立化など解決へ

委員 学生と福祉関係者が議論

静岡福祉文化を考
案「は日」第
一編
「福祉文化研究セ
ミナール」を静岡市
総合社会福祉会館
で開いた。

高齢者の孤立化や若
年層の地域参加の希薄
などの問題解決方
案をテーマ
とした学生や福祉関係
者30人がシンポジ
ウムに参加し
常葉大2年の若
手さんは「地域交
渉にもつなが
る。今の学校や地域は
閉鎖的すぎるのでは」
と意見を述べた。ケル
ンア討論では「あいさ
つを積極的にすること
が重要」「若者が意見
を言いやすい地域を目
指すべき」などの意見
が出た。

同会は県の委託で
「一人でも安心して暮
らせる地域づくり」に
取り組んでいる。平田

原代表(70)は「大人は
若者を排他的に扱わ
ず、互いに意見を出し
合うことが大切」と語
じた。



実争 石川 飛田 厚沢

困っている人「放っとけない」

富士川で地域実践セミナー



「ご近所の福祉力を検証し住民一人一人が何ができるかを見つけて出す」「富士川地域福祉実践セミナー」が岡町内で開かれている。八月は富士川地区住民らが一人暮らしグループワークを通して住民参加型の福祉について考えた。

「ご近所の福祉力アップ」

↑ 地域福祉センターで開かれた岩淵地区のセミナーには、区長や民生委員、老人クラブ代表ボランティアと、町内外の社協職員ら約八十人が参加した。静岡福祉文化実践研究所の平田厚さんから学習の狙いを聞いた後、農務りのない

セミナーは富士川町社会福祉協議会が平成九年からのテーマを変えながら開催している。今年も「ご近所のある人が困っている」「できることを模索して住民力・福祉力をパワーアップさせよう」というテーマに町内八地区で先月から順次開催している。

セミナーは十一月に中之郷を通り、二十二日に北松野で行われる。

地域福祉センターで開かれた岩淵地区のセミナーには、区長や民生委員、老人クラブ代表ボランティアと、町内外の社協職員ら約八十人が参加した。静岡福祉文化実践研究所の平田厚さんから学習の狙いを聞いた後、農務りのない

八十年代の一人暮らし女性の模擬ケースを基に、六つのグループに分かれて「問題は何か」「必要なのは何か」「地域で何ができるか」などを考へ合った。

意見はカードに記してグループ分けしながら理解を共有したり、地域の福祉を支える包括支援センターの職員に追加情報を求めるなどして、より有効な支援を考へた。



高齢者と向き合う「地域づくり目指す」区民団体が研修会
地域が抱える社会福祉問題について考へてもらおうと、市民団体「静岡福祉文化を考へる会」(平田厚代表)は8日、全体会と公開型研修会を静岡市葵区の県総合社会福祉会館で開いた。

全体会では、2010年度に県の委託を受けた「(高齢者が)一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」で、県内4地



「高齢者が安心して暮らせる地域づくり」について説明する平田代表(左端)と静岡市葵区の県総合社会福祉会館

代表は「本年度は福祉コミュニティの再構築を掲げ、若者が高齢者と向き合う地域づくりを目指したい」と述べた。

研修会では、東日本大震災の被災地に支援に赴いた参加者が体験談を披露した。約30人の参加者は、その体験談を踏まえて「高齢者が安心して暮らせる地域」について意見を交わした。

高齢者支援の活動紹介

県「地域づくり事業」報告会

静岡



地域福祉の課題などを発表した「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」の報告会—静岡市駿河区の県看護協会

県は15日、高齢者の「孤立死ゼロ」を目的に2007年度から展開している「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」の報告会を静岡市駿河区の県看護協会で開催した。10年度の活動テーマは「(近所の)一人一人が助け合える居場所づくり」。同事業を受託する「静岡福祉文化を考える会」の平田厚代表が「生活圏域における支え合いとは何か」と題して活動を報告した。平田代表は「住民

同士が地域社会や福祉文化について話し合う啓発学習」「高齢者との交流や支え合いを促進するためのアンケート調査」「地域特性を生かしたモデル事業の展開」などの取り組みを発表した。「(近所の)再構築」をテーマに、出席者らによる意見交換も行われた。福祉施設の職員や地域ボランティア、民生委員、老人クラブ会員らがそれぞれの立場から地域福祉の課題などを語った。

平成23年(2011年)2月16日(水曜日)

齊争 区

静岡福祉文化を考える会が全体会

「生活圏密着の活動を」

区

「静岡福祉文化を考える会」の活動を「近所」という身近な生活圏に密着した福祉活動に発展させたい」と述べた。この「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」の一環で、委託を受けて実施した地域の福祉に関する調査を振り返り、結果を生かした情報



本年度の活動方針などを示した「静岡福祉文化を考える会」の全体会と公開型研修会—静岡市葵区の県総合社会福祉会館

「高齢者の孤立地域で解決を」静岡で連絡会「静岡福祉文化を考える会」(平田厚代表)は16日、県委託事業「ひとりでも安心して暮らせる地域づくり事業」の第3回関係者連絡会を静岡市葵区の県総合社会福祉会館で開いた。高齢者の孤立・孤独解消をテーマにした4市町のモデル地区の取り組みなどを本年度の活動を振り返った。

連絡会にはモデル地区福祉関係者らが参加した。モデル地区の一つ、西伊豆町内の2地区では、近隣住民同士で支え合う「(近所)福祉」を目標とした。うち由子地区は、老人クラブなど既存の組織にとらわれない支援の形を模索するために、福祉関係者と住民が意見交換を重ねた事例を紹介した。平田代表は「生活圏を中心とした小さな地域の中で高齢者の問題を解決していくことが大切。住民の意識改革が必要だ」と訴えた。



独り暮らしの高齢者をご近所でいかに見守るかについて議論するワークショップ参加者
—静岡市葵区の県総合社会福祉会館

独り暮らし高齢者への福祉活動

「ご近所」の力大切

会
修
研
型
公
開
型
研
修
会

「静岡福祉文化を考えた」年度の「第1回関係者連
修研型公開型研究会」は、静岡市葵区の
県総合社会福祉会館で本
る隣組など、「ご近所」の

報告した。

同会は2008年度から、県の「ひとりでも安心して暮らせる地域づくり事業」の委託を受け、今年が3年目。これまで、地域社会や、自治体など、問題点を探ってきたが、本年度は最も小さい単位の「ご近所」に焦点を当てた。

この後行われた、第1回公開型研修会「これからの「ご近所」の支え合い、はどうなるの?」には、4市町以外の合計15市町の住民ら約50人が出席、4班に分かれたワークショップでは「まずはあいきつなど、見守り」が大事、「住民一人一人が担い手である」とを認識すべきなどの意見が出された。

参加したのは、県からモデル地区に指定された磐田市、富士宮市、藤枝市、西伊豆町の4市町。高齢化率が県内2番目に高い西伊豆町の関係者が

支え合う地域目指せ

葵区で公開型
研究会
大学生ら50人が討論



支え合う地域社会づくりをテーマに講演する平田代表(右)
—静岡市葵区の県総合社会福祉会館

静岡福祉文化を考えた。平田代表は基調報告
14日、「一人でも安心して暮らせる地域づくり」をテーマにした公開型研修会を静岡市葵区の県総合社会福祉会館で開いた。常葉学園大で平田代表の講座「ボランティア論」を受講する大学生をはじめ、市内外の公務員、主婦ら約50人が参加した。

平田代表は基調報告で、住民同士の顔が見える「コミュニティ形成」に向けて、「自らが他人と関わって、相手を知らずとする努力が必要」と関係ないではない、支え合う地域づくりについて討論した。

家族や近所大切に

「関わり方」学生ら研修

葵区



静岡福祉文化を考へ19日、家族や地域住民らによる「関わり方」を考へる

静岡福祉文化を考へ19日、家族や地域住民らによる「関わり方」を考へる

公開研究会を静岡市葵区の県総合社会福祉会館で開いた。一般の人たちや常葉学園大で平田代表の講座「ボランティア論」を受講する学生など20人が参加した。同会が実施したアンケート結果を報告した平田代表は「現代社会は『無縁社会』と書かれているが、家族や近

静岡福祉文化を考へる会

所との触れ合いを大切に考へている人は多い」と解説。「支え合い」の気持ちを持ちたいという、行政などが主体的な福祉の形を示す必要がある」と述べた。

参加者は「近所とつながる家族機能を考へる」をテーマにしたグループ討論も行った。

ご近所つながり再構築

葵区 高齢者と大学生が議論



意見交換する参加者ら＝静岡市葵区の県総合社会福祉会館

静岡福祉文化を考へる会は25日、静岡市葵区の県総合社会福祉会館で、「ご近所つながりの再構築」をテーマに常葉大の学生と地域の高齢者ら計54人によるグループディスカッションを実施した。

参加者は、おすそ分けや地区清掃によるつながりの保持などを再確認した。意見交換は、地域での高齢者の居場所づくりを探るため、同大非常勤講師の

平田厚代表(68)は「今後は希薄になった地域の組織力を取り戻し、近所での福祉を実践する必要がある」とあいさつした。

同会は2008～12年度、県から高齢者孤立・孤独防止対策事業を受託。無縁社会の打開に向け、12年度は「家族」、13年度は近所とのつながりを主題に活動している。



静岡福祉文化を考へる会



これまでの取り組みを振り返ると、身近な生活圏域をテーマに「近所福祉」をもとに、事業に取り組みられた県内市町の中でいくつか紹介すると、焼津市小川第11自治会では、「ご近所福祉 I N 小川」は、自治会事業として位置づけ、平成21年度から現在まで継続して取り組まれている。

初年度に、福祉を見える化して理解を深めようと結成した「浪蔵劇団」は、管内外にも活動の場を広げている。沼津市社会福祉協議会では、平成20年度から、市内の高校生や福祉施設、沼津市V連絡協議会をはじめ各種福祉団体との協働による「ご近所福祉 in ぬまづ」が継続して取り組まれている。西伊豆町社会福祉協議会では、近隣市町社会福祉協議会との連携のもと「ご近所福祉事業」を展開し成果をあげている。単なるイベントに終わらせることなく、地域住民に共助社会の必要性を強く呼び掛けていることが事業の取り組みから読み取れる。

競争 居取 平成21年(2009年)12月22日(火曜日)

「ご近所福祉」定着へ

焼津 小川第11自治会と「考える会」



福祉まつり
ご近所福祉2009イン小川

研修会で取り組み探る

隣近所で支え合う福祉の文化の定着に向け、焼津市の小川第11自治会（池ヶ谷昌見会長）と静岡福祉文化を養育する会（会長・平田厚元静岡福祉大教授）は20日、「ご近所福祉ーニコがわ」と題した公開型研修会を同市小川公民館で開いた。ミニディサービスなどの福祉活動に関わる住民、自治会役員、地元の高齢者ら約100人が参加した。

同自治会は公民館や公衆を拠点にした「顔が見える近所付き合い」の中に福祉活動を定着させることを目指している。住民4氏と平田さんによるシンポジウムでは出席者がミニディ運営、自治会・町内会活動、民生児童委員などの立場から意見を述べ合った。

地域福祉の一層の充実に向け、出席者からは「いま行っているものを絶えず改善していく」「地域内の取り組みを住民自身で発信して支え合う福祉について意見交換したシンポジウム」焼津市小川公民館



浪蔵劇団
浪蔵いぢん守りⅡ
認知症高齢者のケア

が知るための情報発信を充実させたい」などの意見が挙がった。

シンポに先立ち、高齢者向けの交通安全教室やミニディサービス利用者らの文化活動発表、さらには住民有志がこの日のために結成したミニ劇団による悪徳商法対策の寸劇などが披露された。



高齢者を地域で支え合うコミュニティづくりについて
 研さんした参加者＝下田市中央公民館

「近所福祉」再構築へ

下田市内
 関係者ら
地域の高齢者支援考える

下田市主催の「高齢者のコミュニティづくり」講演会「が」21日、中央公民館で開かれた。民生委員、女性の会、ボランティア連絡会など市内で活動する高齢者福祉関係団体から約60人が参加。静岡福祉文化研究所の平田厚氏を講師に迎えて、高齢者を支える地域コミュニティの再構築を目標として行

った。
 平田氏は「高齢者」が「一環、私の居場所」が「抱え」つながら、

「近所福祉」の再構築を目標として行った。平田氏は「高齢者」が「一環、私の居場所」が「抱え」つながら、

伊豆新聞 H24. 5. 31

「人の絆強い田子」

西伊豆町社協 シンポジウム 「近所福祉」考える



ミニシンポジウムで田子地区の地域福祉などについて意見を発表
 する参加者＝西伊豆町田子の田子公民館

「近所福祉文化を考える」代表の平田厚さんが基調説明し、「社会的問題を抱える高齢者に対する周辺のアプローチは「無言の同意」と「さりげない近所の支え合い」の通り。地域住民と専門機関が手を携え、互助、共助の精神で問題解決をする必要がある」と述べた。

西伊豆町社協は2009年度
 町社協は2009年度から田子地区と料地区の中区をモデル地区に指定し、自発会や町内会を基盤とした「小地域福祉活動」を推進。意見交換会などで福祉ニーズの把握

を交わした。
 町社協は2009年度から田子地区と料地区の中区をモデル地区に指定し、自発会や町内会を基盤とした「小地域福祉活動」を推進。意見交換会などで福祉ニーズの把握

を交わした。
 町社協は2009年度から田子地区と料地区の中区をモデル地区に指定し、自発会や町内会を基盤とした「小地域福祉活動」を推進。意見交換会などで福祉ニーズの把握

中高生、大学生が取り組み発表

「ご近所福祉市民フォーラム」

静岡福祉文化を考える会は、市社会福祉協議会と共催で、「ご近所福祉—ぬまづ」を十九日、日の出町のサンウェルぬまづで開催した。

世代によって変わる

ボランティアの目的と視点

このイベントは、異に
よる「ひとりで安心し
て暮らせる地域づくり事
業」の委託を受けて毎年
開催。「当地アイドルの
オレンジサポートとアー
ツがライブを行い、沼津
市手をつなぐ育成会の荒
川由紀さんが「一人権に
ついて」意見を発表し
た。

続いて「市民フォーラ
ム」では、「世代によっ
て変わるボランティアの

目的と視点」をテーマに
片浜中と西高の生徒、静
岡県立大の学生が意見発
表。

片浜中の生徒は、一年
生が「共に生きる」を
テーマに福祉について学
習した内容や福祉施設で
の体験学習などを発表。
「体の不自由な高齢者も
自分でできることを見つ
けて生活を楽しくしてお
り、介助者も一緒に楽し
むことが大切だと学ん

だ」「障害者の苦勞を聴
き、手を差し伸べる心配
り、やさしい声掛けが大
事で、少しでも勇気を出
し、その人達を助けて、
つながっていきなさい」と
意見を述べた。

また、生徒会活動の一
部だったアルミ缶の回収
活動を福祉委員会に引
き継いで活動を充実さ
せ、四千七百三十二個の
アルミ缶と三万八千八百
五十九個のペットボトル
キャップ、五千六百十枚
の牛乳パックを集め、牛
乳パックは換金して地元
の幼稚園に三種類の遊具
を寄付し、交流する予定
であることを話した。

西高の生徒は、東日本
大震災被災地支援活動を
行い、岩手県大槌町の高
校生と交流したことなど
を話し、「震災当時、住
民の避難所となった大
槌高校では生徒が自主的
に、バケツリレーでトイ
レの水を流し、教室の
カーテンを結んで職員代
わりに避難者に提供した
と聞いたが、いざという
時、自分にはできるだろ
うかと思った」とした。
また、ベルマークやエ
コキャップ、インクカー
トリッジの回収運動に参
加し、伊豆大島やフィリ
ピンの被災地支援募金活
動を実施したことなどを
説明した。

県立大の学生は、地域
のこれから担う人達の
学びの場、養成講座とし
て、毎月一回、県内各地
で開講する「ひろば」に
ついて話した。

「ひろば」は、地域に
困難なことが転んでも一
緒に手を取り合って生活
を再建することができ
る地域を目指す、人のつな
がりを築ける場や機会を
つくるのが狙い。

今年一月に市内で開い
た「沼津ひろば」では、
県立大や沼津高専の学生
をはじめ幅広い世代の人
に参加してもらい、気軽
な話題で交流を深めたこ
とを話し、「今後も楽し
い会を開いて場を築かれ



市民フォーラムの中で発表する中高生と大学生
＝サンウェルぬまづ4階多目的ホールで

こうした、県内各地で取り組まれた「ご近所福祉関連事業」のマスコミによる記事は、その後、更に、県民全体へ、「コミュニティのあり方」や「居場所の意義」をテーマとして「コラム」に取り上げ、問題提起をしている。

平成29年(2017年)4月28日(金曜日)

大自在

先日、春の地域一斉清掃日を忘れないよう家人からきつく念を押された。参加を呼び掛け、中心になつて準備に当たるのは自治会や町内会。環境美化をはじめ防災、福祉、青少年健全育成など幅広い活動を担い、組織数は全国に約30万、県内で4900余に上る▼ただ、その存在意義を認識する人は年々少なくなつていようだ。静岡福祉文化を考える会(平田厚代表)が県民を対象に昨年行つた調査によると、自治会などの地域コミュニティが「生活する上で重要」との回答は47%。5年前に比べ15%減つた▼近所に親しく行き来する家を持たない人、地域活動に関心がない人はそれぞれ逆に増加傾向で、コミュニティの希薄化が浮かぶという。「こんな現状で少子高齢化を乗り切れるのか」。20年にわたり地域福祉の研究、実践に取り組む、自治会役員も務めている平田さんは危機感を募らせる▼自治会・町内会は地縁に基づく非営利の互助・共助組織。行政の下請け、業務が多すぎる。など批判もあるが、長年地域に根づき住民自治を支えてきた。「身近な問題解決には住民の主体性が欠かせない。役割が増すのはこれから」▼平田さんはまず、隣近所が語り合える環境が大切と考えている。「年代や居住年数にとらわれず、合意形成できるよう調整したい。出番をつくれれば手を挙げてくれる人はいる」▼近年顕著な役員の手不足に話が及ぶと、「面倒と思わず、引き受けてみたら」と勧められた。「やってみて気付くことはたくさんある。一人の百歩より百人の一步です」

2017.4.28

責争

戸取

飛軒

月取

平成30年(2018年)3月6日(火曜日)

大自在

「居場所って何」。辞書を引くと大抵は人などがいるところ、居所とそつけない定義が並ぶが、実際に問いかけてみると、世代や境遇によって答えはさまざま。先ごろ、県民を対象にアンケート調査を行つた「静岡福祉文化を考える会」の平田厚代表はそれを改めて実感したという▼ほつとできる場、気軽に寄り合える場、飾らない場……。回収した調査票約1400のうち、3割の自由回答欄には居場所を求める熱い思いがびっしり。「それだけ現代人にとって、切実な課題ということでしょう」▼調査によると、地域の支え合いの必要性を感じる人は9割に上つた。一方で自治会組織や住民が主体的に取り組むのが望ましいとした回答は2割とまり。どこか他人頼みの姿勢がうかがえ、意識と実践のギャップも浮き彫りとなつた▼少子高齢化の進行で家庭や地域の絆は希薄になり、生きづらさを感じる人が増えている。「でも、かつてこんな光景があつたことも心に留めておきたい」。調査報告会で示したのは、行商の回りや民家の縁側に生き生きと集う人々の写真だった。昭和30年代に撮影された▼平成の今、福祉制度ができ専門家やボランティアも増えて居場所を支えるヒト、モノ、カネは不十分ながらそろいつつある。多くの個人・団体が居場所を開設し運営する。ただ古い写真が離すような雰囲気を感じにくくなつていないか▼貧しくとも認め合い、許し合つ心のゆとり。上下もなく見返りも求めない人間関係……。平田代表は昭和の残照に居場所を開く鍵を見いだしたのだろうか。

2018.3.6

「ご近所福祉とは何か」を、世代や領域を超えて、県内各地で「地域総合型学習」を展開してきたプロセスから、積み上げてきた議論を何か形にできないかと、再び、本会主催の「公開型研修会」において、世代間交流をしながら意見交換を深めるとともに「共創社会実現研究会」を設置して、アイデアを求め「ご近所福祉かるた」の制作をすることでまとまった。

当初は「静岡発 ご近所福祉かるた」をタイトルとしていたが、若者が高齢者からの学びの議論を重ねた過程から、「若者発」を強調すべきとの意見が多くあり、「若者発 ご近所福祉かるた」を正式なタイトルと決めた。

「制作の目的」「内容の選定」「作成部数と配布提供先の選定」等をもとに、「ご近所福祉かるた制作企画書」の作成に取り組んだ。一番重要な制作に必要な財源確保のために、早速、各種助成事業に関する情報収集にあたりるとともに、本事業を理解していただく、制作加工関連企業を探す作業に集中した。「公開型研修会」や「共創社会実現研究会」を並行的に開催し実現努力をした。

事業内容から、「赤い羽根共同募金助成事業」の申請手続きをすることにした。

「若者発ご近所福祉かるた」誕生につなげた「作成企画書」は、下記のとおりである。

“若者発 ご近所福祉かるた” 作成企画書

1. 企画目的

これまで、本会の活動において、7年間、県委託事業「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」に取り組み、その展開を一貫して、世代や領域を超えた“ご近所福祉の再構築”に向けて協議を積み重ねてきた。

まだまだ語り続けたい“ご近所福祉論議”を、昔から今日まで、四季を通じた日常生活のあそびや学びの中に取り入れられている「かるた」を素材として、これからの“ご近所福祉”を幼児から大人まで、世代を超えて、身近な地域の実践活動の場や行事の中で、「地域総合型学習」の地域福祉教育教材として提供し、楽しみながら安心して暮らし合う生活圏域づくりをめざす、これからのコミュニティづくりに、啓発啓蒙の福祉活動や福祉コミュニティの仕組みづくりなどの現状課題を改善・解決できるよう問題提起をする目的で、平成27年度県共同募金・広域福祉活動助成事業を受けて作成する。

製作にあたって、“若者発 ご近所福祉かるた”の内容は、実社会を具現化したストーリー化に努める。

○作成過程では

- (1) 各種公開型研修会等様々な学び合いの中から、若者中心とした研修参加者に「読み札」を現実の社会を直視しながら語り合う中で創作を呼びかける。
各種研修等のプロセスを重視しながら、地域の現状と課題を整理する。
- (2) 「共創社会実現研究会」を設置し、事業の企画骨子や創作の手順について議論し、学習展開を検討し、各地域への普及方法と活用を協議する。
- (3) 「絵札」は、関係方面からのアイデアをもとに協議をするとともに、具体化にあたっては、専門家のアドバイスをいただき実現する。

○着眼項目

- (1) 「これまでのご近所」を紹介しあう学びの場
- (2) 「これからのご近所」「私の納得するご近所」を創りだすの場
- (3) 「長寿者がほっとするご近所」を語り合う場
- (4) 「ご近所福祉」を実践する場づくりを創りだす
- (5) コミュニケーションの輪を広げる
- (6) ご近所福祉で地域課題を解決する一步を築く

2. 作成時期

- (1) 起案時期 平成 27 年 4 月 25 日(土)
(2) 資料収集時期 平成 27 年 4 月 25 日～平成 27 年 7 月 10 日
(3) 編集期間 平成 27 年 4 月 25 日～平成 27 年 11 月 30 日
(4) 印刷発注期間 平成 28 年 12 月 10 日～平成 28 年 2 月 3 日(納品)

3. 製作過程

製作に関する協議は「本会委員会」「共創社会実現研究会」「若者発居場所あり方研究会」「各種公開型研修会」等の場で取り組む。

創作に関する指導助言・協力は、これまで、本会の活動に対してご支援ご協力をいただいた地域実践者等との日常的な連携を深めながら取り組む。

作画に関する指導助言は、これまで長年にわたり、コミュニティ及び福祉マンガの作画に取り組まれている、漫画家 法月理栄様にお願する。

月	主な取り組み内容
4 月	3/30 県共同募金広域福祉活動助成事業決定交付式出席 4/25 第 1 6 4 回委員会にて企画書協議 第 1 回共創社会実現研究会にて協議 第 1 回若者発居場所あり方研究会にて協議 4/26 法月様との協議 *常葉大学学生中心に「読み札」検討
5 月	5/31 第 1 6 5 回委員会にて協議 第 2 回共創社会実現研究会にて協議 第 2 回若者発居場所あり方研究会にて協議 第 1 回公開型研修会開催 「若者発ご近所福祉かるた」作成に取り組む旨報告 5/16 法月様との協議 *常葉大学学生中心に「読み札」検討
6 月	6/ 5 県共同募金会書類提出 6/13 第 1 6 6 回委員会にて協議 第 3 回共創社会実現研究会にて協議 第 3 回若者発居場所あり方研究会にて協議 第 2 回公開型研修会開催 6/27 法月様との協議 *常葉大学学生中心に「読み札」検討
7 月	7/18 第 1 6 7 回委員会にて協議 第 4 回共創社会実現研究会にて協議 第 3 回公開型研修会開催 7/20 県共同募金会へ経過報告 *常葉大学学生中心に「読み札」検討

	7/20 法月様と協議
8月	8/01 第168回委員会にて協議（活用方法） 第5回共創社会実現研究会にて協議 第4回若者発居場所あり方研究会にて協議 8/03 県共同募金会へ経過報告 8/10～8/30 作画作業
9月	9/05 第169回委員会にて協議（活用方法） 第4回公開型研修会開催、第6回共創社会実現研究会にて協議 9/07 県共同募金会へ経過報告 9/19 第5回若者発居場所あり方研究会にて協議 9/01～9/30 作画作業
10月	10/10 第170回委員会にて協議（研修会企画・手引き） 第5回公開型研修会開催、第7回共創社会実現研究会にて協議 10/12 県共同募金会へ経過報告 10/17 第6回若者発居場所あり方研究会にて協議 10/01～10/30 作画作業（最終調整）
11月	11/7 第171回委員会にて協議（印刷発注） 第8回共創社会実現研究会にて協議 第6回公開型研修会（第14回静岡県福祉文化研究セミナー）開催 11/10 県共同募金会へ経過報告 11/14 第7回若者発居場所あり方研究会にて協議
12月	12/05 第172回委員会にて企画書協議（研修会具体化） 第9回共創社会実現研究会にて協議 12/07 県共同募金会へ経過報告 第8回若者発居場所あり方研究会にて協議 12/10 印刷⇔校正・協議
1月	1/16 第173回委員会にて協議（研修会具体化・配布計画） 第10回共創社会実現研究会にて協議 第9回若者発居場所あり方研究会にて協議 1/18 県共同募金会へ経過報告 研修会参加呼び掛け マスコミ対応 1/23 第7回公開型研修会
2月	12/3 納品 マスコミ対応 2/06 第174回委員会にて協議（配布計画に基づく配布） 第11回共創社会実現研究会にて協議 第8回公開型研修会（20周年記念特集）開催 2/08 県共同募金会へ経過報告
3月	3/05 第175回委員会及び第11回共創社会実現研究会で（総括） 3/20 県共同募金会書類提出

4. 仕様 (別示) 100セット
5. 印刷業者の選定 2社による見積合わせにより決定
6. 配布計画 (100セット)
- | | |
|--------------------------|----------|
| (1) 7年間の県委託事業実践活動地区 (社協) | 21セット |
| (2) 協力市町行政・社協 | 35セット |
| (3) 県 | 3セット |
| (4) 本事業に関わった関係者等及び予備 | 41セット |
| | 計 100セット |

*配布方法は、出来るだけ手渡しによる方法を検討する。

*外部からの希望者には、送料実費負担の上対応する。

基本計画に基づき、「本会委員会」における議論をはじめ、設置した「共創社会実現研究会」や「若者発居場所あり方研究会」を精力的に開催するとともに、この年度においては「公開型研修会」を8回開催して、市民と共に「若者発ご近所福祉かるた」の制作を通じて、「ご近所福祉」の議論を深め合った。

そして、こうした、尊い事業の取り組みの経過を「静岡県共同募金会」にその都度報告する努力を続けた。「若者発ご近所福祉かるた」誕生に至る、「各種研修会」「委員会」等の取り組みや、かるた誕生後の活用状況等を、その都度県民に発信し続けた。

静岡福祉文化を考える会 (平由厚代表) は20日、静岡市葵区駿府町の県総合社会福祉会館で公開型研修会「私に近所福祉を考えて、ご近所福祉かるた作り」に挑戦した。研修会は県委託事業の一環で、高齢者の孤立や孤独死を防ぐのが目的。参加者は、6人で1組になって自身の考える「ご近所」について意見交換した。かるた作りでは、「回覧板 笑顔とともに手から手へ」「お梅分 け 今日一品 増えました」など、顔が見える近所付き合いを目指す言葉が並んだ。

参加した学生からは「お年寄りが想像以上に若者の地域参加を求めているのは意外」「若い人も地区のリーダーになって活性化に貢献するべきなどの意見が出た。」

製作したかるたは、各市町や自治会、学校などの行事での使用を目標していく。

静岡福祉文化を考える会
常葉大生 高齢者福祉を研修
かるたで孤立防げ 区

平成25年(2013年)10月21日(月曜日)



「ご近所福祉かるた作り」に挑戦する常葉大生ら
—静岡市葵区駿府町の県総合社会福祉会館

「ご近所福祉文化を考えた」(若者誌「近所福祉」)
 平田代表は「社かたるた」の取り組み
 12日、静岡市葵区の県総合社会福祉会館で、公
 開研修会を開いた。同交換した。
 会の呼び掛けで、1 県中部を中心に会員
 5年度発足した盛岡大 や自治会関係者、学生
 学生有志による「若者ら約50人が参加した。
 発。開催所」あり方研 平田代表は08、14年度
 研究会」や、独自に制作 に興委託事業として取

「ご近所福祉」在り方議論



「ご近所福祉」の在り方について意見交換した研
 修会＝静岡市葵区の県総合社会福祉会館

り組んだ活動の成果を
 踏まえ、住民が世代を
 超えて支え合うことの
 重要性を指摘。地域の
 運動会や伝統的な行事
 に若者が参加していく
 ことで、「ご近所福祉」の
 力を高めることができ
 る。大人社会はその環
 境を整えることが大
 切」と訴えた。
 この日の研修会では
 かるた遊びの交流も行
 い、「若者が未来の地域
 を創っていく」運動会「
 近所みんなで応援だ」
 などの楽しみ札に込めた
 テーマに沿って、参加
 者は地域社会の現状に
 ついて話し合った。



若者も地域参加を

「若者発近所福祉」現状話し合う

区

静岡福祉文化を考える会(平田厚代表)はこのほど、静岡市葵区の県総合社会福祉会館で、身近な生活圏域で福祉課題の解決を図る「若者発近所福祉」をテーマにした公開研修会を開いた。自治会関係者

や常葉大学生など約40人が参加した。平田代表は、同会が行った若年層の意識調査の結果から「若者が地域活動に参加する意欲を持ち、必要性も感じている」と指摘した。

参加者を代表して6人が、地域で実施している防災に関するワークショップや子どもの貧困対策などを紹介した。子どもや高齢者、近所関係などを題材にした「若者発近所福祉かるた」を使った意見交換も行い、「日暮れ時 帰る子どもに一声を」といった札のテーマに沿って各地域の現状を話し合った。



「若者発近所福祉かるた」を使って地域課題について話し合う参加者＝静岡市葵区

平成28年(2016年)10月4日(火曜日) 静岡

区 豊かな地域づくりへ意見交換

静岡福祉文化を考える会(平田厚代表)は2日、地域社会について考え、語り合うセミナーを静岡市葵区の県総合社会福祉会館で開いた。自治会関係者や常葉大の学生ら約30人が参加し、豊かな地域づくりについて意見交換した。

参加者は地域社会での人々の関わりをテーマにした「若者発近所福祉かるた」を使い、それぞれの問題意識を話し合った＝写真＝。



若者の参加が少ない地域イベントへの参加を効率よく呼び掛ける手段として「商店やコンビニエンスストアへの情報掲載」などの提案もあ



平成に入り、全国的な社会問題として「高齢者の孤立死・孤独死問題」が大きく取り上げられ、本会は、静岡県委託事業「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」「高齢者の孤立・孤独防止対策事業」に、平成20年度から26年度まで7年間にわたり取り組んだ。

若者と大人が向き合う「公開型研修会」(延べ39回、約延べ1,200名参加)の開催をはじめ、実践地区検証事業(35市町のうち21市町・30か所、全県の約60%実施)、そして、児童から高齢者の領域にまたがる、世代を超えた調査研究活動を中心に、課題解決に向けた事業を展開し、ここから「ご近所福祉」を浮き彫りにし、県民に広く課題提起をしてきた。

多くの若者が参加した各種の研修会から整理した400もの意見を「共創社会実現研究会」や「若者発「居場所」あり方研究会」を立ち上げて、世代や領域を超えた“ご近所福祉の再構築”を議論し整理をした。身近な地域を「見える化」「わかる化」していく「地域福祉教育教材」として、「かるた」の制作が提案され、整理した400もの意見をもとに、「読み札」を精査する作業にも着手し、「見える化」「わかる化」の「地域福祉教育教材」をめざした。

■「赤い羽根共同募金助成事業」により、「平成27年度・ご近所福祉かるたの創作と地域学習の開拓事業」による「若者発ご近所福祉かるた」が誕生した。

■「令和3年度「若者発 ご近所福祉かるたの活用拡大と住民福祉教育開拓事業」においては、平成27年度赤い羽根助成事業として完成した「若者発 ご近所福祉かるた」(100セット)を増刷するとともに、「かるた利用の手引書」(200部)を作成し、「若者発」を大きくクローズアップした意

義を強調し、大人社会が、こうした地域環境を提供出来るかを検証した。

■令和6年度赤い羽根助成事業は「若者発 近所福祉かるたによる近所福祉検証事業」により、「若者発 近所福祉かるた」（100セット）増刷した。この10年間で300セットが、県内各地に配布提供した。これまで「かるた」を配布提供したコミュニティ組織をはじめ、福祉施設、各種団体からの「活用レポート」（活用報告）をもとに、また、新たに約50か所に「かるた活用状況調査」を実施し「若者発 近所福祉かるた活用事例集」を作成することが出来た。これまで、本会の「かるた誕生」から今日までの活動の経過をまとめると、

年 度	活動テーマ/主な活動内容
平成 20 年度	<p>「高齢者の自立」</p> <p>■静岡県委託事業①「ひとりでも安心して暮らせる地域づくり事業」</p> <p>(1)公開型研修会(4回):「高齢者と生きがい」「ホッとする居場所」「近所福祉 i n ぬまづ」「高齢者とともに暮らす 共生社会づくりの担い手は一体誰」</p> <p>(2)実践地区活動(4地区):沼津市 旧富士川町 掛川市 袋井市</p> <p>(3)調査研究活動:「高齢者の生きがい その意識と実態調査」</p>
平成 21 年度	<p>「長寿社会づくり」</p> <p>■静岡県委託事業②「ひとりでも安心して暮らせる地域づくり事業」</p> <p>(1)公開型研修場(6回):「共生社会と福祉文化」「私にとって、心安らぐ居場所とは(袋井市現地セミナー)」「近所福祉 i n ぬまづ②」「協働による福祉社会構築と福祉文化を語る」「高齢者とともに小地域をつなぐ仕組みづくりの実現に向けて」「近所福祉イン小川」</p> <p>(2)実践地区活動(4地区):小山町 伊豆の国市 焼津市小川第11自治会 菊川市</p> <p>(3)調査研究活動:「長寿社会に関する県民意識と実態調査」</p>
平成 22 年度	<p>「生活圏域の支え合い」</p> <p>■静岡県委託事業③「ひとりでも安心して暮らせる地域づくり事業」</p> <p>(1)公開型研修会(6回):「ひとりでも安心して暮らせる地域づくりの条件」「これからの近所の支え合いはどうなるの?」「近所福祉 i n ぬまづ③」「これからのサロン・居場所は、何をめざすのか」「これからの近所づくりの原点を探る」「これまでとこれから・・・生活圏域の支え合いの仕組みづくり」</p> <p>(2)実践地区活動(5地区):藤枝市 磐田市 富士宮市 西伊豆町 沼津市</p> <p>(3)調査研究活動:「生活圏域の支え合いとは何か 本音に迫る調査」</p>
平成 23 年度	<p>「生活圏域の一人一人の居場所を考える」</p> <p>■静岡県委託事業④「ひとりでも安心して暮らせる地域づくり事業」</p> <p>(1)公開型研修会(5回):「これまでとこれから 静岡発 福祉文化の創造」「世代を超えて、近所の支え合いを語ろう」「近所福祉 i n ぬまづ④」「世代を超えて 福祉文化を語ろう」「共生社会実現への道程」</p> <p>(2)実践地区活動(4地区):富士宮市 西伊豆町 川根本町 袋井市</p> <p>(3)調査研究活動:「地域と私の居場所その意識と実態調査」</p>

<p>平成 24 年度</p>	<p>「家族ってなに？ 私の居場所を考える」</p> <p>■静岡県委託事業⑤「ひとりでも安心して暮らせる地域づくり事業」</p> <p>(1)公開型研修会(7回)：「ご近所とつながる家庭機能を考える」「誰が担う つながる地域 支えあう地域」「ご近所福祉 i nぬまづ⑤」「地域に私の居場所ありますか」「これまでの家族 これからの家族」「一人でも安心して暮らせる地域とは」「ご近所福祉実践事例から学ぶ」</p> <p>(2)実践地区活動(6地区)：熱海市 牧之原市 西伊豆町 掛川市 富士宮市 沼津市</p> <p>(3)調査研究活動：「私にとって、家族ってなに？その意識と実態調査」</p>
<p>平成 25 年度</p>	<p>「ここが一番、ホッとする私たちのご近所の居場所づくり」</p> <p>■静岡県委託事業⑥「ひとりでも安心して暮らせる地域づくり事業」</p> <p>(1)公開型研修会(6回)：「つながるご近所の再構築の決め手は？」「これからのご近所を創る」「ご近所福祉 i nぬまづ⑥」「実践事例からご近所の支え合いを学ぶ」「誰がご近所福祉を創るか」「長寿者から学ぶご近所福祉」</p> <p>(2)実践地区活動(7地区)：熱海市 牧之原市 長泉町 島田市 御前崎市 沼津市 森町</p> <p>(3)調査研究活動：「ホッとするご近所づくり その意識と実態調査」</p>
<p>平成 26 年度</p>	<p>「人々が豊かに暮らし合い、安心して暮らせる地域づくり」</p> <p>■静岡県委託事業⑦「ひとりでも安心して暮らせる地域づくり事業」</p> <p>(1)公開型研修会(5回)：「豊かに暮らし合う地域を語ろう」「地域の豊かさとは何か」「一人一人が豊かに暮らせる地域を語ろう」「鈴木君なぜ地域参加するの？山田君なぜ地域参加しないの？」「静岡発 福祉文化の創造を検証する」「長寿者から学ぶご近所福祉」</p> <p>(2)実践地区活動：6年間の実践地区(21市町30地域)を検証する(県内60%)</p> <p>(3)調査研究活動：「豊かに暮らせる地域づくり その意識と実態調査」</p>
<p>平成 27 年度</p>	<p>「静岡発 福祉文化の創造による豊かに暮らせる生活圏域の地域づくり」</p> <p>◆本会年間計画に基づく活動の取り組み</p> <p>(1)公開型研修会(8回)：「豊かな地域づくりを語ろう」「地域住民が集まる居場所とは」「私の地域を知っていますか」「語れる地域環境とは」「地域の福祉課題解決に、地域の資源を掘り起こす」「福祉文化と地域の豊かさ」「地域の福祉情報の共有化」「当たり前が当たり前でできる地域とは」</p> <p>(2)調査研究活動：「若者の地域参加 その意識と実態調査」</p> <p>★赤い羽根助成事業：「ご近所福祉かるたの創作と地域学習の開拓事業」</p> <p>(1)「共創社会実現研究会」設置(12回開催)</p> <p>(2)「若者発“居場所”あり方研究会」設置(9回開催)</p> <p>(3)「若者発 ご近所福祉かるた」作成(100セット)と配布提供(35箇所)</p>
<p>平成 28 年度</p>	<p>「静岡発福祉文化の創造とご近所福祉」</p> <p>◆本会年間計画に基づく活動の取り組み</p> <p>(1)公開型研修会(4回)：「静岡福祉文化を考える会 これまでとこれから」「いかに、地域性を発揮したご近所福祉を創るか」「静岡発 福祉文化の創造とご近所福祉」</p>

	<p>を総括する」 「静岡発 福祉文化の創造と豊かなご近所福祉づくり」</p> <p>(2) 調査研究活動：「ご近所福祉 その意識と実態調査」</p>
平成 29 年度	<p>「ご近所福祉で集まる地域ぐるみの居場所を拓く」</p> <p>◆ 本会年間計画に基づく活動の取り組み</p> <p>(1) 公開型研修会(4回)：「ご近所福祉と居場所」「ささえあう地域ぐるみの“居場所”づくりを拓く」「地域ぐるみの居場所をめざす」「静岡発 福祉文化の創造とホッとする居場所」</p> <p>(2) 調査研究活動：「居場所ってなに？その意識と実態調査」</p>
平成 30 年度	<p>「子どもを育む地域づくりとは」</p> <p>◆ 本会年間計画に基づく活動の取り組み</p> <p>(1) 公開型研修会(4回)：「福祉文化と子どもを育む地域づくりを考える」「支え合う地域ぐるみの“子供の居場所”を考える」「子どもたちが安心して暮らせる地域づくりとは」「静岡発 福祉文化の創造と子どもの支援を考える」</p> <p>(2) 調査研究活動：「子どもを育む地域づくりその意識と実態調査①」</p>
令和元年度	<p>「子どもを育む福祉コミュニティの再構築と地域ぐるみの支え合いの仕組みづくり」</p> <p>◆ 本会年間計画に基づく活動の取り組み</p> <p>(1) 公開型研修会(4回)：「子どもと福祉文化を語ろう」「地域の子どもの支援の実践に学ぶ」「大人が変わる、地域が変わる、子どもが変わる ホッとする地域とは」「静岡発 福祉文化の創造と子ども」</p> <p>(2) 調査研究活動：①「子どもを育む地域づくりその意識と実態調査②」 ②「256名の子どもたちに聞きました ホッとする地域ですか」</p>
令和 2 年度	<p>「つながるご近所の再構築、決め手は一体何か（ご近所福祉の復活）」</p> <p>◆ 本会年間計画に基づく活動の取り組み</p> <p>(1) 公開型研修会(4回)：「私のご近所 これからのご近所を創る」「ご近所を診断する」「これで安心 ホッとするご近所」「ホッとするご近所の支え合いは誰が創るのか？」</p> <p>(2) 調査研究活動：「ご近所福祉 その意識と実態調査」</p>
令和 3 年度	<p>「地域を家庭化する“ご近所福祉”をつくる仕組みを探る」</p> <p>◆ 本会年間計画に基づく活動の取り組み</p> <p>(1) 公開型研修会(4回)：「ご近所福祉 その意識と実態から、課題提起を探る」「住民福祉教育の成果とご近所福祉かるたの活用」「地域を家庭化する“ご近所福祉”を創る支え合いを探る」「ご近所福祉と福祉文化」</p> <p>(2) 調査研究活動：「福祉ってなに？461名の子どもたちに聞きました調査」</p> <p>★ 赤い羽根助成事業：「若者発ご近所福祉かるたの活用拡大と住民福祉教育開拓事業」</p> <p>(1) 「共創社会実現研究会」設置（6回開催）</p> <p>(2) 「若者発 ご近所福祉かるた利用の手引き」作成(200部)</p> <p>(3) 「若者発 ご近所福祉かるた」増刷作成（100セット）と配布提供（47箇所）</p>
令和 4 年度	<p>「ホッとする豊かな地域づくりを拓く“共生社会”を探る」</p>

	<p>◆本会年間計画に基づく活動の取り組み</p> <p>(1)公開型研修会(4回):「静岡発 福祉文化の創造 26年間のプロセスを探る」「ホッとする豊かな地域づくりは誰が担うのか?」「ホッとする豊かな地域づくりを描く」「“ご近所福祉”から描く福祉文化」</p> <p>(2)調査研究活動:「ホッとする安心した地域づくり その意識と実態調査」</p>
令和5年度	<p>「世代や領域を超えた、つながる“ご近所福祉”を描く」</p> <p>◆本会年間計画に基づく活動の取り組み</p> <p>(1)公開型研修会(3回):「静岡発 福祉文化の創造とは～福祉文化の原点を探る～」 「世代や領域を超えたつながる“ご近所福祉”を描く」「教育と福祉の融合と“福祉文化”」</p> <p>(2)調査研究活動:「私にとって“ご近所”とは 中学生の意識と実態調査」</p>
令和6年度	<p>「見える・わかる“ご近所福祉”こそ福祉文化」</p> <p>◆本会年間計画に基づく活動の取り組み</p> <p>(1)公開型研修会(3回):「“ご近所福祉”これまでとこれからを語る」「福祉文化の歩みから見えたもの」「“ご近所福祉”の見える化・わかる化を検証する」</p> <p>(2)調査研究活動:「若者発 ご近所福祉かるた活用状況調査」</p> <p>★赤い羽根助成事業:「若者発ご近所福祉かるたによるご近所福祉検証事業」</p> <p>(1)「共創社会実現研究会」設置(8回開催)</p> <p>(2)「若者発 ご近所福祉かるた活用事例集」作成(200部)</p> <p>(3)「若者発 ご近所福祉かるた活用状況調査」実施(46カ所中29箇所回答)</p> <p>(4)「若者発 ご近所福祉かるた」作成(100セット)と配布提供(51箇所)</p>

2 “見える化”“わかる化”の地域福祉教育教材として「福祉文化」を発信

こうして、「若者発 ご近所福祉かるた」は、「静岡発 福祉文化の創造」を理念に、「活動目的」をもとに、「3つの活動基調」と「3つの活動の柱立て」により、「第1期:草創期」(平成8年度～平成13年度の6年間)「第2期:協働期」(平成14年度～平成19年度の6年間)「第3期:実践融合期」(平成20年度～平成26年度の7年間)「第4期:共創社会実現期」(平成27年度～平成31年度の5年間)、「第5期:ご近所福祉検証期」(令和元年度～令和6年度の6年間)を歩み続け、「若者発ご近所福祉かるた」をもとに、これまでを検証する30年の節目を迎えた。

尊い「長寿者宅訪問型研修会」の実現により、これからのご近所福祉を若者たちは、高齢者から学び合うことが出来た。見失った「地域力」(ご近所力)の復活を議論し、現実の生活圏域における地域への思い、今の地域をいかにして若者が変えることが出来るかを真剣に考える機会となった。

そこから「若者発ご近所福祉かるた」の誕生につなげるために、「読み札」にまとめ上げた400もの意見を「共創社会実現研究会」や「若者発“居場所”あり方研究会」において精査し、「静岡発福祉文化の創造」をもとに、「若者発」を意識しながら、46の「読み札」が誕生した。

「絵札」は、県内外のコミュニティ及び福祉領域でご活躍されている、漫画家 法月理栄様に多大なご理解とご協力をいただき、作成をしていただいた。

ここでは、「若者発 近所福祉かるた」46コマを紹介します。ご近所福祉を理解いただくために、各かるたには、「キーワード」を組み入れています。活用目的により、一枚一枚に託されている「キーワード」を基に、学び合いを深めて下さい。主な「キーワード」を紹介します。

- 1.おすそわけ 2.情報伝達 3.趣味・特技を地域活動に活かす 4.地域ぐるみの福祉教育 5.子どもの見守り 6.家庭機能(家庭力) 7.感謝の心 8.若者の地域参加 9.他者との関係づくり 10.子どもの居場所 11.防災意識強化は家庭から 12.いつでもどこでもボランティアチャンス 13.防犯(安全) 14.健康 15.子育て支援 16.仲間づくり 17.さりげない声かけ 18.地域づくり 19.世代間交流 20.地域福祉 21.専門性と市民性の融合 22.環境美化 23.コミュニティリーダー 24.共生社会 25.支え合い 26.居るだけのボランティア 27.集まる地域の居場所 28.長寿者の社会参加 29.コミュニケーション 30.さりげない見守り 31.おせっかい屋さん(世話やきさん復活) 32.地域文化 33.ふれあい 34.地域課題の把握 35.コミュニティ 36.小さな親切 37.ご近所福祉 38.生きが 39.地域行事 40.相互理解 41.福祉文化の創造

 <p>あ</p>	<p>あ</p> <p>ありがとう 優しい気持ちの おすそ分け</p>	 <p>い</p>	<p>い</p> <p>居るだけで 温かいなあ このまちは</p>
<p>おすそ分けは、物だけではありません。心を添えた「おすそ分け」を心掛けましょう。対等で見返りを求めない、継続な信頼関係づくりが大切。</p>		<p>今、地域づくりに「居るだけのボランティア」は欠かせません。若者も長寿者も、身近な地域に、姿を見せているだけで、心がホッコリ。</p>	
 <p>う</p>	<p>う</p> <p>運動会 ご近所みんな で応援だ</p>	 <p>え</p>	<p>え</p> <p>会釈して 通り過ぎれば 顔なじみ</p>
<p>運動会等地域行事には、老若男女、地域住民が多く集まります。こうした伝統行事で「地域ぐるみの居場所づくり」を継続したいものです。</p>		<p>見知らぬ人でも、すれ違った時には軽く会釈を心掛けましょう。それだけで「他者との関係づくり」、そして、信頼関係が生まれてきます。</p>	
 <p>お</p>	<p>お</p> <p>おせっかいと 思われようと も世話をやく</p>	 <p>か</p>	<p>か</p> <p>家族とも 話しておこう 避難みち</p>
<p>昔は、地域のあちこちに世話焼きさん(おせっかいやさん)がいました。人々や地域をつなぐ「世話やきさん」復活を期待したいものです。</p>		<p>災害は、いつやってくるかわかりません。日々の生活の中で、家族で話し合い、「日頃の防災意識」を強める努力をしていきましょう。</p>	

 <p>き</p>	<p>き</p> <p>きっかけを 見つけて広げる ボランティア</p>	 <p>く</p>	<p>く</p> <p>暗い道 みんなで見守る 光る目で</p>
<p>いつでも、どこでも、「ボランティア活動」のチャンスがあります。日頃から、身近な地域社会に目を向けて、きっかけを見つける努力をしていきましょう。</p>		<p>ご近所みんなが、日頃から、声を掛けあい、積極的に、安心・安全な地域づくりを心掛けましょう。「ご近所力（近助）」で防犯（安全）強化をしていこう。</p>	
 <p>け</p>	<p>け</p> <p>健康を 見守る優しさ 支え合い</p>	 <p>こ</p>	<p>こ</p> <p>子育ては 語れる先輩 探すこと</p>
<p>一人より二人、二人より三人と、みんなが集まると続きます。ご近所さん同士で「健康づくり」で「地域の輪」をさらに広げましょう。</p>		<p>日頃から、世代を超えて、語れる環境に努め、気軽に、ご近所さんへの歩み寄りで、実体験から「子育て支援」で悩みが解消します。</p>	
 <p>さ</p>	<p>さ</p> <p>さみしくないよ 一人じゃないよ 仲間いる</p>	 <p>し</p>	<p>し</p> <p>知ってます？ お隣り家族 お向かいさん</p>
<p>地域には、いろいろと悩みを持った人、孤独な人がいます。明るく、長生きの秘訣は地域の「仲間づくり」から始めましょう。</p>		<p>これまでの災害の教訓から、「ご近所さん」は頼りになります。普段から「隣組」との関わりをもったお付き合いを心掛けましょう。</p>	
 <p>す</p>	<p>す</p> <p>住みやすい まちはみんな 創るもの</p>	 <p>せ</p>	<p>せ</p> <p>世代差を 埋めてつなげて まちづくり</p>
<p>リーダー（町内会長・民生委員・組長等）にだけおまかせでは、本当の地域づくりではありません。「住民一人ひとりの地域参画」で、ホッとさせる地域づくりをめざしましょう。</p>		<p>日頃から、あいさつをして「世代間交流」に心掛けましょう。若者の言い分、そして、大人の言い分をしっかりと聞き合い（傾聴）、相互理解に努めましょう。</p>	

	<p>そ</p> <p>そばにいる ただそれだけで 癒される</p>		<p>た</p> <p>頼んだよ 手を出しあって 明日創る</p>
<p>日頃から、さりげなく、そばにしてくれるだけでいい家庭環境で、「居るだけのボランティア」に心掛けて、ご近所でも、「癒される人間関係」を心掛けましょう。</p>	<p>少子超高齢社会の今だからこそ、地域住民一人一人がお互いに歩み寄り、アイデア（知恵）を出し合い、地域ぐるみで「地域福祉」を推進しましょう。</p>		
	<p>ち</p> <p>地域文化 祭りや食べ物 根付いてる</p>		<p>つ</p> <p>つなげてく 手から手へと 回覧板</p>
<p>伝統的な祭りや食文化は、次世代に、しっかりと伝えていかなければなりません。身近な地域の「地域文化」の発見と発展に努めよう。</p>	<p>昔から今日まで、最も身近な情報伝達手段の「回覧板」。内容を家族みんなで理解し合い、お隣さんに一声かけて早く回しましょう。</p>		
	<p>て</p> <p>手伝いは 子どもの心 育ててく</p>		<p>と</p> <p>得意わざ 活かして参加 地域の行事</p>
<p>子どもは、家族や地域を構成する立派な一員です。「地域の子どもの地域で育てる」地域環境づくりに、日頃から努力していきましょう。</p>	<p>何かひとつは、他人に誇れる趣味・特技を誰もが持ち合わせています。「地域デビュー」で、生きがいつくりに心掛けていきましょう。</p>		
	<p>な</p> <p>悩んだら 文殊の知恵で 安心地域</p>		<p>に</p> <p>にっこりと 笑顔いっぱい おつき合い</p>
<p>日頃から、ご近所さんに相談できる地域環境づくりに心掛けましょう。困った時には、「三人よれば文殊の知恵」です。</p>	<p>穏やかで、笑顔のあふれるつながりが、良い人間関係が継続されます。「さりげない付き合い」で、より良い人間関係を創りましょう。</p>		

 <p>ぬ</p>	<p>ぬくもりは サロンの仲間と 語り合い</p>	 <p>ね</p>	<p>根付いてる 地域の隅々 助け合い</p>
<p>「集まるサロン」は、自発的に自由に、対等で、そして本音で語り合えて、いつも笑顔がいっぱいです。「集めるから集まるサロン」こそ、「真の地域ぐるみの居場所」です。</p>		<p>助け合い・思いやりの輪は、私たちの地域の隅々まで広げなければなりません。世代や領域を超えて、みんなで実践して、「地域の福祉力」を高めていきましょう。</p>	
 <p>の</p>	<p>伸ばそうよ 思いやりの芽 福祉の芽</p>	 <p>は</p>	<p>初めの一歩 勇気を出して 地域デビュー</p>
<p>住み慣れた地域で、思いやりやお互い様の気持ちを広げたいものです。みんなで「地域ぐるみの福祉教育」を心掛けていきましょう。</p>		<p>ボランティア活動をするには、一寸とした勇気が必要です。さあ、思い切って「はじめの一歩」で、私発のボランティア活動を始めよう。</p>	
 <p>ひ</p>	<p>日暮れ時 帰る子どもに 一声を</p>	 <p>ふ</p>	<p>ふれあいは 親子の会話 さりげなく</p>
<p>子どもの安全・安心をいかに確保していくか、今、社会全体の問題となっています。地域全体で取り組もう、「子どもの見守り・声かけ」を。</p>		<p>ふれあいの濃さは、時間の長さではありません。「さりげない日常会話（家庭機能）」で「家庭力」を大いに向上させましょう。</p>	
 <p>へ</p>	<p>返事にも 感謝の気持ち 付け加え</p>	 <p>ほ</p>	<p>ほめ言葉 近所の子にも 声を掛け</p>
<p>「ハイ」という返事だけでは、相手にすべてが伝わりません。思いやりの気持ちも添えて、「常に、感謝の心」を忘れないようにしましょう。</p>		<p>我が子だけでなく、近所の子も達も常に見守りたいものです。近所の子にも声を掛けて「地域の子どもを地域で育む」福祉力の向上を目指しましょう。</p>	



ま

ま
窓開けて
道行く人にも
ご挨拶

長寿の秘訣は、常に、ご近所さんと交流に努めていくことが大切です。自ら進んで「コミュニケーション力」UPに心掛けましょう。



み

み
見守られ
見守りつつで
暮していく

いろいろな人が暮らし合って当たり前のご近所。日頃のお付き合いの中から「一声かけて安心し合える地域づくり」を心掛けていきましょう。



む

む
向こうより
素早く声掛け
こちらから

相手からの挨拶を待つことなく、こちらからさりげない言葉掛けは微笑ましいものです。まず私から「声かけ」出来るように心掛けましょう。



め

め
目が笑う
優しい心が
人づくり

昔から「目は、口ほどに物を言う」と、言われています。「ふれあい」は、優しい目から、心から、さあ、実践しましょう「アイコンタクト」。



も

も
問題点
たくさんあるから
チャンスあり

私たちの地域社会には、様々な地域課題があります。その「課題発見」から発想や視点を変えることで、解決につながります。「地域把握」でピンチをチャンス。



や

や
やかましい
大人の注意で
振り返り

昔は、子どもの周りに「怒るおじさん」（やかましい大人）がいたものです。でも、そのやかましい大人も、立派な「地域の教育力」です。



ゆ

ゆ
譲り合い
してもされても
笑み浮かぶ

思いやりの行為は、した人も、そして、された人も、お互いに気持ちが良いものです。してよし、されてよし。いつでも、どこでも、誰でも「小さな親切」。



よ

よ
喜びを
みんなに分け合う
地域社会

ご近所の悲しみや喜びを、いつでも、どこでも誰でもが共有できる地域でありたい。こうした、「支え合う地域」を日頃から、地域みんなで心掛けましょう。

	<p>ら</p> <p>ライフワーク 自慢のまちに 創り変え</p>		<p>り</p> <p>リサイクル ゴミ出し袋も 気をつかい</p>
<p>一人一人が力を合わせ、身近な活動を継続すると、それぞれが自慢のご近所が実現します。地域参加は、私にとっての「生き甲斐づくり」。</p>		<p>安心・安全なまちは、清潔な地域環境から生まれます。「環境美化」は、日頃から、正しいゴミの分別を徹底しましょう。</p>	
	<p>る</p> <p>地域行事と 胸躍る</p>		<p>れ</p> <p>連絡は 伝える相手 言葉選び</p>
<p>老若男女、誰もが楽しめるお祭りが地域の発展につながります。住民の努力で、これまでの「地域行事」を継続して、町おこしに努めましょう。</p>		<p>地域には、長寿者や障がい児・者の方々やいろいろなハンデを持つ人がいます。報告・連絡・相談時の言葉や態度はしっかりと「相手理解」を心掛けよう。</p>	
	<p>ろ</p> <p>老人を 長寿者と呼び 知恵を借り</p>		<p>わ</p> <p>若者が 未来の地域を 創って</p>
<p>龜の甲より年の功、長寿者に学ぶことは、いろいろな場面で大変多くあります。「長寿者の社会参加」で、地域力の向上に努めましょう。</p>		<p>今こそ、大人社会が若者の地域デビューを大いに呼び掛けましょう。「若者の居場所」づくりを目指し、「若者の地域参加」を大いに働きかけていきたいと思います。</p>	
	<p>を</p> <p>ご近所を 福祉でつなぐ かるた会</p>		<p>ん</p> <p>いたわりで 人の輪づくり 結ぶ縁</p>
<p>「若者発 ご近所福祉かるた」の読札や絵札を使い、大いにコミュニケーションを深め合いながら「ほっとする地域」を学びあいましょう。</p>		<p>ご近所さん同士が、普段から、声を掛けあい、ふれ合うことで、地域が大いに盛り上がりまます。これこそ「福祉文化の創造」です。</p>	

「見える化」「わかる化」の「地域福祉教育教材」として、作成した「若者発ご近所福祉かるた」10年間の取り組みは、県内各地へなんとか発信することが出来た。

平成28年(2016年)2月5日(金曜日)

賈争 后京 飛斤 尾京 (夕刊)

完成した「若者発・ご近所福祉かるた」を手にする平田厚代表(右)と法月理栄さん=1日、焼津市内



隣近所で支え合ったかつての「ご近所」の関係を復活し、世代を超えて誰もが安心して暮らせる地域社会をつくらうと、「静岡福祉文化を考える会」(代表・平田厚焼津市社会教育委員長)が「若者発・ご近所福祉かるた」を作成した。地域福祉力向上への思いを、46枚の読み札に込めた特製かるた。平田代表は「当たり前だが、当たり前でできる地域づくりの一助になれば」と期待を寄せる。

「ご近所福祉」かるたに込め

「静岡福祉文化を考える会」作成

読み札の一部

- ・運動会ご近所みんなまで応援だ
- ・世代差を埋めてつなげて
まちづくり
- ・得意わざ活かして参加
地域の行事
- ・日暮れ時帰る子どもに一声を
ほめ言葉 近所の子にも声を掛け
- ・若者が未来の地域を創っていく

地域づくりの一助に

高齢者の孤立化、交流の希薄化が進んでいると、言われる現在の近所関係。「福祉を文化に」をテーマに、20年間にわたって活動してきた同会は「福祉のまちづくりには近所関係の再構築が不可欠」として、数年がかりで教材用のかかるたの制作に取り組んできた。

読み札は「居るだけで育て支援」など読み札の

高齢者の孤立化、交流の希薄化が進んでいると、言われる現在の近所関係。「福祉を文化に」をテーマに、20年間にわたって活動してきた同会は「福祉のまちづくりには近所関係の再構築が不可欠」として、数年がかりで教材用のかかるたの制作に取り組んできた。

読み札は「居るだけで育て支援」など読み札の

テーマ分けや解説書の制作も行った。絵札は県のキャラクター「ふじっぴー」もデザインした島田市の漫画家法月理栄さんが担当。法月さんは「いずれもかつては当然だった近所関係の「コマだが、今もできているの?」と自問するものも多い。絵札の社

ルポ 4

生活会議の活動から

福祉文化の創造を切り拓く “若者発”近所福祉かるたへのアクセス

静岡県静岡市葵区 静岡福祉文化を考える会



静岡福祉文化を考える会(代表・平田厚)では、赤い羽根共同募金の助成をいただき、このたび、「若者発」近所福祉かるた」を創作いたしました。20年間にわたり、多くの皆様方のご支援とご協力により、身近な地域社会から「福祉を文化にする」「地方発 福祉文化の創造」の試みを「公開型・現場体験型研修会」や「調査研究活動」を実践し、若者と共に「若者の地域デビュー」を議論し合う中で、ここに「若者発」近所福祉かるた」が誕生しました。これまでの実践プロセスをご紹介します。

20年間の福祉文化実践活動を 基盤にして

これまで、静岡福祉文化を考える会で

は、20年間にわたり、市民一人ひとりがより豊かな生活環境を日々創る努力を「福祉文化の創造」のプロセスと置き換えて、様々な福祉問題を専門分野と世代を超えて市民が、拓かれた地域社会の構築に向けて、理論と実践を融合する実践活動を積み重ねてきました。

特に、平成20年度から平成26年度までの7年間は「長寿者を取り巻く地域社会」をもとに、とりわけ、長寿者が安心して暮らせる身近な地域社会の再構築について、「一人でも安心して暮らせる地域づくり」と置き換え、様々な福祉文化実践活動に取り組んできました。

これまでの7年間の早い福祉文化実践のプロセスを振り返って見ますと、

*1年目は「長寿者の生きがい」(長寿者

の自立) *2年目は「長寿社会への課題」(共生社会実現の道程) *3年目は「生活圏域の支え合いの仕組み」(近所福祉)と関連づけて、共生社会の再構築に向けた「福祉文化の創造」について、数々の課題を年度ごとに提起してまいりました。

*4年目は「住民一人ひとりの居場所が生活圏の中で存在しているか」単に長寿者だけの問題ではなく、住民一人ひとりが日頃から地域に居場所を持つことの必要性を正してきました。 *5年目は「家族・家庭の機能」を長寿者等の孤立・孤独防止につなげ「家庭こそが真の居場所」を議論しました。 *6年目は、「長寿者をつなぐ、ホッとすること近所づくり」をテーマに「家族・家庭」と生活圏域の「近所支え合い」を焦点に、その意識と

実態を明らかにしました。*7年目は、これまでの「長寿者の自立」「共生社会」「地域社会の支え合いの仕組み」「地域の居場所」「家族・家庭機能見直し」「ご近所福祉」を総括する意味合いから、あらためて長寿者を中心に、いかにして一人一人が生活圏域から孤立しない地域、お互いに支え合える共創社会を創りあげていくかを

1 「大人社会がいかにして、積極的に若者の地域参加の機会を創るか」

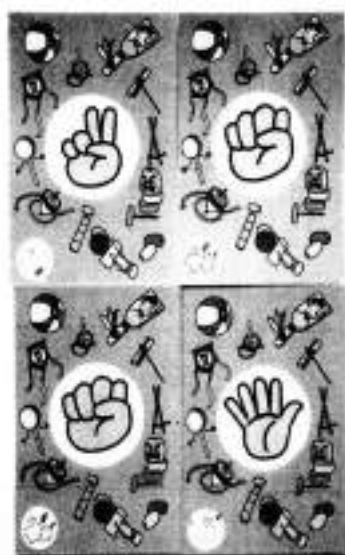
2 「福祉と教育の融合こそが地域を切り拓く」

3 「専門性と市民性の協働を誰がコーディネートするのか」

4 「住民主体の共創社会へのプロセス」の課題解決の柱立てを浮き彫りにしてまいりました。

「若者発ご近所福祉かるた」の誕生

これまでの20年間の「福祉文化実践活動」と、この7年間の「一人でも安心して暮らせる地域づくり」の様々な活動から、このたび、「ここに誕生しました」「若者発ご近所福祉かるた」は、薄れてき



た家庭機能を含めて地域社会に託し、対等な立場で、しかも生活圏域で顔の見える関係を以て長く継続した信頼関係を築づいた人的環境のもとで、お互いを認め合う、「おすそわけの世界」こそが「ご近所福祉」とも置き換えて、地域の福祉課題解決につながることを期待し、ここに誕生したものです。

これまで、本会では、この5年間は、一貫して「若者発」を重視し、これからの地域づくりには、若者の地域デビューを真剣に考えていくことが重要であることを強調し、「公開型研修会」や「長寿者訪問型研修会（百歳の長寿者宅を5か月間、分散型で152名の若者が訪問し学び合いました）」から、地域づくりを若者の視点で議論してまいりました。

「これからのご近所福祉」を語り合う中で、浮き彫りになりました。現実の生活圏域における地域の状況への思いや、大人集団との意見の交し合いや向き合いから感じたこと、地域の担い手として、今の社会を改善したいという熱い思いなどを「かるた」の読み札に置き換えて、これまでの地域の良さをさらに強調し引き続き実践していく呼び掛けとし、見失った地域力を復活していきたい思いを新た

に「読み札」に託し、参加された若者から新しい提案を具現化するなどして、約400の「読み札」が浮かび上がりました。「静岡発 福祉文化の創造」をめざして、多くの若者の意見をもとに取り組んできたプロセスから、「若者発」をキーワードにした「ご近所福祉かるた」の創作が具体化しました。

「共創社会実現研究会」「若者発居場所」あり方研究会」と共に

平成26年度に設置した「共創社会実現研究会」は、主に、地域の現状把握をもとに、これからの「地域社会の仕組み」をいかにして創りあげていくかを議論してまいりました。改めて、平成27年度は、広く一般市民の自主的参画を呼び掛け、継続的に取り組むとともに、新たに「若者発居場所」あり方研究会」を立ち上げ、二つの研究会を連動しつつ「協働」により、「読み札」の選定にあたり議論を深め、ここに46枚の「読み札」を取りまとめました。「読み札」については、本会の活動にご理解をいただいています。漫画家 法月理栄様との協議を積み重ねながら「若者発ご近所福祉かるた」の創作に取り組んで

まいりました。

漫画家 法月理栄様のご協力のもとに

46枚の「読み札」は、コミュニティの現状や、福祉社会を取り巻く実社会等を、法月理栄様と意見交換しながら「若者発ご近所福祉かるた」の創作が実現できました。

また、この「若者発ご近所福祉かるた」のモデル地域設定は、2000世帯ほどのコミュニティを想定し、「読み札」には、長寿者の方々の姿に接し、また、児童、



法月理栄様と平田代表が「公開型研習会」でかるたの完成までを対談

青年や障がい者の皆様方、子育て中の方、自治会・町内会の役員さん、民生委員児童委員さん、福祉関係者の皆様に登場していただき、思いを込めて、ご近所同士の支え合いやふれ合い交流などをストーリー化し、描いていただきました。

**あらためて「ご近所福祉」を
考える時代を迎えて**

「ご近所ってなに?…」、よく町内会や自治会の集まりの中で、こんな話が飛び交っています。生活圏域における人々のお付き合いは、複雑多様な福祉課題が生じている今日、なかなか親しく声を掛け合う機会すら薄れてきました。また、地域環境も大きく変化し、暮らし合う環境や若い世代間では地域離れも加わり、近隣世代間の交流、付き合いも希薄化しつつあります。

こうした状況は、高齢者世帯、单身世帯ともなると、さらに深刻化し、身近な生活圏域での出来事や話題も知る機会すらなくなり、地域から孤立化の傾向がますます強くなっています。あの時代、何キロ離れても、そこには、つながりを持ったご近所関係ができていました。

これだけ、情報文化が発展してきた今日にあつては、これまで以上に、人々の信頼関係は深まっていいはずなのに、むしろ深刻な社会問題すら生じつつある今を迎えているように感じます。ここに誕生しました「若者発「ご近所福祉かるた」」が、生活圏域において、世代を超えた「地域総合学習」の場で、それぞれの地域性を活かし、有効に活用され、地域福祉の推進に役立つことを期待します。

「若者発「ご近所福祉かるた」には40の「キーワード」があります

- 1 おすそわけ 2 情報伝達 3 趣味・特技を地域活動に活かす 4 地域ぐるみの福祉教育 5 子どもの見守り 6 家庭力 7 感謝の心 8 若者の地域参加 9 他者との関係づくり 10 子どもの居場所 11 防災意識強化は家庭から 12 いつでもどこでもボランティアチャンス 13 防犯(安全) 14 健康 15 子育て支援 16 仲間づくり 17 さりげない声かけ 18 地域づくり 19 世代間交流 20 地域福祉 21 専門性と市民性の融合 22 環境美化 23 コミュニティリーダー 24 共生社会 25 支え合い 26 居るだけのボランティア 27



「公開型研修会」で「若者発「居場所」ありかた研究会」(平成27年度考える会で活動した学生が、平成28年度は常葉大学内に同好会として新たに30名で始動)が一般住民と向き合って語談

- 集まる地域の居場所 28 長寿者の社会参加 29 コミュニケーション 30 さりげない見守り 31 おせっかい屋さん(世話やきさん復活) 32 地域文化 33 ふれあい 34 地域課題の把握 35 コミュニティ 36 小さな親切 37 ご近所福祉 38 生きがい 39 地域行事 40 相互理解

「ご近所福祉推進にむけて」

本会では、平成28年度の重点活動項目を「ご近所福祉の推進」とし、「若者発「ご近所福祉かるた」による世代を超えた「地域総合学習」を展開し、これからの福

社のまちづくりにむけた提言をしています。

(説み札から)

おせっかいと 思われようとも 世話をやく

根付いてる 地域の隅も 助け合い

ご近所を 福祉でつなく かるた会

(「福祉文化の創造を切り拓く」若者発

「ご近所福祉かるた」へのアクセス)より

抜粋)

発行 平成28年2月6日

企画・製作 静岡福祉文化を考える会

作画 漫画家 法月理栄

協力 共創社会実現研究会／若者発「居場所」あり方研究会／常葉大学学生有志

【第7章】 機関誌「OUR LIFE」から「静岡発 福祉文化の創造」を視る

1 機関誌「OUR LIFE」誕生の経緯

本会結成時（平成8年度）の会員の状況は、意外と若者層中心に、年代層は10代から80代と幅広く、男性49名、女性29名、計78名と男性が多く参画している特色を持っていた。

職業別にみると、有職会員68%、学生（高校生から大学生）19%、無職（主婦）会員13%、細部内訳は、団体職員24%、学生（高校生から大学生）19%、施設職員18%、会社員13%、教員11%、主婦10%、無職3%、自由業2%と、決して、福祉関係者だけの集団ではなく、異業種交流ができる、世代を超えた活動集団であった。

結成3年後（平成10年度）には、入退会等の出入りが激しかったものの、一時90名余の会員数となり、県外会員を含め、会員の把握と共に本会の活動状況を会員にしっかりと伝えなければならぬ大きな課題があった。

活動目的と活動基調をもとに、年間計画に基づき活動を展開する中で、会員それぞれ

が描いている「福祉文化への思い」を語りあい、相互理解を深めていくためには「議論を形にすること」「活動を記録に残すこと」が必要であると提案があった。企業人の会員有志が中心になって、即「広報部会」を立ち上げ、企業感覚で精力的にIT技術を発揮され、1996年9月本会結成後、わずか1か月後の10月17日に「OUR LIFE 第1号」が誕生した。

勿論、特技として、IT分野に精通している若い学生・社会人会員も多く、福祉文化活動をどのように地域社会の発信をしたらよいか、若者感覚で積極的に広報啓発領域にも関わった。

創刊号（1996年10月17日発行）は、B5版縦書4ページ仕立てで、「本会発足にあたり（本会発足の経緯）」「本会のプロフィール（会員の構成内容）」「会員の意見：会のこれからの期待すること」「事務局短信（本会の活動実績・今後の予定）」「役員紹介」等の内容を組み立てた。

当初、機関誌発行の目的は、「静岡発（地域発）福祉文化の創造」を掲げて始動した本会の福祉文化実践活動を、会員相互に共通認識し、会員それぞれの地域環境の中で「私にとっての福祉文化とは何か」を問い質していった。



当時、編集を担当された会員は、「編集後記」に、次のように綴っている。

「やっと創刊号が出来上がりました。ご協力いただいた皆さんに感謝、感謝。個人的には熱い思いや新鮮な感覚にふれることができ、刺激的でした。しばらくは、つたない編集ですが、コンテンツ（中身のことです。）で勝負。私たちのライフを見つめ、魅力ある機関誌にしたいと思います。どうぞよろしくをお願いします。」そして、投稿募集呼掛けでは、「会議や研修会に参加出来ないあなた、会議では、黙っていたが一言、言いたいあなた、一度、筆を握ったり、ワープロを打ったりしてみませんか。何でも言い合える会であることを実証しましょう。ジャンルは問いません。ぜひ、事務局まで葉書でも、電話でも、FAXでも構いません。」と。

以来、30年間、機関誌「OUR LIFE」は、令和7年12月10日発行で「第159号」を迎えた。

すでに、これまで発行した機関誌「OUR LIFE」は、本会の「10周年記念誌」そして「20周年記念誌」で個々に紹介してきた。「30年誌」では、「静岡発 福祉文化の創造」の視点で、主な掲載内容の傾向を「第1号」以降の記録から辿る。

「第2号」は、日本福祉文化学会全国大会に参加した会員による各会員に伝えたい「全国的な福祉文化の動き」を掲載するとともに、若い世代の会員が多いこともあり、「青年は荒野をめざす」を研修会テーマに、30名が参加して議論し合った内容を克明に紹介、会員の声（寄稿）、事務局短信（活動実績と予定）を4Pにまとめ、編集担当からは、「厚生省のお役人に、我々の“福祉文化”を少しでもおすそわけしたい」と締めくくっている。

2年目の活動に入ると、活動もさらに活発になり、公開型研修会は、2か月に1回と、延べ6回もの公開型研修会を開催していたことから、盛り上がった研修内容を全ての会員に伝えようと「OUR LIFE」は、2年目にして、年7回発行している。また、ページ数も、「第3号・研修会特集：鈴木君、なぜ結婚したの？杉山さん、なぜ結婚しないの？」6P、「第4号・記念講演：車椅子生活12年、今思うこと/座談会：家庭と地域と施設を語る普段着の付き合い方あれこれ」10P、「第5号・施設現場セミナー特集：施設利用者との交流」4P「第6号・合宿セミナー特集：朝まで生福祉」8Pと、実践的体験的福祉文化活動を出来るだけ記録に残してきた。

こうした、会員相互の学び合いから、「真の福祉文化」を理論と実践の両面から学ぼうと、本会結成2年目にして、学会会長が一番ヶ瀬康子先生をお迎えして、「一周年記念特別研修会」を開催した。

その内容を「第7号・特別研修会特集：あれから1年、福祉と文化と地域を語る」は、なんと14Pの大作で発行している。

その後、一番ヶ瀬康子先生は、静岡県社協主催講演会をはじめ静岡県内の磐田市、沼津市、旧大須賀町等への講演に来静されるたびに、会員との交流の機会をつくって頂き、本会の活動の方向性を検証する機会を持つとともに、会員一人一人にとって「福祉文化」を積み重ねて学びあう実績にもなった。

精力的な発行はさらに続き、「第8号・施設現場セミナー特集：利用者主体の手づくりの高齢者福祉の取り組み」8P、「第9号・研修会特集：望月さん、なぜ共働きするの？中村君、なぜ共働きしないの？」8Pと続いた。

改めて、県外や職業上研修会や活動に参加できない会員と共に、「静岡発 福祉文化の創造」を共有していこうとする、会員一人一人の熱い思いが、会員が持つ技術と特技が結晶となって、「OUR LIFE」広報誌発行の取り組みからも読み取れる。

2 会員対象から、広く地域社会に「静岡発 福祉文化の創造」発信へとつなぐ

ここまで、30年間、機関誌「OUR LIFE」を継続して発行できたのは、会員個々にもつ、企業感覚の技術や、若者の特技の提供が、本会運営の中で求められる、役割分担を十分発揮して取り組まれてきた。結成当時は、県内外の幅広い地域から加入された会員のもとで、年間計画に基づく各種研修会や研究セミナー等の開催に、毎回参加できない会員にとっては、当時、年間平均5回程度開催した研修会の内容をきめ細かく「OUR LIFE」で報告するとともに、日頃から、会員の寄稿（意見を働きかけ会員同士が紙面で対談する企画をするなどの紙面構成を工夫し、会員同士がつながる努力をした。

本会の各種研修会等は、活動の目的及び活動基調から、本会結成当初から「公開型」として、広く県内外に参加

を呼び掛けてきた。全国に情報を発信している「福祉新聞社」には、当時、ことあるごとに、「地域福祉文化の創造」関連の情報提供をしてきた経緯がある。関心のある方々からの問合せには、本会の活動の趣旨をきめ細かく説明し、各種研修会等の参加につなげた。こうした、日常的な情報発信により、各種研修会に、毎回一般参加者を含めて約40名余の参加者とともに、福祉文化実践活動を学び合ってきた。このように、機関誌「OUR LIFE」は、「福祉文化実践論議」を「見える化」「わかる化」する大きな役割を果たし、研修会等への一般参加者にもその都度配布し、研修考察と共に、次につながる学びの呼掛けとなっていたのは確かである。機関誌「OUR LIFE」の発行は、原則年4回の発行を基本としたが、これまでの実績を振り返ると、平成9年度は、本会結成2年目、多くの若者会員が中心になり、活動を盛り上げていた時期は7回発行している。平成11年度には、本会と学会との共催で開催した「宮城まり子さんと福祉文化を学ぶセミナー」開催等で8回発行、平成27年度は、「若者発 近所福祉かるた誕生」中心に、精力的に10回発行している。

本会の活動は、その後学生会員は就職し、当面、地域活動との両立の難しさから、また、社会人会員は、家庭や職場等、諸般の事情で活動の継続が困難であること等、年数が経つにつれて、少しずつ会員の退会現象が見え始めた。これまで、機関誌「OUR LIFE」作成に中心的役割を果たされていた会員も少なからずおられた。本会結成5年目の平成12年度に、日本福祉文化学会から、静岡県において「第13回学会全国大会静岡大会」開催（平成14年）の要請があった時、本会定例委員会の議論は、学会大会を成功させるために機関誌「OUR LIFE」の発行を一時、学会大会用の「通信」に切り替えて、集中的に「福祉文化」を県内外に発信していく提案があり、発行計画を変更することにした。

そして、2002年3月に「第13回日本福祉文化学会大会 IN しずおか News Flash 第1号」を発行し、その後、学会大会終了まで通算8号まで発行した。



会員をはじめ学会大会実行委員 44 名、関係機関・団体をはじめ、広く県内外関係者に配布し、学会全国大会静岡大会を通じて、「静岡発 福祉文化の創造」の発信に努めた。

3 企業の社会貢献活動に支えられて、情報発信していた時期

“継続は力なり”とは、昔からよく言われていたが、こうした地域活動を維持していく難しさは、ここまでの本会の活動の道程において、大きな起伏が 2 回ほど生じた。

限られた会員による定例委員会では、常に「いつ解散するか」の議論が延々と続いた。その中で、一番気になっていたことは、これまで、会員をつなぎ、更には地域をもつなぐ役割を担うまでに発展した機関誌「OUR LIFE」の発行をいつ取り止めるかの決断であった。

しばらくは、結論を出せないまま、議論だけが交差し、時間だけが経過したことを、今、こうして「30 年誌」の機関誌「OUR LIFE」の章立てをまとめながら回想できる。「会を閉じることは簡単なことであるけれども、本会の結成の時のことを思うと、再び会を創ることの困難さをしっかりと認識していかなければならない。」と、これまで、本会の運営に熱い

思いで関わってこられた会員からの意見で、これまで活動の指針においていた「協働」を基に、無理なく「福祉文化実践活動」が出来る選択肢で、機関誌「OUR LIFE」を継続して発行することをなんとか確認できた。福祉文化実践活動を機関誌「OUR LIFE」にまとめ上げることが出来ない時期が生じながらも、「見える化」「わかる化」への努力をしていく中で、これまでの本会の活動に、多大な理解をしていただいた企業の社会貢献活動により、こうした活動継続の危機を迎えた時に、機関誌「OUR LIFE」を継続的に発行につないでいただいたことは、その後の本会の活動の活性化に大きな支えとなったことを明記しなければならない。ここに紹介した機関誌「OUR LIFE 第 40 号」は、本会結成 10 年目（平成 17 年度）、なんとか企業の歩み寄りでのこの 40 号を 1 回のみ発行出来た。

記事から、当時、男性 40 名、女性 35 名 計 75 名が会員と記録されている。この時代は、焼津市や大学、志縁団体等との協働による、日本リクレーション協会助成事業「わんぱくあそびフェスティバル」等、積極的に子どもの健全育成に関わっていたことが読み取れる。



4 今、ここにきて、ようやく「情報発信こそ福祉文化」に気づく

この「30年誌」では、ここまで、機関誌「OUR LIFE」の誕生の経緯と、世代や領域を超えた幅広い会員構成による本会活動内容を、いかに全会員に伝えることが出来るかの取り組みの努力から、更には、会員から地域社会に向けた「静岡発 福祉文化の創造」に、機関誌「OUR LIFE」が果たしてきた役割を振り返るとともに、本会の存続危機の時代に、機関誌「OUR LIFE」の発行継続に、理解ある企業の社会貢献活動の支援により、なんとか、ここまでつなげることが出来た経緯をまとめてきた。

ここでは、更に「静岡発 福祉文化の創造」の発信を、機関誌「OUR LIFE」を含めて、「情報発信と福祉文化」の視点から検証し、次の時代への課題を探ることにする。

異業種交流、世代を超えた交流の場、共助社会の再構築、専門性と市民性の融合等、様々な角度から「静岡発 福祉文化の創造」を県域に発信して30年の節目を迎えた本会の活動ではあるが、果たして、「福祉文化の推進」がどこまで発信できたか、改めて、第1章の本会発足の原点を問い質すと、静岡県に「福祉文化」の動きが伝わってきたのは、1989年7月「日本福祉文化学会」結成から3年後であった。専門性や公助による社会福祉課題解決の時代を迎える時期に、これまで培われてきた「共助社会」の維持を「福祉文化」と置き換えていく地域社会が求められると、にわかに県内の有志が議論をし始めていた時期でもあった。その4年後に、「日本福祉文化学会」より、静岡県内で「第11回福祉文化現場セミナー」開催の要請を受けた。これまでの議論からの思いを形にしようと、40名の県内外の有志が中心になって、要請を実現する動きが始まった。

阪神淡路大震災発生から1年後（平成8年・1996年3月）、「静岡発・みんなで語ろう福祉文化を21世紀の礎に」をスローガンに「人間らしい豊かさをめざして、いま文化としての福祉を語る」を研修テーマに掲げ、全国各地から400名余の参加者と熱く語り合ったその思いを形にして、「災害と福祉文化」を追求する「地域発福祉文化の創造」に取り組む「市民活動団体」として、「活動目的」を掲げて、平成8年・1996年9月に「静岡福祉文化を考える会」が誕生した。

この30年間、「静岡発（地域発）福祉文化の創造」を理念として、「専門性と市民性の融合」「公開型地域総合型学習による理論と実践」「課題解決に向けた福祉文化のプロセス重視」の「3つの活動基調」を掲げて活動に取り組んできた。

さらに、「第1の柱立て：啓発学習事業→静岡発（地域発）福祉文化の創造をめざして、県内各地の地域総合型啓発学習に学ぶ」「第2の柱立て：調査研究事業→県民の協力により、一貫して、その時代の地域社会問題をテーマに調査研究活動に取り組み、その結果をその都度県民とともに、地域総合型学習により課題解決に向けた議論を深める」「第3の柱立て：実践地区活動事業→広く県内各地の実践事例を共有し合い地域診断のもとに、確かな地域性を把握し、さまざまな実践活動を展開し、協働による福祉問題解決のプロセスの重要性を確認する」の「3つの柱立て」のもとに、各年度の地域課題をテーマに活動を展開してきた。

こうした、本会の細やかな福祉文化実践活動を単なる実績として留めておくだけではなく、いかにして、地域住民一人一人の問題として受け止め、これからの地域づくりに活かすために、「福祉文化」そのものをそれぞれの立場で認識し、決して行政言葉にすることなく共有していくことこそ、永遠の課題であると、常々活動の中で認識してきた。

この第7章では、本会発足からの「OUR LIFE」を、様々な角度から振り返ってきた。

結成当初は、会員の熱い思いから、発行回数やページ数などの制約を持たずに精力的に発行につなげてきたが、今日では、年間活動計画に「機関誌 OUR LIFE 発行」は、概ね年4回、A4版、4ページ構成、上質紙印刷、200部発行を基本にしている。発行部数は、結成当時からしばらくは、会員中心の配布（約80部）であったが、その後、本会誕生に多大な支援をいただき、現在に至っている「日本福祉文化学会」及び「学会中部東海ブロック」をはじめ、各種助成事業で支援をいただいている「さわやか福祉財団」「あしたの日本を創る協会」「愛恵福祉支援財団」「静岡県共同募金会」「ふじのくに未来財団」「静岡県コミュニティづくり推進協議会」、さらには、「静岡県社会福祉協議会」「県内市町社協」「静岡市ボランティア団体連絡協議会」、協働団体の「焼津福祉文化共創研究会」、関係機関・団体、地域実践者等、配布対象がさらに広がり現在に至っている。

こうした、機関誌「OUR LIFE」による「静岡発 福祉文化の創造」の発信を続けながら、県内各地域にまで「福祉文化」を発信するために、更に、「なぜ、いま福祉文化なのか」をもとに、日常的にマスコミ各社にも働きかけてきた。

今日、超情報化時代にあって、様々な情報が日常的に氾濫している社会を迎えている。

「選択的情報提供」として、「静岡発 福祉文化の創造」の情報発信については、本会結成当初に、既に、多くの会員からホームページ作成等の実現にむけた議論を重ねてきた。

しかし、予想される継続的運用経費の確保や日常的管理運用等、ホームページ導入の議論を深めれば深めるほど、理想の域にとどまり、この問題は潜在的議論となり、当面は、手作業で「福祉文化」を発信していくことで落ち着いていた。

再び、ホームページ作成等が浮上してきたのは、「第4章：静岡県委託事業・一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」にまとめた、平成20年度から取り組んだ事業において、会員の有志が、この領域の技術を本事業に組み入れて暫く取り組まれた。しかし、あくまでも、個人的な技術提供範囲の作業であったため、組織として、広く「福祉文化関連事業」としての情報発信は短期間にとどまった。

今でも、関連サイトにアクセスすると、当時の本会の活動内容を顧みることは出来る。

その後、今日まで、本会の福祉文化実践活動全体を、広く情報発信できる仕組みが実現した経緯の概要を紹介する。

■「焼津市港地域ささえあい講座」の実行委員会論議

焼津市内の中学校区で、住民主体による「地域を学ぶ講座」を立ち上げるにあたり、実行委員会（25名）を設置して、いかに若い世代や地域住民に講座の内容を発信し「見える化」できるかを議論する中で、「ブログ」の立ち上げの具体化とともに「QRコード」の作成に取り組み、3年間、講座の内容をきめ細かく情報を発信した。

■「焼津市港地域ささえあい講座」から「焼津福祉文化共創研究会」の結成を契機に

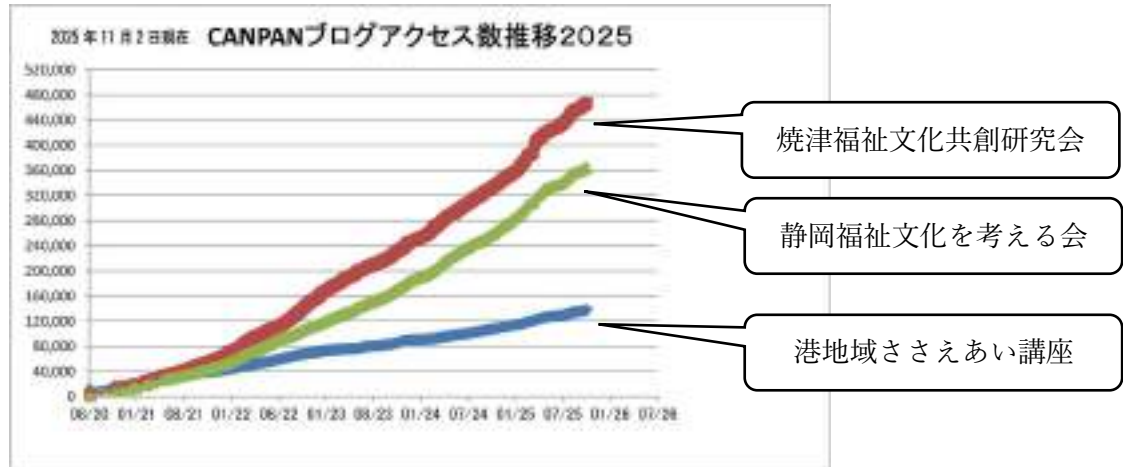
3年間の講座総括後、令和元年度に、引き続き「地域の福祉課題を学習できる活動」を立ち上げようと、実行委員を担った中から14名で「焼津福祉文化共創研究会」を結成した。

講座開講中から取り組んできた「ブログ」の運用を日頃の活動につなげ、若者層や身近な地域住民への情報発信に努め現在に至っている。研究会の会員の中に、本会会員も加わっていたことから、「静岡福祉文化を考える会」の「ブログ」を並行的に立ち上げ、研究会をはじめ、関係領域と「リンク」するつながりを構築した。主には、機関誌「OUR LIFE」をはじめ、各種研修会開催告知や経過報告、各種調査研究報告書、各種会議議事録等、日々の福祉文化実践活動の中で、それぞれの内容を「ブログ」にアップする作業を継続的に取り組み現在に至っている。

■「ブログ」のアクセス件数の推移

毎月、「ブログアクセス件数の推移」を公表している。

ここに、令和7年度11月2日現在の前述した「焼津市港地域ささえあい講座」「焼津福祉文化共創研究会」「静岡福祉文化を考える会」それぞれの推移を下のグラフでまとめている。



下のグラフは、同じく令和7年11月2日現在の「静岡福祉文化を考える会」の日々のアクセス件数である。最近は、アクセス件数が急増している傾向にある。こうして、日頃の福祉文化実践活動を「見える化」することで、社会の動きを垣間見ることが出来る。



5 改めて、この10年間の機関誌「OUR LIFE」から福祉文化を検証

本会結成以来、発行してきた機関誌「OUR LIFE」の内容は、「10周年記念誌」では、創刊号から第40号まで、「20周年記念誌」では、第41号から第103号までをそれぞれ掲載した。

この「30年誌」では、その後、平成28年度から令和7年度まで10年間発行してきた中から、平成28年度：第104号・第110号、平成29年度：第111号・第117号、平成30年度：第118号・第121号、平成31年度/令和元年度：第122号・第128号、令和2年度：第129号・第133号、令和3年度：第134号・第139号、令和4年度：第140号・第145号、令和5年度：第146号・第151号、令和6年度：第152号・第156号、令和7年度：第157号と、概ね、それぞれ各年度の初めと年度終わりに発行した各1ページ（掲載内容表記）を次のページから紹介する。（但し、令和7年度は、第158号4ページを掲載）

Life・Culture & Welfare 平成 28 年（2016）4 月 1 日発行
地域から発信 福祉を文化へ

OurLife104号

静岡福祉文化を考える会

代表 平田 厚
〒420-0841 静岡市葵区上足洗 3-7-15-5
Tel & Fax 054-246-1486
編集委員 家本豊 古屋貴彦 平田厚

内 容	「若者発 ご近所福祉かるた」で 1 地域づくりに挑戦始まる	健康寿命日本一推進フェアでかるた 3 を通じてふれあい交流
	「若者発 “居場所” あり方研究会」が 2 大学内「同好会」として始動	焼津発 集まる居場所を創る 3 「第2回社会教育カフェ」に協力
		事務局日誌詳見 編集後記 4

「若者発 ご近所福祉かるた」で 地域づくりに挑戦始まる 100セットの配布・設置が完了 活用レポート届き始まる

このたび、作成した「若者発 ご近所福祉かるた」は、尊い赤い羽根募金助成事業により誕生した経緯から、単に成果物を配布することが目的ではなく、いかに生活圏における支え合いのしくみを構築するかを、広く県民に課題提起をしていく「地域総合型学習」に活用していくことに意義がある。会員をはじめ、各種協力機関・団体・学校・実践者・研究会会員等に計53セット、福祉施設・グループホーム・サロングループ等に10セット、そして4セットから6セットをまとめたラックを8組（計37セット）総計100セットが県内各方面で動き始めている。会員各位に配布した「かるた」は、「アクセス（手引書）」に基づき、それぞれ会員の身近な地域において積極的に活用していただき、その反響や改善意見を提案していただくことは、立派な福祉文化実践活動につながると確信する。既に、配布・設置した各方面からは、「活用レポート用紙（アンケート）」により、「ゆずってほしい・購入できるか」「地区のサロンで活用する」（この意見が圧倒的に多い）「地域の仲間の賛同で、これから自宅解放でサロンを設置する。是非活用していきたい」「老人クラブで活用したい」（意外とこの問い合わせが多い）「社協から借りて孫と取り組んだ」「まちづくりで活用したい」等、問い合わせ及び、貴重な実践活動後の意見が寄せられている。購入希望の県民も多く、いずれ地刷を検討しなければならない。当初、「静岡発 ご近所福祉かるた」としていたが、議論の末、多くの若者の発想をもとに取り組んだ経緯からすれば、「若者発」が妥当とあえて、「若者発」を大きくクローズアップした意義を強調し、若者の存在と若者の地域参加を、大人社会がいかに呼びかけていくことが出来るかを検証する機会にし、平成28年度より、常葉大学内で、同好会として始動する「若者発 “居場所” あり方研究会」に、積極的に地域実践活動で活用していただくことを託していくこととしたい。また、県内各学校教育（福祉教育）や各地域の各種研修会において、ワークショップ方式等により、意見交換や討論を交えた、多様な学習方法を提案していくよう努力する。

■ 掛川市初馬地区「一體會」サロンで和やかに交流 ■

毎月第4金曜日に地域の長寿者の皆さんがお寺の住職さん（袴田豊昭様）と過ごす「一體會サロン」。 「若者発 “居場所” あり方研究会」メンバー3名と共に、2月26日（金）に訪問し、出来上がった「かるた」を持参し、和やかにふれあい交流をした。日頃、お仲間と遠慮されている長寿者のAさんなどは、めったに若者とふれあう機会が少ない環境にあって、この日ばかりは、大いに張り切った姿に、会場は大笑いのひと時であった。



Our Life 110号

静岡福祉文化を考える会

代表 平田 厚

〒420-0841 静岡市葵区上足洗 3-7-15-5

Tel & Fax: 054-246-1486

編集委員 家本豊 古屋貴彦 河野恵介

平田厚

内 容

- ささえあい講座からフォーラム協力支援……………P.1
- ご近所福祉を問題提起したこの1年「第3回公開型研修会」……………P.2
- 平成29年度の活動の方向性は……………P.3
- 平成29年度全体会、事務局日誌拝見、編集後記……………P.4

「地域ささえあい講座」から「新しい地域支援フォーラム」支援協力 福祉文化実践展開で地域づくりに取り組む

「焼津市港地域づくり推進会」（5,000世帯）が、市民主体の実行委員会（15名）で取り組んだ「港地域ささえあい講座」（すでに、前号109号で概要紹介）。この講座は、市民一人ひとりが主体的に担う地域を学び合う参加型講座。

世代や領域を超えて、港地域を楽しく語り合いながら、知恵（アイデア）を出し合い、これからの地域づくりを語り合った。本会では、資料の作成や、運営支援を側面的に関わり、「福祉文化の創造」の実践的試みを、参加者に伝授した。

主には、『ワークショップ』をもとに、「地域の良きや課題」「ご近所福祉の現状とこれからの語り合う」「高齢者世帯の事例から、問題解決に向けて、市民一人ひとりの地域デビューを語り合う」など、身近な生活圏域の生活課題を語り合った。延べ186名が参加した。

参加者の声は、「自由に発言できる雰囲気でもとてもよかった」「全3回講座に参加したが、参加者それぞれが、共通の問題を持っていることが解った」「地域ささえあい講座そのものが“居場所”」など。

11月から1月まで開講した、この「港地域ささえあい講座」（焼津市内の地区）から「新しい地域支援のあり方考えるフォーラム」（焼津市全市・2月28日）へとつなげるべく、拡大実行委員会にも本会は協力として関わりを持ち、当日は、予想をはるかに上回る320名の参加で、さらに、「福祉文化の創造」を市民に呼びかけた。

さわやか福祉財団会長・堀田力氏の「今、助け合いをやろう」の基調講演では、これからの地域のあり方について貴重な示唆をいただいた。

「若者発“居場所”あり方研究会」は、若い世代の地域参加を呼びかけ、今こそ若者の地域デビューのプログラムに登場した。

会場の一角には「ご近所福祉その意識と実態調査報告」をチャートで紹介。堀田先生も関心を持たれた。



運営に協力する学生会員



「ご近所福祉 その意識と実態調査」に関心を持たれる堀田先生



「若者発“居場所”あり方研究会」いよいよデビュー！フォーラムで堀田先生と対談！！

Life・Culture & Welfare
地域から発信 福祉文化へ

Our Life 111号

静岡福祉文化を考える会

代表 平田 厚
〒420-0841 静岡市葵区上足洗 3-7-15-5
Tel & Fax: 054-246-1486
編集委員 家本豊 古屋貴彦 河野恵介
平田厚

内 容

- 22年目の調査研究活動“ご近所福祉”から“真の居場所”を福祉文化の視点から探る……………P.1
- 私たちにとって“居場所”とは、公開型研修会盛り上がる……………P.2
- 居場所の誕生のプロセスを学ぶ 90世帯の町内会で、今なぜ“居場所”なのかを検証
2年目の「居地域ささえあい講座」協力……………P.3
- 第16回福祉文化研究セミナーへの期待、事務局日誌拝見、編集後記……………P.4

22年目の調査活動“ご近所福祉”から“居場所”を福祉文化の視点から探る

「静岡福祉文化を考える会」は、この21年間「静岡発 福祉文化の創造」を目指した実践活動の大きな柱立ての一つに、その時代の地域社会を取り巻く様々な福祉課題を「調査テーマ」にした「調査研究活動」に取り組み、その分析結果を、県内各方面での研修会や本会の公開型研修会などで公表し、世代を超えた「地域総合型学習」を通じて問題提起をし、県民一人ひとりの意識改革に努めてきた。このたび、静岡県社会福祉協議会ふれあい基金地域福祉・ボランティア活動等活動推進助成事業の助成金交付決定をいただき、今年度の調査研究活動に取り組む見通しができた。これまでの調査研究活動を振り返ると、平成9年「①共働きに関する調査」に始まり、「②私たちにとって、地域とは何か(1) 意識と実態調査」、「③私たちにとって、家族とは何か調査」、「④父親に関する調査」、「⑤ボランティア活動実践者意識調査」、「⑥私たちにとって、家族とは何か調査」、「⑦青少年の生きがいに関する調査」、「⑧地域とは何か(2) 意識と実態調査」、「⑨子どもと社会環境に関する調査(継続調査)」、「⑩子どもと社会環境に関する調査(総括)」、「⑪地域活動と団塊の世代の役割に関する調査」、「⑫長寿者の生きがい、その意識と実態に関する調査(静岡県共同募金会助成事業)」、「⑬日常生活と福祉情報に関する意識調査(静岡県委託事業)」、「⑭長寿社会に関する県民意識と本音に迫る調査(静岡県委託事業)」、「⑮いまこそ地域社会に福祉文化を拓く 生活圏域における支え合いとはなにか調査(静岡県委託事業)」、「⑯地域と私の居場所 その意識と実態調査(静岡県委託事業)」、「⑰家族ってなに その意識と実態調査(静岡県委託事業)」、「⑱長寿者とつながるホッとすご近所づくり その意識と実態調査(静岡県委託事業)」、「⑲豊かに暮らせる地域づくり その意識と実態調査(静岡県委託事業)」、「⑳若者の地域参加 その意識と実態調査」そして、平成28年度には、“ご近所福祉”をキーワードに「㉑ご近所福祉 その意識と実態調査」に取り組んだ。

実に大きな反響をいただき、調査結果をそれぞれの県内各地で検証していただいた。通算22回目となる今年度は、これまでの展開を継承しつつ、テーマ『居場所ってなに? その意識と実態調査』を実施する。500名程度の回収規模で実施。調査項目は、(1)基本属性、(2)住民の生活状況、(3)地域との関わりの意識、(4)地域との関わりの実態、(5)地域と取り巻く望ましい生活環境、(6)地域との関わりの実態、(7)提言(自由意見)の7項目とする。8月より、「調査委員会」を設置、9月より、調査研究票を送付予定。会員をはじめ参加機関・団体、地域実践者のご協力をお願いする次第である。



静岡福祉文化を考える会

代表 平田 厚

〒420-0841 静岡市葵区上足洗 3-7-15-5

Tel & Fax: 054-246-1486

編集委員 家本豊 古屋貴彦 河野恵介
平田厚

Our Life 117号

- ＊内容＊**
- 15年前を思い出す「第13回日本福祉文化学会大会静岡大会」今年第28回東京大会開催……P.1
 - 「居場所ってなに？ その意識と実態調査」1,443校の単純集計から……P.2
 - 「居場所活動検証訪問」7ヶ所から見えたものは……P.3
 - 平成30年度当面の委員会、全体会（公開型研修会）ご案内／事務局日誌拝見……P.4

15年前を思い出す「第13回日本福祉文化学会静岡大会」 今年第28回東京大会のキーワードは“いのち”、“暮らし”

早いもので、平成14年11月30日（土）～12月1日（日）、裾野市民文化センターを会場にして、全国から600名余の参加者を迎えて開催した「第13回日本福祉文化学会大会 IN しずおか」から、あっという間に15年余りが過ぎた。今振り返ると、開催3年前から、学会事務局と県内外各地から42名の実行委員会（通算8回開催）を立ち上げて、大会事務局を置いた焼津市と、会場になった裾野市を数えきれないほど行き来し、協議や連絡調整を積み重ねた。静岡大会を何とか地域社会を巻き込んで実現したいという熱い思いもあり、主には、社会福祉法人富岳会、裾野市、裾野市社会福祉協議会等の全面的なご支援をいただき、「静岡発 福祉文化の創造」をもとに、前年の平成13年11月29日には、裾野市で「プレ大会」の開催も実現。本大会テーマ「富士山麓 いのちと暮らしによりそう福祉文化の創造」をもとに、関係者が一丸となって取り組んだことがつい最近のように思い出される。

平成29年度の「第28回日本福祉文化学会全国大会（東京大会）」が、2月18日（1日開催）、東京・池袋の立教大学池袋キャンパスにおいて、全国から多数の参加者が集い、大会テーマである「いのち」と「暮らし」を拓く福祉文化の創造をもとに開催された。久々に参加して、特に「いのち」として「暮らし」の共通キーワードはあの時（静岡大会）から15年の今も永遠のテーマであることに気づかされ、今こそ福祉文化の創造だと感じた。

馬場学会会長は、今回の東京大会について、近年、「いのち」がそんなに扱われたり、「暮らし」がないがしろにされるようになってきことが相次いでおり、「文化のメガネで福祉を見る」ことによって、実態を明らかにし、すべての「いのち」が輝き、さまざまに彩られた「暮らし」が、息づくためにはどうしたらよいか、考えよう、そして、今回は、(1) 特別講演…上野千鶴子さん（社会学者）の「死にゆく者の自虐―「おひとりさま」時代の生と死」、(2) 福祉文化研究・調査プロジェクト「中間報告」、(3) 自主シンポジウムの3点の企画中心にプログラムを展開すると強調された。その他、学会会員による「研究発表」①福祉コミュニティ、②福祉コミュニケーションが行われた。会場内で、「新潟福祉文化を考える会」、「沖縄福祉文化を考える会」はじめ、本会にこれまで直接・間接ご支援いただいている学会会員関係者と久々に交流を深め、引き続き、ご支援をお願いした。

～第13回静岡大会の時の様子～



会場は、超満員



運営は富岳会の全面的な協力



会場の様子

●静岡福祉文化を考える会 機関誌 Our Life No.117 2018年3月15日発行

Life・Culture & Welfare

地域から発信 福祉を文化へ

Our Life 118号

静岡福祉文化を考える会

代表 平田 厚

〒420-0841 静岡市葵区上足洗 3-7-15-5

Tel & Fax: 054-246-1486

編集委員 家本豊 古屋真彦 河野恵介
平田厚

＊ 内 容 ＊

- いまこそ、“真の福祉文化の創造”を目指して……平成 30 年度は、「子どもと福祉文化」……………P.1
- 「福祉文化と子どもを育む地域づくりを考える」をテーマに第 1 回公開型研修会開催……………P.2
- 3 年目の「港地域支え合い講座」への支援助動……………P.3
- 事務局日誌拝見／福祉文化実践活動を一緒にしませんか 編集後記……………P.4

いまこそ、真の福祉文化の創造を目指して 静岡福祉文化を考える会 平成 30 年度の活動テーマは 子どもたちを地域ぐるみで育む福祉コミュニティの構築に向けて

本会は、平成 8 年 9 月に結成以来、23 年目の活動に入る。これまでの 23 年間を振り返ってみると、「公開型研修会」は、延べ 90 回開催、「福祉文化研究セミナー」は、静岡県において「第 13 回日本福祉文化学会静岡大会」開催が実現後、福祉文化の創造の火を消さないために、立ち上げ、何とか組々とはあるが「第 16 回福祉研究セミナー」の開催につなげてきた。また、本会の大きな活動である「調査研究活動」は、結成以来、その年度の社会課題をテーマに取り組み続け現在に至っている。改めて、平成 30 年度の活動は「福祉を文化にする、静岡発 福祉文化の創造」（豊かに暮らせる身近な地域づくりを日々努力する）とは何かを検証する活動の原点に戻り、本会の活動基調である「専門性と市民性を融合した活動」「広く地域課題を共有した地域総合型学習活動」「新たな地域課題解決に向けた活動」をもとに、情報の共有、広報啓発、人的交流、プロセスを重視し、人々が支え合って暮らし合う生活圏域における「地域課題」を掘り起こし、課題提起をする取り組みとして、「生活会議」と置き換え、実践活動に取り組み、本会は、10 年前の平成 17 年度・18 年度の 2 年間にわたり、子どもたちを取り巻く地域環境について理論と実践を融合し講演をしてきた。今、地域社会では、にわたり、「子どもを取り巻く地域課題」をテーマに取り組んできたこの課題を 10 年以上たった今、家庭・家族機能のあり方が問われている。子どもたちを取り巻く身近な生活圏域の地域環境について、いかにして、コミュニティ組織の中で、大人社会は子どもたちと向き合い、地域ぐるみで子どもたちを育む地域づくりが出来るか、「協働」をもとに身近な生活圏域の問題として取り組むこととする。

平成 30 年度静岡福祉文化を考える会 活動着眼項目

- (1) 引き続き、若者の参加を呼びかけていく。特に、発展的活動として 3 年目に入る「若者発「居場所」あり方研究会」（常葉大学同好会）とは、日常的な連携を維持し、これまで本会が課題提起をしてきた「若者の地域参加」「居場所」をより具体的に実践し、「子ども支援」を通じて「居場所」に関する研究を深めていくための連携を図る。
- (2) 市民主体のコミュニティ構築の必要性を、各活動項目に随所に強調し、地域における住民主体の「地域総合型学習」の取り組みを深める。
- (3) 福祉コミュニティ再構築に向けた県民の意識と実態把握事業 ―地域ぐるみで子どもたちを育む環境づくりへの提言― に取り組む。これまでの実践活動から、福祉コミュニティの再構築のキーワードを「子どもを育む地域づくり」とし「家庭・家族機能」を再認識し「真の子どもの居場所」を問う。
- (4) 自主的な「共創社会研究会」を設置し、子どもの取り巻く環境について広く意見を求める。
- (5) 「日本福祉文化学会」「あしたの日本を創る協会」「ふじのくに未来財団」「静岡市ボランティア連絡協議会」等の関係団体との連携をもとに、福祉文化実践活動を継承していく。

Our Life 121号

静岡福祉文化を考える会

代表 平田 厚

〒420-0841 静岡市葵区上足洗 3-7-15-5

Tel & Fax: 054-246-1486

編集委員 家本豊 古屋貴彦 河野恵介
平田厚

- * 内容 *
- 第29回日本福祉文化学会大阪大会における本会実践発表から第30回大会へのプロセス……P.1
 - 協働による「静岡発 福祉文化の創造」を検証 焼津市「港地域さきえあい講座」の手応え……P.2
 - 「若者発 ご近所福祉かるた」復活の時 身近な学び合いで、今こそ地域活性化に挑戦……P.3
 - 「居場所」から子どもを育む地域づくりを議論/第3回公開型研修会のご案内……P.4



謹んで、新春のご祝詞を申し上げます



あつという間に、2019年を迎えました。本会は今年、24年目の活動へと進めてまいります。

今こそ、「静岡発 福祉文化の創造の時代」を迎えていることを実感します。第29回日本福祉文化学会大阪大会において、「静岡福祉文化を考える会 23年間のプロセス 意識と実態調査研究活動からの検証」と題して、17年ぶりの実践発表を通じて、本会の活動基調は、福祉文化の創造をしっかりと内在していることを検証できました。参加者から、活動の原点に立った福祉文化実践活動の持つ意味は大きいと評価をいただきました。改めて、今年も、地道な取り組みを大きく地域社会に提言していく努力をしましょう！

第29回日本福祉文化学会大阪大会の本会実践発表から第30回へのプロセス

第29回大阪大会における実践発表「地方発福祉文化の創造」23年のプロセスから～調査結果から見る県民の意識と実態の変化～(平田・河野学生会員)の概要を紹介する。

本会の結成は、県内の高校生から先輩市民約70名の運営により、阪神淡路大震災発生1年後の1996年3月「第11回日本福祉文化学会・福祉文化現場セミナー」の開催が契機。“人間らしい豊かさをめざして、今文化としての福祉を語る”をテーマに全国から400名もの参加で議論を深めた。静岡発 みんなで語ろう 福祉文化の火を消さないようにと、9月に「静岡福祉文化を考える会」は、活動基調を、(1)さまざまな分野で活動する人達が、専門分野と世代を超えて交流を回す、(2)会員だけが求心的・閉鎖的に集うことなく、広く市民に開かれた活動をめざす、(3)既存の福祉組織の活動から取り残された問題や新しく発生してきた問題を大切に、つねに市民生活に密着した活動をめざす、をもとに23年目の活動に取り組み現在に至る。

結成以来23年間、「調査研究活動」を基に「地方発福祉文化の創造」を発信し課題提起をしてきた。

本会の活動方法は、「意識と実態をもとに、その時代の地域課題をテーマに県域の調査研究活動の実施」「地域住民と向き合い、調査の課題を検証する現場セミナーの取組み」「調査結果から浮き彫りになった提言を広く公開型で市民と共に検証する研修会の開催」の3つの柱立てと、広報誌『Our Life』(毎回200部発行・現在までに119号発行)、「若者発 ご近所福祉かるたの製作」(県委託事業・赤い羽根助成事業等)により、広く県民に「福祉文化の創造」の実践的体験的手法を積極的に展開してきた。

最近3年間の「若者の地域参加」(2015年度実施)、「ご近所福祉」(2016年度実施)、「居場所」(2017年度実施)のそれぞれの意識と実態調査結果から、地域コミュニティの希薄化・個人志向化、共助意識の弱体化・公助依存の傾向が浮き彫りになってきた。専門性(制度)と市民性をいかに融合できるか、大人社会が若者社会と共生し、協働出来る仕組みを構築できるかを働きかけていく時代を今迎えている。

第30回名古屋大会では、これまでのプロセスから「子どもを育む地域づくり」を課題してみたい。

Life・Culture & Welfare
地域から発信 福祉を文化へ

Our Life 122号

静岡福祉文化を考える会

代表 平田 厚

〒424-0841 静岡市清水区追分 3-5-17

NPO 法人 泉の会内

Tel.: 054-367-2878 Fax: 054-367-2884

編集委員

藤下品子 古屋貴彦 河野恵介 平田厚

＊
内
容
＊

- 2019年度は引き続き「子どもを地域でいかに育むか」と「ご近所福祉の再構築」に取り組む……P.1
- 23年間、静岡発福祉文化の創造のお力添えに感謝します「家本豊さん」「大石さきさん」……P.2
- ホットとする地域を「円卓議論」参加者大いに語りあった公開型研修会「学会大会について」……P.3
- 第1回公開型研修会開催案内／事務局日誌拝見／編集後記 ……P.4

2019年度活動テーマは「福祉コミュニティの再構築と子どもの福祉文化を創る」 引き続き「子どもを地域でいかに育むか」と「ご近所福祉の再構築」に取り組む

本会は、いよいよ2019年度24年目の活動に入る。これまで、結成当初からの活動基調「専門性と市民性を融合した活動」「広く地域課題を共有した地域総合型活動」「新たな地域課題解決に向けた活動」をもとに取り組んできた。今年度もこの基調のもとに、情報の共有、広報啓発、人的交流、プロセスを重視し、人々が支え合って暮らし合う生活圏域における「地域課題」を掘り起こし、課題提起をする取り組みを、「生活会議」と置き換え、福祉文化実践活動に取り組む。いま、希薄化・弱体化している「家庭・家族機能」を検証するとともに、地域を家庭化する「子どもを育む地域づくり」を福祉コミュニティの再構築として、「真の子どもの居場所」を議論し合い、「子供を取り巻く環境と福祉文化」を検証し、「静岡発 福祉文化の創造」（豊かに暮らせる身近な地域づくりを日々努力する）とは何かを地域における住民主体の「地域総合型学習」により論議をする。

日本福祉文化学会が重要活動とする「現場セミナー」を静岡県で開催し、平成8年9月に本会が誕生した。

そして、平成14年には、中部東海ブロック管内で初めて「第13回日本福祉文化学会静岡大会」を開催した。

17年ぶりに、再び、同ブロック近隣愛知県名古屋市・中京大学名古屋キャンパスにおいて「第30回日本福祉文化学会全国大会東海大会」が開催される。これを契機に、近隣地域との連携のもと、新たな時代を「地方発 福祉文化の時代」となるよう、広く県民に働きかけていく。

本会23年間の福祉文化実践活動（「調査研究活動」「ご近所福祉かるた」「地域との協働のプロセス」）を検証すべく、学会第30回大会において実践発表し、真に「地方発 福祉文化の創造」を発信する努力をする。

主な活動は、

1. 委員会の開催…年6回、全会員が出席し、意見を交わし合うことができる。
2. 実践活動として、「若者発 ご近所福祉かるた」の積極的・有効的活用とともに、「かるた」の活用状況把握に努め「ご近所福祉」を検証する。
3. 現場視察研修…地域の子どもの対象とした実践活動地域を積極的に訪問検証し、地域社会づくりへの提言につなげる。
4. 啓発学習活動
 - (1) 公開型研修会の開催…できる限り、小地域の生活圏域で地域の課題解決に向けた話し合いの場を創り「生活圏域の地域での福祉文化論議（生活会議）」の取り組みとして、県民が参加できる「公開型研修会」を開催する。
 - 第1回 05月18日（土）テーマ：子どもと福祉文化を語ろう
 - 第2回 08月03日（土）テーマ：地域の子どもの支援の実践に学ぶ
 - 第3回 03月14日（土）テーマ：大人が変わる、地域が変わる、子どもが変わる ホットする地域とは
 - (2) 「第18回静岡県福祉文化研究セミナー」開催
『福祉文化と子ども』ワークショップ「昔の子ども、今の子どもからの学び」
5. 調査研究活動 前年度調査結果を考察し、『子どもを取り巻く地域環境 その意識と実態』を検証する。
6. 広報・啓発活動 年4回「機関紙発行計画」に基づき『Our Life』の発行

Our Life No.128 号

* 内 容 *	➢ 2019年度から2020年度へのリレーション 25年の節目に……………p.1
	➢ 県社協ふれあい基金助成事業「共創社会実現研究会」の総括……………p.2
	➢ 「大人が変わる、地域が変わる、子どもが変わる地域づくり」第3回公開型研修会から……………p.3
	➢ 2020年度全体会開催案内 事務局日誌拝見……………p.4

“静岡発 福祉文化の創造” 2019年度から2020年度へのリレーション 25年の節目に

令和2年度(2020年度)の活動は、2019年度を引き継ぐ
活動テーマは、「つながるご近所の再構築 決め手は一体何か、ご近所福祉の復活「近助」を探る」

本会は、阪神淡路大震災発生一年後の平成8年9月に結成して、今年度は25年目の節目の活動に入る。「災害と福祉文化」を追求する「地方発福祉文化の創造」に取り組む志縁組織の市民活動集団ともいえる。今日、大きな社会の変化で、災害問題をはじめ、長寿者・子どもの問題にとどまらず、地域社会全体の個人志向・希薄化と共に、福祉コミュニティ組織も複雑多様化した課題が浮き彫りになっている。

本会の活動の基調は、*第一「専門性と市民性の融合」*第二「公開型地域総合型学習の企画と実践」*第三「課題解決に向けたプロセス重視」を、結成当初から、これまで福祉実践活動に掲げて展開し、今日に至っている。こうした「活動基調」をもとに、さらに、3つの柱立て *第1の柱立て「啓発学習事業」 「静岡発(地方発)福祉文化の創造」をめざして、県内各地の実践活動に学び「課題提起」をしつつ啓発学習に取り組んできた。*第2の柱立て「調査研究事業」 この24年間、一貫して、その時代の社会問題を検証する目的で、24種類の調査を県民の協力のもとに取り組み、その結果をその都度県民と共に地域総合型学習を通じて、課題解決に向けた議論を深め合ってきた。*第3の柱立て「実践地区活動事業」 広く県内各地の実践事例を共有し合い「地域診断」をし、確かな地域性を把握し、さまざまな実践活動を展開しながら、「協働」による福祉問題解決のプロセスの重要性を確認してきた。

本会のこれまでのプロセス重視から、令和2年度の本会活動テーマを「つながるご近所の再構築の決め手は一体何か 一ご近所福祉の復活一」(近助とは何かを探る)を掲げる。そして、「地域環境」を再検証するとともに、地域住民一人ひとりが、住み慣れた生活圏域で「ご近所の再構築」に向けた実践に取り組む。

再デビュー「若者発 ご近所福祉かるた」の有効活用でご近所福祉復活に取り組む

本会は、7年間、静岡県委託事業「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」に取り組んだ。そして、「ホッと私のご近所福祉を創る」をテーマに、平成25年度から平成27年度までの3年間にわたり、若者と共に「生活圏域におけるささえあいを“ご近所福祉”」と捉え、研究協議と福祉文化実践活動の末、「若者発 ご近所福祉かるた」(赤い羽根共同募金助成事業・鈴与マッチングギフト助成事業)を企画し製作実現化した。本会会員をはじめ、県内各地の団体・地域実践者に成果物を提供し、「ご近所福祉を学ぶ」教材として有効活用を託してきた。改めて、5年目を迎え、いまこそ「ご近所福祉の復活」を呼び掛け、成果物の活用度合いを確実に把握し、「若者発 ご近所福祉かるた」の再デビューを呼び掛け、理論と実践の融合による「近助」を学び合う取り組みを、令和2年度の重要な活動展開とする。

ご協力下さい、会員及び関係方面の皆さん「かるた」を復活します。

早急に、「かるた」のこれまでの活用状況を把握し、改めて活用方法を提示し、今年度の活用を強化します。

Life・Culture & Welfare
地域から発信 福祉を文化へ

Our Life 129号

静岡福祉文化を考える会

代表 平田 厚

〒424-0841 静岡市清水区迫分 3-5-17

NPQ 法人泉の会内 Tel:054-367-2878 Fax: 054-367-2884

編集委員

藤下品子 古原貴彦 河野恵介 平田厚

- * 内 ▶ 2020年度本会活動は「ご近所福祉」の再構築で地域づくり 25年目の節目にトライ ……P.1
- ▶ 2018—2019年度 2年間の取組み「子どもを育て地域づくり」検証報告から …… P.3
- 容 ▶ 「焼津福祉文化共創研究会」結成1年目の成果 「集まる居場所検証」から見えたものは…… P.4
- * ▶ 第2回公開型研修会のご案内/事務局日誌拝見 ……P.4

2020年度、本会活動は「“ご近所福祉”の再構築で地域づくり」 第1回公開型研修会は中止 25年目の節目にトライ!

いよいよ、本会は、25年目の節目に入る活動となる。「静岡発 福祉文化の創造」を発信し、この24年間の福祉文化実践活動をさらに継続しようとスタートに立った。4月19日は、会員全体会を含めた「公開型研修会」として、2月初旬から準備し、3月中旬までに会員他70名程の県民に研修会の案内状を送付した。

4月17日、県総合社会福祉会館管理室より、18日以降の会館の使用は難しいとの連絡を受けた。予め、参加申し込みをさせていただいた方々には、諸般の事情により、研修会を中止し、後日、第1回研修会の関連資料を送付する旨を伝えた。研修会の開催が出来ないのは残念ではあるが、一日も早く、正常な生活になることを願うばかりである。今年度は、本会役員改選の時期でもある。また、今こそ福祉文化の時代を構築しなければならないが、本会のような「志縁組織」は、少しずつ会員減少傾向にある。これまで、「地域組織」が地域を創ることが当たり前となっていたが、こうした認識がだんだん普遍化し、一人一人の意識は個人志向化傾向にきていることも伺える。改めて、「福祉文化の創造」に向けた、諸活動に積極的に取り組む一年間としたい。4月19日に開催する予定であった「第1回 静岡福祉文化を考える会 公開型研修会」は、研修テーマをつなぐ「ご近所の再構築」として、「近助」とは何かを探ることとした。研修参加者のご近所を語り合いながら、望ましいこれからのご近所を参加者同士で描いていこうとした。

●着眼項目は、(1)「静岡発 福祉文化の創造」24年間のプロセス重視学習を検証する場 (2) 世代を超えて、身近な生活圏域の課題解決に向けた議論(「生活会議」)をする場 (3)「今、あらためて、ご近所福祉その意識と実態」を語る場 (4)「私のご近所を診断、私が創る、ご近所福祉これまでとこれから」を語る場 を掲げていた。

25年の節目を迎えた本会の3つの活動基調を、今一度、ここで共有していきたい。

*第一「専門性と市民性の融合の関わり」 *第二「公開型地域総合型学習の企画と実践」 *第三「課題解決のに向けたプロセス重視」である。この「3つの活動基調」をもとに、24年間、一貫して福祉文化実践活動を常に「3つの柱立て」をもとに展開していることも、重ねて再確認をしていきたい。

*第1の柱立て「啓発学習事業」⇄「静岡発(地方発)福祉文化の創造」をめざして、県内各地の実践活動に学び「課題提起」をして「地域総合型啓発学習」に取り組んできた。*第2の柱立て「調査研究事業」⇄この24年間、一貫して、その時代の社会問題を検証する目的で、24種類の調査を県民の協力をもとに取り組み、その結果をその都度県民と共に地域総合型学習を通じて、課題解決に向けた議論を深め合ってきた。*第3の柱立て「実践地区活動事業」⇄広く県内各地の実践事例を共有し合い「地域診断」をし、確かな地域性を把握し、さまざまな実践活動を展開しながら、「協働」による福祉問題解決のプロセスの重要性を確認してきた。

本会のこれまでのプロセス重視から、令和2年度の本会活動テーマを「つながるご近所の再構築の決め手は一体何か -ご近所福祉の復活-」(近助とは何かを探る)を掲げる。そして、「地域環境」を再検証するとともに、地域住民一人ひとりが、住み慣れた生活圏域である「ご近所の再構築」に向けて英知を出し合う。



Our Life 133 号

- ＊ 内 容 ＊
- 25周年の節目の2020年度は、コロナ禍の厳しい地域社会とともに ……P.1
 - 「調査報告」と「ご近所福祉かるた」をもとに「第3回公開型研修会」開催 ……P.2
 - 「ご近所福祉その意識と実態調査報告」シリーズ② ……P.3
 - 2021年度「第1回公開型研修会開催案内」「事務局日誌拝見」「編集後記」 ……P.4

25周年の節目の2020年度は、コロナ禍の厳しい地域社会とともに 3つの活動基調に基づき、「ご近所福祉」を発信し、2021年度に繋ぐ

コロナ禍の厳しい地域社会とともに、25周年の節目の2020年度は「つながるご近所の再構築 決め手は一体何か ご近所福祉の復活 一近助とは何かを探る」を活動テーマに掲げて取り組んできた。

改めて、本会の原点を振り返ると、阪神淡路大震災発生1年後、学会からの要請で「第11回学会現場セミナー」（2日間）を浜松市で開催するにあたり、静岡県内関係者60名程が開催実現に向けて運営に関わり、故初代会長 一番ヶ瀬康子氏が、震災政府復興委員のお立場から、「福祉文化を拓く一阪神大震災の経緯をとおして」（この講演内容は、その後、一番ヶ瀬康子著「福祉文化へのアプローチ」ドメス出版に紹介されている）の「基調講演」の熱い思いに学び合った関係者が、静岡に福祉文化を拓こうと、約40名が賛同し平成8年9月結成し、ここに、25年目の節目の活動となった。「災害と福祉文化」を追求する「地方発福祉文化の創造」に取り組む市民活動集団ともいえる。今、コロナ禍の厳しい社会状況下において、災害問題をはじめ、長寿者・子どもの問題にとどまらず、地域社会全体の個人志向化・希薄化と共に、福祉コミュニティ組織運営のあり方も複雑多様化した課題が浮き彫りになっている。

本会は、結成以来25年間、本会規約に掲げられた、**＊第一「専門性と市民性の融合の関わり」** **＊第二「公開型地域総合型学習の企画と実践」** **＊第三「課題解決に向けたプロセス重視」**の3つの活動基調もとに、さらに、つぎの「3つの柱立て」をもとに活動を展開してきた。

＊第1の柱立て「啓発学習事業」「静岡発(地方発)福祉文化の創造」をめざして、県内各地の実践活動に学び「課題提起」をする「地域総合型啓発学習」に取り組んできた。

＊第2の柱立て「調査研究事業」この25年間、一貫して、その時代の社会問題を検証する目的で、25種類の調査を県民の協力をもとに取り組み、その結果をその都度、県民と共に地域総合型学習を通じて、課題解決に向けた議論を深め合ってきた。

＊第3の柱立て「実践地区活動事業」広く県内各地の実践事例を共有し合い「地域診断」をし、確かな地域性を把握し、さまざまな実践活動を展開しながら、「協働」による福祉問題解決のプロセスの重要性を確認してきた。

令和2年度の本会活動テーマは「つながるご近所の再構築の決め手は一体何か 一ご近所福祉の復活一」（近助とは何かを探る）を掲げ、「地域環境」を再検証するとともに、地域住民一人ひとりが住み慣れた生活圏域である「ご近所の再構築」に向けて英知を出し合うことを働きかけ、厳しい地域社会の状況下「ご近所福祉その意識と実態調査」に取り組むことが出来た。2021年度は、「地域を家庭化する“ご近所福祉”を創る支えあいを探る」を活動テーマに、今年度の活動を踏襲する取り組みを展開したい。

特に、「見える化」「わかる化」した、地域総合型学習（世代間交流）の呼び掛けを、平成27年度に取り組んだ、長寿者（高齢者）孤立・孤独防止から誕生した「若者発 ご近所福祉かるた」の活用拡大とともに、今年度実施した「ご近所福祉その意識と実態調査結果」から浮かび上がった数々の課題の改善解決に向けた取り組みをもって、せめて、家庭機能を生活圏域の地域で構築する「地域を家庭化する」ことを探っていきたい。

Life・Culture & Welfare

地域から発信 福祉を文化へ

Our Life 134号

静岡福祉文化を考える会

代表 平田 厚

〒424-0841 静岡市清水区追分 3-5-17

MPD 法人員の会内 Tel:054-367-2878 Fax: 054-367-2884

編集委員

藤下品子 古原貴彦 河野恵介 平田厚

* 内 容 *	➤ 2021年度赤い羽根地域福祉活動助成事業決定……………P.1
	➤ 「共創社会実現研究会」を設置し、2021年度事業が始動……………P.2
	➤ 「ご近所福祉その意義と実態調査報告」シリーズ●……………P.3
	➤ 2021年度「第2回公開型研修会開催案内」「事務局日誌拝見」「編集後記」……………P.4

2021年度赤い羽根地域福祉活動助成事業決定

“若者発ご近所福祉かるた”活用拡大と住民福祉教育の開拓に取り組む

2021年度事業に向けて、昨年5月に静岡県共同募金会に「赤い羽根共同募金助成事業」申請した。その後、審査会を経て、このたび、助成決定をいただいた。事業タイトルは「若者発 ご近所福祉かるた」活用拡大と福祉教育開拓事業。今年度の本会の活動テーマ『地域を家庭化する “ご近所福祉”を創る支え合いを探る』を具現化していく福祉文化実践活動である。主な内容は、「共創社会実現研究会」の設置、「平成27年度赤い羽根共同募金助成事業」により制作した「若者発 ご近所福祉かるた」の増刷、そして「かるた利用の手引書」の制作に取り組む。改めて、「若者発 ご近所福祉かるた」の誕生の経緯を振り返ると、平成20年度から平成26年度の7年間、県委託事業「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」に取り組んだ。その展開は、一貫して、世代や領域を超えた“ご近所福祉の再構築”に向けた協議を積み重ね、各種公開型研修会等様々な学び合いの中から、若者中心とした研修参加者が、現実の社会を直視しながら語り合う中で、「かるたの製作構想」が浮上し、「読み札」の創作取り掛かった。



また、併行して「長寿者宅訪問型研修会」を開催し、若者中心に、約5か月間に、分散型で延べ152名が長寿者（100歳）宅を訪問し、尊い「ご近所福祉」を学び合い、200余のキーワードを浮き彫りにするなど、地域の現状と課題を整理する作業を重視した。

これからの地域総合型学習を深めるために、「かるた」の活用方法や各地域への普及方法について協議を深めた経緯がある。一方、「読み札」の制作については、長年、福祉活動にご理解をいただいている、漫画家 法月理栄様のご理解とご支援をいただき、制作に全面的な協力をいただき実現する運びとなった。

- このたびの「赤い羽根共同募金助成事業」の具体的な取組みは、
- (1)平成27年度に配布・設置した関係団体等の活用状況等を把握。(5月中)
 - (2)「共創社会実現研究会」設置(期間中 4回 5月/7月/9月/11月)
これまでの事業の検証と今年度の企画及び活用方法(手引書作成)と新規配布設置開拓計画、ご近所福祉と地域づくり(協働)の提言。
 - (3)「若者発 ご近所福祉かるた」の増刷作業(100セット)
 - (4)「若者発 ご近所福祉かるた利用の手引書」の作成(200部作成)を「共創社会実現研究会」等により企画検討し編集する。
 - (5)活用拡大と有効活用に向けた研究協議。
 - (6)より身近な住民の生活圏域において活動する「焼津福祉文化共創研究会」 「協働」による取り組みにより連携を深め成果をあげる。
 - (7)成果物をもとに、県内各地域で、世代を超えた具体的な実践の場において活用方法や、地域づくりについて検証し、地域課題解決に向けた住民福祉教育の開拓に取り組む。
 - (8)本事業を「ご近所福祉による地域づくり(共同募金活動の広報啓発活動を含む)」を各委員会及び「共創社会実現研究会」において総合的に検証する。



令和3年度 第3回公開型研修会で「若者発 ご近所福祉かるた」のこれからの有効活用と「福祉ってなに？461名の子どもたちに関きました」調査結果を検証

主任児童委員、大学教授、地域実践者、さわやかクラブ役員、自治会役員、社会福祉協議会職員、地区組織団体役員、地域活動役員、介護事業所責任者、企業経営者、民生委員経験者、本会会員等20名で議論



Life・Culture & Welfare 地域から発信 福祉を文化へ

Our Life 140号

静岡福祉文化を考える会

代表 平田 厚

〒424-0841 静岡市清水区追分 3-5-17
NPO 法人東の会内 Tel:054-367-2878 Fax: 054-367-2884

編集委員

藤下品子 古壁貴彦 河野恵介 平田 厚

- ＊内 容 ＊
- 2022年度 第1回公開型研修会で、新たな参加者と足元の福祉文化を大いに語る……P.1
 - 「ホッとできる豊かな地域づくりを拓く」をテーマに令和4年度本会活動スタート……P.2
 - 「福祉ってなに？461名の子どもたちに聞きました」調査報告 ―その2―……P.4
 - 「第2回公開型研修会開催のご案内」「事務局日誌拝見」「編集後記」……P.4

●「静岡発 福祉文化の創造」26年間のプロセスを探る

2022年度 第1回公開型研修会で、新たな参加者と、足元の福祉文化を大いに語る

27年目を迎え、2022年度本会活動計画に基づき、第1回公開型研修会を5月21日（土）静岡市清水区追分「寄ってっ亭」で開催した。

新たな参加者も加わり、今回は、20代から70代まで幅広い年代層に加えて、男女均等な参加者層は、地域社会を凝縮した環境でもあった。

開会にあたり、主催者から、お互いに気楽に話れる雰囲気をつくり、自由に話し合いが出来ることを期待する旨、参加者に呼びかけた。

「基調報告：静岡発 福祉文化の創造 27年目への挑戦 改めて、共創社会を探る」では、これまで、研修会において、毎回「福祉文化」を述べてきた。今回は、改めて、「福祉文化」をそれぞれの参加者の立場で、考えるために、「福祉文化のプロセス」を問い質した。

「福祉文化」は「造語」「合成語」から成り立ってはいるが、今日までの社会の動きの中で、受け止めていかなければならないことを確認した。

「歴史的な背景」では、1962年代 高度経済成長期 瀬生活協同組合事業として、組合員のお互いの支え合いをもとに、互助活動から「福祉文化事業」が生まれていること。1981年代 国際障害者年では、「ノーマライゼーション」のもとに、「福祉は文化なり」の提唱があったこと。1987年代「介護福祉士・社会福祉士法」のあと、1989年代「日本福祉文化学会結成」は、全住民の問題としての取組「専門性と市民性の融合」「理論と実践の融合」は、本会結成につながっている。

1997年代「基礎構造改革」に「住民の積極的な参加による福祉文化の創造」が加わり、「福祉文化」が行政事業にもなってきたこと。

「日本福祉文化学会」が大切にしていた「現場に学ぶ」「実践に学ぶ」、1995年代「第11回学会静岡現場セミナー」を開催し、1996年代「静岡福祉文化を考える会」を結成し、誰もが豊かに生きたいという思いが福祉の本命と、「静岡発（地方発）福祉文化の創造」を呼び掛けて今日にいたっていること、それぞれの地域活動の原点は何か？今をどう語るか、また、これからをどう語るかを問い質した。

研修会では、「26年間の静岡福祉文化を考える会の歩み」「2022年度静岡福祉文化を考える会の活動計画」を提示し、それぞれ、参加者の立場で「私の原点」「プロセス」「思い」の置き換えを呼びかけた。

また「福祉文化」を、「人々が暮らし合う生活の中で考える」「人々のこれまでの暮らし（歴史的な視点）から考える」「人々の暮らし全体・暮らしそのものから考える」「人々の暮らし合う環境から考える」「人々の暮らしを担う立場から考える」以上「5つの視点」の意義を確認し合った。研修会は、前段の「アイスブレイク（自己紹介）：2022年度の私は変わります」とともに、「円卓トーク：今こそ出番、福祉文化を地域づくりの礎に」で大いに語り合った。



Life・Culture & Welfare 地域から発信 福祉を文化へ

Our Life 145号

静岡福祉文化を考える会

代表 平田 厚

〒424-0641 静岡市清水区追分 3-5-17

NPO 法人泉の会内 Tel:054-367-2878 Fax: 054-367-2884

編集委員

藤下品子 古屋貴彦 河野恵介 平田 厚

* 内 容 *	➢ 公益財団法人愛恵福祉支援財団助成による、今年度最後の「第3回公開型研修会」開催…………… P.1
	➢ 協働団体焼津福祉文化共創研究会 2022年度の取り組みの成果 …………… P.2
	➢ 「ホッとする安心した地域づくりその意識と実態調査結果考察 その1」…………… P.3
	➢ 「令和5年度の活動の方向性」「事務局日誌拝見」「編集後記」…………… P.4

公益財団法人愛恵福祉支援財団社会福祉育成助成事業による「調査報告書」をもとに 令和4年度 静岡福祉文化を考える会最後の「第3回 公開型研修会」開催 研修テーマ「ホッとする豊かな地域づくりを描く」をもとに参加者大いに語る

2022年度 静岡福祉文化を考える会は、「ホッとする豊かな地域づくりを拓く“共創社会”実現を探る」を活動テーマに各種事業に取り組んできた。「公開型研修会」事業は、「第1回 静岡発福祉文化の創造の26年間のプロセスを探るーいまこそ、足元の福祉文化を話し合おうー」（5月21日開催）、「第2回 ホッとする、豊かな地域づくりは誰が担う？」（7月23日開催）を参加者とともに議論してきた。

最終回第3回研修会は、公益財団法人愛恵福祉支援財団社会福祉育成助成事業によりまとめた「ホッとする安心した地域づくりその意識と実態調査報告書」をもとに、研修テーマ：ホッとする豊かな地域づくりを描くを掲げ、①「足元発 福祉文化の創造」をもとに、「ご近所福祉」議論1年をまとめる学びの場 ②「ホッとする安心した地域づくりその意識と実態調査」結果からの提言を実社会で活かす議論をする場 ③ご近所福祉による共創社会実現に向けて、参加者とともにアイデアを出し合う場を「着眼項目」に、令和5年2月25日（土）静岡市清水区追分 NPO 法人泉の会「寄りっ亭」で開催した。

☆☆☆ ホッとする豊かな地域づくりを拓く“共創社会実現”に向けた提言 ☆☆☆

今回の研修会において、「ホッとする安心した地域づくりその意識と実態調査考察」から、確認したことは、

1. 住民は、「自分自身での支え」をもとに「家庭の支え」とつながること。生活の基盤（真の居場所）は「家庭・家族」であることを認識し、望ましい情緒安定環境に心掛け、人間関係を保持し、「地域社会全体へのつながり」を常に心がける。そして、人生を振り返った時、生きがいと感じられるような日々の生活に励むこと。
2. 潤いのある生活を営む上で、非常に重要な役割を持つ地域コミュニティを維持し、一人でも安心して暮らせる地域に向けて、「地域社会での支え」につなげていく。地縁組織の運営においては、「運営の見える化」に努め、排他的にすることなく、全ての住民が地域参加できる環境整備を整えること。
3. 取り巻く地域環境の中で、工夫をして「語れる環境」に心掛けること。
4. 地域において、在宅生活を維持していくために、「専門性と市民性の融合」の視点で、自助努力をもとに、公助依存に終始することなく、日頃から、地域全体で課題解決を協議する環境を確保すること。
5. 「ご近所福祉復活」は、日頃から、身近なご近所同士で「一緒に活動する人（仲間）がいること」「一人ひとりが気軽に参加できる活動の機会があること」「地域が抱えている課題の情報が提供されていること」「公共的な活動を積極的に評価し支援する仕組みがあること」を共有すること。



①

Life・Culture & Welfare 地域から発信 福祉を文化へ

Our Life 146号

静岡福祉文化を考える会

代表 平田 厚

〒424-0841 静岡市清水区迫分 3-5-17

NPO 法人泉の会内 Tel:054-367-2878 Fax: 054-367-2884

編集委員

藤下品子 古屋貴彦 河野恵介 平田 厚

- * 内 > 28年目の活動始動「福祉文化の原点を探る」をテーマ「第1回公開型研修会」開催…… P.1
- > 県内外の各方面から、「2022年度調査報告書」の反響紹介 ……………P.2
- 容 > 「ホッとする安心した地域づくりその意識と実態調査結果考察 その2」……………P.3
- * > 「第22回静岡福祉文化研究セミナー」開催案内「事務局日誌拝見」「編集後記」……………P.4

**静岡福祉文化を考える会 28年目の活動始動 当面「ご近所福祉検証期」として取り組む
世代や領域を超えた、つながる“ご近所福祉”を描く
「静岡発 福祉文化の創造とは ー福祉文化の原点を探るー」を研修テーマに
「第1回 公開型研修会(会員全体会)」を開催**

2023年度、本会は28年目の活動に入った。『草創期』から、『協働期』、そして、『実践融合期』、『共創社会実現期』を経て、2020年度以降、「ご近所福祉の復活」、「地域を家庭化する支え合いの検証」そして、「高齢者からの提言」と、『ご近所福祉検証期』へとつないでいる。

「わかる化」、「見える化」、「見せる化」をもとに、地域福祉教育教材の開発として「若者発 ご近所福祉かるた」を誕生させて、更には増刷と「かるた利用の手引き」の発行にこぎつけて、福祉文化実践活動に取り組んできた。本年度の活動テーマ「世代や領域を超えた、つながる“ご近所福祉”を描く」を掲げて、盛働による地域課題改善に向けた福祉文化実践活動がスタートした。

長引く、厳しいコロナ禍から、少しずつ明るい見通しも見えてきた。4月22日に、静岡市清水区「寄ってっ亭」で、「静岡発 福祉文化の創造とは ー福祉文化の原点を探るー」を研修テーマに、「第1回 公開型研修会(会員全体会)」を開催した。“私にとって原点って?”をもとに、参加者が自分史を描くように自己紹介をした。そして、「基調報告：地域活動の原点を問う」につなげながら、本会の「静岡発 福祉文化の創造」27年間の活動の原点にも触れながら、若者のご近所観や、今大人社会が描いているご近所を共有しながら「地域活動における原点」を理解し合うことを確認した。本会が昨年度実施した、「高齢者対象調査結果」を議論に加えたり、本会が制作した「若者発 ご近所福祉かるた」誕生のプロセスを紹介しながら、和やかに意見を交わした。後半の「円卓トーク：私のご近所を点検する」では、今日、地域社会において、取り上げられている「高齢者世帯を取り巻く事例」をもとに、参加者それぞれの地域の実情を踏まえながら、問題解決のための「地域力」「ご近所力」等の支援方法について意見を出し合い、改めて、「ご近所福祉」を確認しながら、「公助」や「制度」にすべてを依存することなく、地域における支え合いについて確認し合った。

まとめにかえて ご近所福祉とは

1. お互いを認め合う
2. 対等である 上下をつくらない
3. 見返りを求めない
4. 継続的である
5. 無理がない

ご近所福祉 = おすすめ分け



①

Life・Culture & Welfare 地域から発信 福祉を文化へ

Our Life 151号

〒424-0841 静岡市清水区追分 3-5-17
 NPO 法人泉の会内 Tel:054-367-2878 Fax: 054-367-2884
 静岡福祉文化を考える会 代表 平田 厚
 編集委員
 藤下品子 古屋貴彦 河野恵介 平田 厚

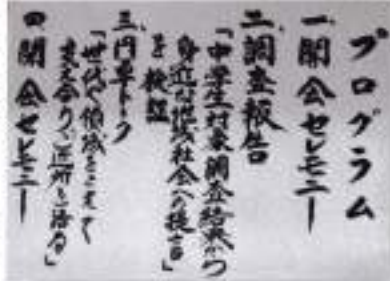
* 内 容 *	➢ 第2回公開型研修会開催 中学生対象調査結果を踏まえて、ご近所を議論…………… P.1
	➢ 2023年度 静岡県社会福祉協議会ふれあい基金助成事業経過報告 ①-1 …………… P.2
	➢ 2023年度 静岡県社会福祉協議会ふれあい基金助成事業経過報告 ①-2 …………… P.3
	➢ 「29年目の活動の方向性」「事務局日誌拝見」「編集後記」…………… P.4

2023年度 静岡県社会福祉協議会ふれあい基金助成事業
私にとって「ご近所」とは 中学生の意識と実態調査結果報告
第2回 公開型研修会を開催 大いに、「ご近所」を語る

本会は、平成20年代から、今日まで「ご近所福祉ってなに？」の議論を重ね続けてきた。また、結成以来、「調査研究事業」を重視し、これまで27年間にわたり、「大人対象」「子ども対象（小学4年生～6年生）」「高齢者対象」の各領域における「意識と実態調査」に取り組んできた。今年度、初めて、「中学生対象」に「私にとって「ご近所」とは 中学生の意識と実態調査」に取り組んだ。なかなか、身近な地域社会で、中学生と向き合う機会が少ない今日あって、長引くコロナ禍下と連日の猛暑も加わり、大変な時期にもかかわらず、県内各地から、尊い中学生の意見が寄せられた。

近い将来において、地域の担い手として、大いに期待したい中学生からの意見をもとに、去る2月17日（土）静岡市清水区追分「寄ってっ亭」において「調査報告研修会」（第2回公開型研修会）を開催した。
 (1)「静岡発 福祉文化の創造」28年間を振り返る学習の場 (2) 世代を超えた身近な生活圏の課題解決に向けた議論（「生活会議」）をする場 (3) 中学生対象の調査の意義を検証する場 (4) これまでとこれからの「ご近所福祉」を語り合いの場 (5) 「ご近所力」で、「共助社会の再構築」を学び合う場等を研修着眼項目に、世代や領域を超えた、つながる「ご近所福祉」を大いに語りあった。

「円卓トーク」では、「全ての住民に、地域を見える化・わかる化する工夫が必要」「いかにして、地域の福祉力をアップするかは課題は大きい」「今の地域社会には実体験の地域環境が少ない。いつでも体験できる環境づくりが求められている」「今の中学生は、意外と地域のことを考えていると感じた。こうした提案に応えるようにしていく仕組みづくりが急務だ」「やはり、地域は楽しいと感じることが出来る努力が必要だ」「基本は、家庭がしっかりしていること。そのためには、子を持つ親への教育が求められる。専門性と市民性を融合していく地域環境をつくる工夫が必要である」「教育とコミュニティを考えていきたい」「子どもは社会の宝物をしっかりと認識してきたい」「地域の情報を常に共有すること」「地域が見えないとつながらない」等意見が交わされた。」



①

Life・Culture & Welfare 地域から発信 福祉を文化へ

〒424-0841 静岡市清水区迫分 3-5-17
 MPO法人泉の会内 Tel:054-367-2878 Fax: 054-367-2884
 静岡福祉文化を考える会 代表 平田 厚
 編集委員
 藤下品子 古原貴彦 河野恵介 平田 厚

Our Life 152号

* 内 容 *	➢ 2024年度「若者発 ご近所福祉かるた」によるご近所福祉検証事業助成決定…………… P.1
	➢ 2024年度「若者発 ご近所福祉かるた」によるご近所福祉検証事業助成決定…………… P.2
	➢ 2023年度 静岡県社会福祉協議会ふれあい基金助成事業経過報告 ①-2 …………… P.3
	➢ 「29年目の活動の方向性」「事務局日誌拝見」「編集後記」…………… P.4

「赤い羽根」地域福祉活動（広域団体）支援事業 2024年度「若者発 ご近所福祉かるた」による ご近所福祉検証事業助成決定

地域コミュニティへの住民の参加の希薄化傾向が伺える中、加えて、長引く、コロナ禍で、これまでの地域活動が十分に取り組むことが出来ない状況が、ここにきて、少しずつ地域環境に明るい兆しが伺えるようになった。こうした社会の動きの中で、本会は、これまで、平成20年度から平成26年までの7年間にわたる県委託事業「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業」を通じて、高齢者の孤立・孤独防止事業に取り組み、多くの若者が、長寿者訪問型研修会で、ご近所のふれあい・ささえあいこそ重要な解決策と高齢者から学びあった。



延べ24回、243名の若者からでた400の意見から、世代を超えたご近所を学ぶ教材として、2015年度（平成27年度）県共同募金・広域福祉活動助成事業により、「共創社会実現研究会」を設置し議論を重ね、「若者発 ご近所福祉かるたの創作と地域学習における活用事業」で「若者発 ご近所福祉かるた」誕生した。

幼児から大人まで、世代を超えて、身近な地域の実践活動の場や行事の中で、「地域総合型学習」として「見える化」「わかる化」の工夫をし、楽しみながら安心して暮らし合う生活圏づくりをめざすことができるように地域福祉教育教材として5年間が経過した。その後、「ご近所福祉その意識と実態調査」の調査結果から、改めて、高齢者（長寿者）の社会参加、集まる居場所の活性化、学校教育と社会教育の融合による課題等が浮き彫りになり、2021年度（令和3年度）、静岡県共同募金会助成事業「若者発 ご近所福祉かるたの活用拡大と住民福祉教育の開拓事業」により、「かるたの増刷」（再版100セット合計200セット）と、「かるた」の有効活用を目的に、「若者発 ご近所福祉かるた利用の手引きの作成」を作成した。今日、児童福祉領域（学童保育）や、学校教育領域（特に、コミュニティスクール事業関連）をはじめ、世代間交流の領域、高齢者の教養研修の場、社会教育領域（地域講座）等、県内各地から、「かるた」提供の問い合わせがある。赤い羽根共同募金活動を住民に身近に呼びかけることが出来ることから、「かるた増刷」（三版100セット 合計300セット）の必要性とともに、これまで「かるた」を利用した、各種団体からの「活用レポート」（報告）と、改めて「活用状況調査」を実施し、活用実績（報告）を取りまとめ「若者発 ご近所福祉かるた活用事例集」を作成し、「かるた」の有効活用を働きかけるとともに、「ご近所福祉」をさらに推進するため、2023年5月15日に申請し、令和6年3月13日に、2024年度助成事業として決定、3月28日 助成交付及び説明会出席した。

●事業の展開と具体的な取り組み

- (1)これまで「かるた」を提供した地域・領域以外から、寄せられて「かるた提供希望先」に、活用の具体的な内容について、状況把握をする。
- (2)これまで「かるた」を提供した地域・領域から寄せられた「活用レポート」〔報告書〕を取りまとめるとともに、改めて、「活用状況調査」を実施し、地域の現状と課題を明らかにする。
- (3)本会と協働関係の「鏡津福祉文化共創研究会」をはじめ、本会の活動に協力をいただいている各団体からの意見をもとに、「かるた」の配分及び「活用事例集」の編集協議を進める。
- (4)本会に設置する「共創社会実現研究会」（本会会員と地域で実践している実践活動者等）において、

①

Life・Culture & Welfare 地域から発信 福祉を文化へ

Our Life 156号

〒424-0841 静岡市清水区追分 3-5-17
NPO 法人泉の会内 Tel:054-367-2878 Fax: 054-367-2884
静岡福祉文化を考える会 代表 平田 厚
編集委員
藤下品子 古屋貴彦 河野恵介 平田 厚

- * 内 > 2024 年度赤い羽根助成事業が完了し「報告書」提出…………… P.1
 > 2024 年度最後の研修会開催…………… P.2
 容 > 「2025 年度活動計画」を検討/「30周年記念誌」の発行に向けて…………… P.3
 * > 「2025 年度第 1 回公開型研修会（全体会）」開催案内/「事務局日誌拝見」「編集後記」…P.4



2024年度「赤い羽根」地域福祉活動（広域団体）助成事業が完了 「事業報告研修会」を開催し、事業報告書提出

本会は、「2024年度赤い羽根共同募金助成事業」により、「若者発 ご近所福祉かるたによるご近所福祉検証事業」に取り組み、このたび全ての事業を終了した。

- (1)「共創社会実現研究会」開催（全8回）
助成事業を円滑に取り進むための協議（この10年間のかるたの活用状況調査に関すること、増刷かるた配布提供先の検討・決定、かるた活用状況の検証、かるた活用事例集企画・編集協議等）及び、今日的な地域課題に関する議論を本会会員、協働団体焼津福祉文化共創研究会、地域実践者、地域活動に関心のある市民等により開催した。
- (2)「若者発 ご近所福祉かるた活用状況調査」の実施
5月⇒これまで10年間に寄せられた「かるた活用レポート」（活用報告）の整理作業、平成27年度・令和3年度に「かるた」を提供した団体・グループ等に対して、かるた活用状況調査実施に関する協議
6月⇒かるた活用状況調査実施 ⇒かるた活用状況調査回収・考察 ⇒調査実施報告書作成とかるた活用事例集に原稿編集移行
- (3)「若者発 ご近所福祉かるた」の増刷(100セット)・配布先協議・配布提供
4月⇒印刷業者と協議（一部校正作業あり）
「共創社会実現研究会」を開催し、配布提供先を協議し、事業の具体化を図る。
5月⇒印刷業者との協議、発注、配布提供先確認
6月⇒ かるた納品
9月⇒かるた・事例集をセットにして「レターパック」で発送作業実施（52箇所）
- (4)「若者発 ご近所福祉かるた活用事例集」の作成
5月⇒企画書立案 8月⇒編集協議（漫画家・法月様）・原稿整理・編集（イラスト挿入）
9月⇒印刷発注・納品(200部)、かるた・事例集セットで配布提供作業
- (5)「赤い羽根助成事業」に関する県民への公表（啓発研修等）
・5/25 2/22 「公開型研修会」、11/30「静岡県福祉文化研究セミナー」開催
・「各民生委員児童委員協議会研修会」「静岡県コミュニティカレッジ」「県身体障害者福祉会中部地区研修会」等幅広く啓発研修を実施。

*これまで10年間、赤い羽根助成事業により制作した「若者発ご近所福祉かるた」は、県内各領域に計画的に配布提供してきた。今回の事業により、長引くコロナ禍によりコミュニティ意識の希薄化等地域の現状を把握することが出来た。

「かるた活用状況調査」の実施により、改めて、各方面に「ご近所福祉」の必要性を問題提起することが出来た。そして、「若者発ご近所福祉かるた」の有効活用を再認識する機会となった。

*平成27年度「若者発ご近所福祉かるたの創作と地域学習における活用事業」、令和3年度「若者発ご近所福祉かるたの活用拡大と住民福祉教育の開拓事業」そして、三度、今年度の「若者発 ご近所福祉かるた」によるご近所福祉検証事業」の持続的・啓発的取り組みにより「かるた増刷（合計300セット）」「かるた利用の手引きの作成」とこのたびの「かるた活用事例集」の作成により、コロナ明けの共助の再構築に向けて、小地域における「地域福祉教育教材」として「見える化」「わかる化」のご近所福祉の推進に活用領域を広げる努力をしていきたい。



Life・Culture & Welfare 地域から発信 福祉を文化へ

Our Life 158号

静岡福祉文化を考える会事務局

〒424-0841

静岡市清水区追分3-5-17 NPO 法人泉の会内

Tel054-367-2878 Fax054-367-2884

* 内 容 *	➢ 「ご近所福祉」から誕生した「浪蔵劇団」 このたび430回公演実現…………… P.1
	➢ シリーズ①「静岡発福祉文化の創造」30年の活動検証報告書を読む…………… P.2
	➢ 静岡発 福祉文化の創造30年を総括する「研修会」のご案内…………… P.3
	➢ 8月本会ブログアクセス件数・事務局日誌拝見・編集後記…………… P.4

平成21年度 静岡県委託事業「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業（高齢者孤立ゼロ対策事業）」で、県内唯一「小川第11自治会」が「ご近所福祉事業」に取り組み【浪蔵劇団】誕生……あれから、16年、なんと、このたび、430回公演が実現した

本会は、平成20年度から平成26年度までの7年間、静岡県委託事業「一人でも安心して暮らせる地域づくり事業（高齢者の孤立死・孤独死防止事業）」に取り組んだ。当時、大きな社会的な問題となっていた高齢者の孤立・孤独をいかに防ぐか、静岡県からの要請を受けて、「調査研究事業」「啓発活動・公開型研修会事業」そして「実践モデル地区事業」を主な事業として、県民に向けた事業を展開した。

7年間の事業の展開を、単なる机上論で終ることなく、それぞれの地域性をもとに、検証することを事業計画に位置付け、県内の各市町に「モデル実践地区」をお願いした。

2政令市を除くと、33市町（21市12町）のうち、14市（全体の67%）5町（42%）で、計19市町（58%）が精力的に取り組んでいただいた。この「実践モデル地区事業」は、ほとんど、市町社会福祉協議会に相談をして、承諾をいただいたそれぞれの市町から、関連地区をお願いして取り組んでいただいたが、当時、ご縁のあった小川第11自治会顧問の山口浪男氏に直接本事業について相談し、当時の自治会長様の了解を取りつけていただき、受託2年目（平成21年度）に、唯一、焼津市小川第11自治会は、自治会独自の取り組み事業を受け入れていただいた。この年度の「実践モデル事業地区」は、県内4地区で取り組んでいただいた。



＊平成21年度に、小川公民館（小川地域交流センター）にて、「ご近所福祉 N 小川」が盛大に開催された。



＊430回を演じる山口氏

地域社会では、「福祉」は他人事の認識が強く、特別な領域、難しい領域としか受け止められない状況にある中で、福祉を見る化・わかる化し、共感とともに感動を与える地域福祉教育の学びの場として、地域の課題を自治会役員等が演技をし「市民劇団」を立ち上げられた。それから16年が経過し、「浪蔵劇団」が、7月13日（日）に、小川地域交流センターで、第430回の公演が実現した。こうした尊い活動には原点がある。

山口浪男氏は、92歳を生き生きと演じていた。感謝である。



①

●シリーズ①「静岡発福祉文化の創造」30年の活動検証報告書を覗く

本会は、「静岡発 福祉文化の創造30年の軌跡を検証する」を2025年度の活動テーマに掲げ、これまでの30年間の道程を2023年度から現在まで、3年間検証準備作業に取り組んできた。

これからの共助社会再構築の提言として「人間らしい豊かさ実践30年検証報告書—静岡発 福祉文化の創造軌跡30年・草創期からご近所福祉検証期を迎える—」の作成作業に4月から本格的に取り組み、12月発行目標に、編集(第1章から第9章・資料編、本文264P)作業中である。本号から、シリーズで、「検証報告書」の内容(概要)を掲載する。

シリーズ①は「第1章「静岡発 福祉文化の創造の原点を辿る」

1「福祉文化」が語られる動きの中で、「第11回学会現場セミナー」開催が本会結成につながる

平成元年(1989年)7月16日に「福祉文化学会」(現 日本福祉文化学会)が発会された。学会は、「異業種交流的集団で、誰でも、気軽に福祉あれこれを和やかに語り合える学びの場」であることを知った。昭和の時代から平成の時代に入り、大きく社会福祉の仕組みが変わり、制度や資格で社会の問題を解決する動きの中で、これまで培われてきた「共助」をいかに維持できるか、世代や領域を超えて、豊かに暮らし合うことを、身近な地域社会で学習できる機会を大いに期待していた。

静岡県の地域特性をもとに、住民一人一人が、実践し、体験しながら学習(理論化)する、また理論を実践することを「福祉文化」と読み取りながら、そこには「専門性と市民性の融合」による地域づくりをかすかに期待をしていた。学会は、主な事業として、全国各地で「現場セミナー」を開催していることを知った。当時の記録から、学会の「現場セミナー」は、主に福祉施設において開催されているように感じた。

平成7年度(1995年)静岡県で「第11回現場セミナー」開催の要請があった。果たして、静岡の特性をもとに、「福祉文化」を学び合う現場セミナーを開催することが出来るか、多少の不安を抱きながら、「現場セミナー」実現に向けた道程を大切に、県内各地の地域活動実践者等に広く協力を呼び掛けることにした。当時を振り返ると、まず、福祉文化を学び合う「第11回学会現場セミナー」開催に向けた議論の最中、平成7年(1995年)1月17日に「阪神淡路大震災」が発生した。

改めて、「阪神淡路大震災」の生々しい教訓をもとに、「災害」をより身近に議論を展開して「東海地震」への備えを強固にしていこうと「阪神淡路大震災に学ぶ—災害と福祉文化—」をプログラムに加えることにした。有志約50名が、当日に向けて「実行委員会」を積み重ねながら、当時、主に高校生が中心となって、精力的に取り組み、改めて、地域学習とは、関係者だけの努力ではなく、世代を超えて、地域の共通課題を共有し、それぞれの立場で課題解決に向けた取り組みをすることを認識した貴重なプロセスであった。高校生は、大人集団と学び合うことで、地域参加活動に向けて大きな自信につながったと意見を述べた。企業市民の立場で参加された方々からは、企業感覚により、効率よく福祉活動を展開するノウハウを提供できることを確認できたと感じていた。当時、阪神淡路大震災政府復興委員の立場から、学会会長 一番ヶ瀬康子先生の基調講演は、「21世紀に向けて 福祉文化を拓く—阪神淡路大震災の体験をとおして—」を語っていただくことになった。この時代は、静岡県内各地において、静岡県教育委員会、静岡県ボランティア協会、県・市町村社会福祉協議会が連携し、福祉・ボランティア学習(活動)の推進により、高校生の地域福祉実践活動の動きが盛んな時期でもあったため、大いに、運営を円滑にすることが出来た。

静岡県民に、この機会に「福祉文化」発信するには、住民が暮らし合う身近な地域社会において学び合う場を検討しようと、若い層(高校生)から先輩市民実践者70名が賛同し、幅広い年代層で実行委員会を立ち上げ、開催実現に向けた議論を重ねた。精力的に「施設の社会化」を目指し地域福祉の拠点とした役割を果たしている、浜松市・浜松こども園の「福祉施設の実践発表」をプログラムにした現場セミナーにする2日間の「第11回学会現場セミナー」の開催が実現した。セミナー当日の運営には、開催地元浜松市近隣の高校生・専門学校学生がボランティアとして参加され、「若者と福祉文化」を浮き彫りにしたセミナーであったとも強調出来る。定員を大幅に超えた延べ460名余の参加者が全国各地から「福祉文化」を学び合った。



※基調講演は、一番ヶ瀬康子学会会長が熱い思いで「福祉文化」を語る



2日目は、各分科会助言者によるリレートークでまとめる

②

2 結成当時の「会員対象アンケート」を綴く

地域コミュニティ活動などを推進していく上で、一番課題になるのが、いかに会員一人ひとりが会の運営や活動に参画していくかである。私たちの活動目的は、単に個人レベルの資質向上ではなく、地域性を世代や領域を乗り越えて相互理解していくことにより、自ら実践の場で実証していくことにある。ここで、会発足当時に会員対象に実施した「アンケート」結果の「自由な意見—本会に期待すること—」を紹介する。

「幅広い分野の様々な年代の人が、積極的に参加できるような会の運営を望む」「まったく、福祉について、実務的な経験のない素人が、自由に意見交換できるように願う」「決まった内容を話し合うことなく、なんでも自由に語り合える仲間の集まりを期待したい」「対等に、若い人と活発に本音で語り合えるような会の運営を望む」「小さなことでも、多角的な話題を積極的に語れるようにしてほしい」「一方向からだけでなく、さまざまな分野から語り合いたい」「県内各地で実践活動を学べるフィールドを開拓していきたい」「一人一人が、主体的に参加できるようにしたい」「小グループの話し合いの場を持っていただくと話しやすい」

「他団体と良い関係で運営をしていくことを望む」「肩の凝らない地域実践活動をしていきたい」

3 本会結成時のネットワークを活かし「第18回日本福祉文化学会現場セミナー」開催実現

平成8年9月本会発足以降3年目の平成11年度には県内外から90名が会員となった。学生の変動や異動による退会届も激しかった。こうした本会の動きの中で、「日本福祉文化学会」から、ねむの木学園の宮城まり子先生に学ぶ「第18回静岡現場セミナー」開催要請があった。

本会の結成につながった「第11回学会現場セミナー」開催実現の時は、根本的に異なる取り組みをしていかなければならない。つまり、「静岡福祉文化を考える会」組織自体をもって、県内関係機関・団体に協力を呼び掛け「協働」による「静岡発(地方発)福祉文化の創造」による開催を実現しなければならぬ大きな課題があった。本会結成4年の実績をもとに、更に、この機会を大いに活かして、「静岡発(地方発)福祉文化の創造」に全力投球していこうと、本格的な準備に取り掛かった。主に、下記の各協議を具体化し、「現場セミナー」開催を実現した。



- (1) ねむの木学園 園長 宮城まり子先生 → 開催内容の理解と協議、会場提供の有無等
 - (2) 開催地元掛川市社会福祉協議会 → 全般協議(参加者の送迎方法、広報啓発、宿泊手続き等)
 - (3) 東海福祉専門学校 → 当日の案内誘導等学生の協力協議
 - (4) 掛川グランドホテル → 県外参加者の宿泊受け入れ協議(割引交渉)
- 学会事務局との最終協議により、「開催要項」が出来上がった。

これまでの30年間、「静岡発 福祉文化の創造」を県内各地に発信できたか、身近な地域を参加者とともに語り合う「第24回静岡県福祉文化研究セミナー」と「第2回公開型研修会」の御案内

●「第24回静岡県福祉文化研究セミナー」

「富士山麓 いのちと暮らしによりそう福祉文化の創造と推進」をテーマに開催した「第13回日本福祉文化学会全国大会静岡大会」を「第1回研究セミナー」と位置づけ、静岡県から「福祉文化の火」を消すことなく県内外に発信しようと学び続けて、ここに24回目のセミナー開催。

これまでの地域実践活動を振り返りながら、身近な地域で、いかに支え合いをすることが出来るか、語り合い、「共助社会の再構築」に向けて、「今、あなたの地域は何色ですか」、そして「どのような色にすることが出来ますか」のアイデアを出し合いながら、さらに、「私にとってご近所福祉とは」を学ぶ。

*日 時 令和7年11月29日(土) 13:30~15:30

*プログラム (1) 基調報告 「地域活動の融合と協働を探る」
(2) 円卓トーク 「私の地域を何色に変えられるか」

●「第2回公開型研修会」 本会30年間の福祉文化実践活動を検証する研修会「30年誌」で検証

*日 時 令和8年3月7日(土) 13:30~15:30

*プログラム (1) 基調報告 「静岡発 福祉文化の創造30年の軌跡」
(2) 円卓トーク 「地域活動のプロセスを探る」

◆いずれも、会場は、静岡市清水区退分3-5-17「寄ってっ亭」(電話054-367-2878)です。

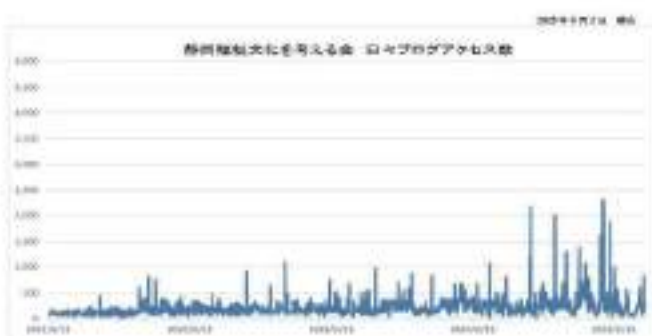
問い合わせ・参加申込先: 〒425-0041 焼津市石津3丁目10-8 静岡福祉文化を考える会 代表 平田 厚
TEL & FAX 054-624-1924 携帯 090-4861-4547 Email monogusa-tomy@theia.ocn.ne.jp

「ブログ」アツで、福祉文化実践活動「見える化」「わかる化」の情報発信中

「静岡福祉文化を考える会」では、日常的に「委員会議事録」「機関誌 OUR LIFE」「各種調査」「活動関連資料」等を「ブログ」にアップし、「見える化」「わかる化」に努めている。右の表は8月1日現在のブログアクセス件数状況である。

協働団体：焼津福祉文化共創研究会の全面的な協力と支援をいただき、データ入力作業を継続している。

身近な地域活動への関心の高まりがこうした統計からも伺える。



☆☆☆☆ 事務局日誌拝見(5/24~9/01) ☆☆☆☆

05/24	第225回委員会開催 2025年度 第1回公開型研修会開催(本会全体会)
05/30	「OUR LIFE157号」発行・配布、メール送信実施 研修会参加者への情報提供 会員宛に、全体会及び各種資料送付、および当面の連絡文書送付
05/26	「OUR LIFE157号」編集・発行作業
06/01	会員及び協力者に「第1回公開型研修会(全体会)関係資料」「OUR LIFE157号」発送
06/13	袋井市地域福祉連絡会において、本会活動および「ご近所福祉」について説明
06/14	6月焼津福祉文化共創研究会定例会で、「本会30年誌」に「第9章 研究会との協働の取り組み」を組み入れることを了解いただく
06/18	「かるた活用事例集」増刷30冊納品(25,000円)順次、発送作業をする
06/21	「30年誌」の執筆状況について協議(今後の見通し)
07/07	県コミュニティづくり推進協議会より、2025年度コミカレ研修ポスターに「若者発ご近所福祉かるた」を活用の申出有(了解する)
07/08	焼津市内の活動実践者より「若者発ご近所福祉かるた」の借用申し出あり(7/17使用)
07/13	「第430回浪崎劇団公演」見学(事前に、関係方面・マスコミに周知連絡)
07/20	日本福祉文化学会研究紀要編集委員会より、「静岡福祉文化を考える会組織化の意義—30周年を迎えた静岡福祉文化を考える会のこれまでとこれから—」の寄稿依頼あり 10/30締め切り(了解する)
08/10	「30年誌」に関する協議
08/30	「公益財団法人愛恵福祉支援財団 社会福祉育成活動助成事業」申請手続き作業実施
09/01	「OUR LIFE158号」編集作業(~9/10) 「30年誌」の印刷業者発注作業前の最終調整作業(~12/10) 会員及び関係者等に「第24回福祉文化研究セミナー」案内及び「OUR LIFE158号」を発送する。

●福祉文化実践活動をご一緒にしませんか。

「静岡福祉文化を考える会」は、阪神淡路大震災(1995)翌年の平成8年9月1日に発足し、「静岡発 福祉文化の創造」をもちに、関係団体との協働で、身近な福祉問題を活動テーマに、30年間、福祉文化実践活動を展開中。

特に、2020年度(令和2年)以降は、「福祉文化とご近所福祉」を基に、活動を具現化している。本会の活動基調は、「専門性と市民性の融合」「公開型地域総合学習の企画と実践」「課題解決に向けたプロセス重視」。

更に、「調査研究活動」「実践活動の検証」「啓発学習」の3つの具体的な柱立てにより活動に取り組んでいる。◆ブログにより、広く本会活動を発信中。

◆関心のある方は、下記に問い合わせを。

- 会費：社会人 3,000円 大学生以下 1,000円
- 問い合わせ・連絡先：424-0841 静岡市清水区湯分 3-5-17
NPO法人泉の会内 静岡福祉文化を考える会事務局
Tel054-367-2878 Fax: 054-367-2884

特に、「赤い羽根共同募会助成事業」により、この10年間で、300セット作成した「若者発ご近所福祉かるた」は、各地から活用報告が届いている。更に「ご近所福祉」の推進を大いに期待したい。3年前から編集作業に取り組んできた本会「30年誌」は、12月末に発行の見通しとなった。「静岡発福祉文化の創造」をしっかりと検証したい。



静岡福祉文化を考える会のQRコード 静岡福祉文化を考える会のQRコード